
気まぐれセカンドライフ

誰かの何か

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれセカンドライフ

【Zコード】

Z0239Z

【作者名】

誰かの何か

【あらすじ】

高校生の主人公である潤が突然異世界へ飛ばされて、ある時は二ート、またある時は宮殿の主になつたりと、セカンドライフを満喫していく。そんなお話。

潤「仕事したり戦つたりしてリアルが充実してはいるが、リア充とは違うと思わざるを得ない今日この頃…チクショウ、目から汗がとまらねえ」

1 なんか、死にました（前書き）

はじめまして

作者の文才の都合上、亀更新となりますが、よろしくお願ひします

では、はじまりはじまつ～

1 なんか、死にました

大地に邪なるもの埋め尽くす時、虚空より人舞い降りて、混沌と共に世界を破壊するであろう。 (『ワイスニルの予言』)

「ん、ここは?」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見あたらないから真っ白い空間か?

まあ、どちらにせよここは俺の知らない場所には違いない。

・・・・・エエ～ッ!..

まあ、落ち着きましょうや俺。

まずは今までの行動をおさらいしよう。

学校から帰つて来る 夕飯を食べる 勉強、と思わせてリハベ 1
2時を過ぎたので寝る 日が覚める 今

ああ、もしかしなくともこれ夢じや…

「夢じやないよ」

五月蠅いな、人の思考に割り込むな。

・・・・・エエ～ッ!! (本田2回目)

「な、なんだお前。つてかどこから出でてきたー」

さつき俺に声を掛けたであろうアニメに出てきそうな少女に向かつて俺は言った。

「私?私は転生の女神だよ~?」

この娘は可哀想な子という認識でいいのかな。

「違うもん。転生の女神だもん!」

んな事言われたって…

「じゃ、女神らしい事見せてよ」

「いじょ~」

そう言つと女神（自称）は向やから小声でしゃべり始めた。
シ、シユールだ…

ボワッ

独り言を終えたらしい少女の手の平には炎の球が現れた。

「これが魔法。どう? これで私が可哀想な子じゃないって分かった
でしょ」

「こんなのが見せられたら

「お、おひ。本當らしいな
としか言えませんよ。はい。

「で、漸く本題何だけど、ビーハヤリあなたは寝ている時に死んじや
つたらしいの」

ん?

「ちょ、ちょっと待て。え? 僕死んだの?」

「うん。原因もよく分からず」

しかも原因不明~!

つてか読めていたぞ、この後俺は異世界に転生されて、厄介事に巻
き込まれていくんだな。で、この転生の女神（自称）が俺の案内役
と。

はいはいテンプレ

「その通り! あなたはこれから異世界でセカンドライフを始めるの」
提案じやなくて決定事項かよ…つてか心を読むな。

「俺に拒否権は?」

「ない!」

「デスよね~。」

「まあ、そのまま異世界つてのも可哀想だから何か願いを3つまで

叶えてあげるよ

テンプレキター！

「じゃ、今まま何も変えずにスタートして

「良いの？^{チート}反則的な能力も与えられるよ？」

「良いんだよ。俺にも色々あるからな…」

よし、いい感じでミステリアスな感じになりそうだ。

「なる程。元から身体能力が並外れてるのか～」

「俺のミステリアスを返せ～！！」

KY女神～！！もう流行つてない？さいですか。因みに俺は今アーラル〇ル〇ル〇になつていてる。

「な、何で落ち込んでるのかよく分からぬけど、『めんなさい』」「はあ…まあいいや。で、2つ目は異世界でもお前と話が出来るようにして」

異世界の知識なんて俺にはないからな。

「いいけど私も暇じゃないから何時でもつて訳にはいかないよ？」

「それでもいい。じゃ、3つ目は俺が行く世界の言語が話せるようにして」

「おっ！いい事に気付いたね～。あなたは^{チート}反則的な能力がないから言語も学ばなければいけないとこらだつたんだよ～」

「だろうな。俺が元の世界で読んだ本（もちろんラノベですが何か？）にも似たような事が書いてあつたからな。

「じゃ、早速異世界へ…」

「ちょっと待つた

「何よ

決めゼリフを遮られてかなりご不満な様子。でもこれだけは聞いておきたい。

「まだ一切人物紹介をしてな…」

「メタ発言すなッ！次的话ですればいいでしょ～！」

次の話つて…お前もメタ発言してんじゃねえか。

「いいの…じゃ、気を取り直して～異世界へしゅつ…」

「出発～
・・・・してやつたり

1 なんか、死にました（後書き）

次回予告

潤「予定通り人物紹介をします。つてか絶対に俺の容姿とか分からないもんね」

2 人物紹介（前書き）

2話目につづります

2 人物紹介

羽山 潤
はやま じゅん

我等が主人公の潤君。黒髪黒目、日本の平均的な身長にやや細身。容姿も中の上と、何処にでも居そうな高校生。身体能力はかなり良いらしいが如何に…ある1点において以外は優しい性格。異世界でどう生きていくのか乞うご期待。

転生の女神てんせいのめがみ

主人公を異世界へと送る案内役。金髪灼眼、150cmを少し越えた身長と容姿は上の中とかなり良い顔立ちのよつで…身体の方はメリハリがほとんど無く今後に期待、は出来な…

バコーンッ！！

しばらくお待ちください

「え〜、作者が何者かに、ここ大事。何者かに襲撃されて星なつてしまつたので、私、転生の女神が代わりに紹介しま〜す。」

「何者かに、ねえ」

「何者かに、だよね〜潤君(ニコッ)」

「イ、イエス マム。何者かにであります！」

「よろしい。つと、話が逸れてきた。じゃ、人物紹介はこの位にして、潤君が飛ばされた異世界について軽く説明しちゃいま〜す」

「まあ、本編じゃまだ異世界に着いてないけどな…」

「細かい事はいいの！潤君が飛ばされた異世界『ウエドリア』は剣と魔法がメインの世界で〜す」

「物騒な世界だなあ」

「まあ、魔獣もいるしね」

「うわ～、やっぱ行きたいね～」

「そう言わずに、楽しい事も沢山あるからさ～逝つてきなよ

「危ない世界なだけにシャレになつてね～！…」

「つと、また話が逸れちゃつた。潤君がどうでもいい」と言つながら

「どうでもいいことじやねえよ。リアルに死活問題だよ」

「ハイハイヨカツタネー」

「誰か助けて～！…」

「で、この世界にはお約束のギルドとか獣人がいる他に、古の神々の宮殿がどつかにあるらしいよ。私も一応神様だけど、そっちには居ないんであしからず」

「無視しやがった。こいつ遂に俺の存在をスルーし始めた」

「あと、この世界には貴族も居るんでこの世界に行く人は要注意だね～。あ、そういえばこれからそこに逝こうとする人がいるんだよ

～？笑つちゃうよね～」

「俺の扱いひでえ！しかもまた逝こうになつてるし…」

「じゃ、いよいよ本編ヘレッジゴー！」

「開始早々に逝かないようにするんですよお願いします

2 人物紹介（後書き）

次回予告

潤「次からやつと異世界か。ん?なかなか危ない香りが…ってか人物紹介の時、俺らどこで喋つてたんだ?」

3 なんか、縁のものが…（前書き）

やつと異世界に到着

3 なんか、縁のものが…

「何なの」のテンプレ展開
転生した瞬間、といつても床に穴が開くとかじゃなく、眠くなつて意識失つて目覚めたらここに居た。俺の目の前には体長2メートルを越そうかといつキツネ色の体毛を纏つた狼っぽい生物が3匹居た。

それもうキツネでいいんじゃね？

とか思つた奴、後で屋上来い。キツネは狼より愛くるしい顔してるよ。田を見る田を、丸いキューートな田とつり上がつた獲物を狙う田だよ？どつちがかわいいかなんて分かりきつてるじゃないか。同じネコ田イヌ科だとは思えないね！まあ、実際にキツネも狼も動物園でしか見たこと無いんだけども…やつ、俺とキツネとの出会いは小学3年生のとき遠足で…

「潤君。作者も読者の皆様も飽きてきてるよ。作者に至つては敵を狼からミドリムシにしようか悩み出したよ？」

「ミドリムシッ！？敵じゃねえじゃん！つてか戦闘に持ち込むほど作者に才能があるようには思えないよ」

「ミドリムシが現れた」

「何かデカいミドリムシきたー！つてか変なテロップ流れたー！」
ミドリムシなんて教科書でしか見たことないからあればそういうのが分からないけど！狼と同じ位の大きさの緑の物体に紐みたいなついてるぞ奴は。あれは教科書の写真と一致する（大きさ以外はな）。

「あ～あ、作者怒らしちゃった。じゃ、あとは頑張つてね～」

KY女神はそう言うと俺との交信を切つた。クソッ、自分だけ作
者の怒りから逃れやがった。

「はあ…しようがないからやりますか」

そう俺が言つと、今まで律儀に待つてくれていた狼が一斉に向か
つてきた。ミドリムシはその場で待機のようだ：

「戦闘描写とか作者は書けんのか、なつ！」

真つ正面から突っ込んできた狼その1を避けてすれ違いざまに狼
その1の首ら辺に肘で1発打ち込んだ。その1発で狼その1は気絶
をした。急所だからちょっとした力で気絶させられる。続いて狼そ
の2が、俺が1匹倒して油断している所を狙つたのか、後ろから飛
びかかってきた。

「俺の辞書に油断の2文字は、ないっ！」

振り返るような時間的余裕はないので、狼その2に回し蹴りを食
らわす。そうすると狼その2が5メートル位吹っ飛んでやつぱり気
絶。

狼その3は自分1匹だけじゃ倒せないと悟つたのか、逃亡した。
相手の実力を理解したのか。なかなか賢い狼だ。

「あとはコイツだけか…」

今まで空氣となっていた、作者の嫌がらせの象徴であるミドリムシ
様が鞭毛運動をしている。

人類と単細胞生物の決戦が今始まる？

3 なんか、縁のものが…（後書き）

次回予告

潤「次回はいよいよヤツと戦闘だぜ！作者はまだまだ戦闘描写に慣れてなさそうだけど、頑張って書いてくれよ？」

4 なんか、力押しです（前書き）

前回に引き続き戦闘シーン

4 なんか、力押しです

「ミドリムシ」それは中央にピンクの細胞核や、一ヵ所一ヵ所した鞭毛を持つコーグレンナ目コーグレンナ科の生物。ちなみにコーグレナとは美しい眼点という意味だ。

つまり、気持ち悪いという認識でOKという事。

そんな生物と俺は戦おうとしている。素手で。

・・・・手袋って、偉大だったんだな

「じゃ、気分は乗らないけどやりますか

俺がヤツに向かつて走り出すと、ヤツは鞭毛を俺に伸ばし始めた。「キモイっつーの」

俺は鞭毛を掴み取り引きちぎった。幸い鞭毛の感触はロープのそれと似ていたのでテンションが下がることはなかった。

ヤツは特に痛みを感じないのか、ちぎられて短くなつた鞭毛を再び俺に向けてきた。

いちいち引きちぎつてもきりがないので、鞭毛を避けつつ本体の核を壊しに向かつた。

と、そこで俺はある事を思い出し、足下にあつた石を拾つて鞭毛の届かない位置まで下がつた。

「あれが本当にミドリムシだとしたら

俺は石をヤツの核に掛けて投げる。

音速に迫る速さで。まあ、この事はそのまゝ話すとして…

ゴスッという音がして、核の少し手前で止まる。つかアイツ硬すぎだろ。撃ち抜くつもりでやつたのに…

シユーツ

「」の音？そりやあヤツが再生してる音に決まっているだろ。はあ…
「やつぱりな。ミドリムシって名前も動きも虫っぽいけど実は光合
成みたいな植物っぽい事もできるんだよな～」

正確には原生生物っていうて、動物でも植物でもない。中途半端
な奴め。

「せつかく頭使って倒そうと思つたけど、弱点も見いだせないし
手札も石と素手しかない。力押しでいきますか」

という訳でここからは読者の皆さんには楽しくも何ともない戦い
が始まります。

まずは石を沢山拾う。相手がその場から殆ど動けないのが幸いだ
な。水の生物陸に揚げるからだ作者め。

それでもつて拾った石を核に向かつて連射～
ズドドドドッと凄い音を出しながら石はヤツの核に向かつて飛
んでいく。寸分違わず同じ場所に。

そしてヤツの再生速度を超えた連射で遂に核を捉えた。

最後の一発として大きめの石をヤツの核に向かつて全力で投げつ
けた。すると核が壊れ、ヤツの身体は爆発するように飛散した。

最後の仕事として俺は飛んでくるヤツの残骸を避けて避けて避け
て…

つてな感じで人類と単細胞生物との決戦は人類の勝利で幕を閉じ
た。

4 なんか、力押しです（後書き）

次回予告

潤「やあ～、ヤツはとにかくキモかった。つてか光合成って再生関係なくね？まあ、いいや、次回は異世界で初めて人と会うぜ。第1異世界人がどんな奴なのか気になるな～」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（前書き）

人に、会いたいです。

5 なんか、作者に嫌われた気がします

無事作者の^{ミドリムシ}悪意を倒して、今は広い平原の中を移動中（ちなみに元の世界で死ぬ直前の服装は上下ともにジャージなのでパジャマで戦闘というシユールな画にはならなかった）。ってか広すぎじゃね！？周りに何もねえよ。KY女神は忙しいのか繋がらないし…こう何もないと方向が合つてんのかすら分かんね～よ。

（1時間後）

「まだかよ～そろそろ木の一本でも見えていい頃だろ～」

（2時間後）

「・・・・・」

（3時間後）

「作者アアアアツ！～」りや何の嫌がらせだあ！さっきから石ころとか花の位置が何一つ変わってねえよ！風景のスペックが低いなんてレベルじやねえぞ！？」

（4時間後）

「作者さんよ～。このままだと予告で言つてた第1異世界人に会えずにこの話終わりそうだぞ～？」

ガタン

「ん？何の音だ？つて、やつと風景動いた～！うわ～、前に進めるつて素晴らしい！」

お～、森が見えてきた。何か達成感で涙が…

あ、そうそう、KY女神も居ないし一人で喋つても危ない人に

なつちやうから、こつからは心の中での咳きで。

森に入つてからは空も暗くなり始め、良さそうな場所（サバイバルの経験なんて無いのであくまでも良さそうな場所）も見つかって、今日は野宿することとなつた。食事はしょうがないから木に実つていた果実らしきもので済ませた。

……………そういえば今回つて人と会うんじゃなかつたっけ？まあ、思つたより進まなかつたから断念したのかな？

そんな事を考えながら俺は寝る準備をはじ…

ヒュンツ

何かが俺の耳元を過ぎていつた。ナイフだ。その時俺はこう思わざるを得なかつた。

人と会つてそういう事！？

確かに第1異世界人だけれども、確かに盗賊じゃないなんて言つてなかつたけれどもつ！

俺がそんな事を思つていると、森の中から2人の盗賊（仮）が姿を現した。

「よお、にいちゃん。こんな時間に森にいるたあ感心しないなあ」と、盗賊1（仮）

「そうそ、俺たちみたいな奴に狙われるぜえ？」

と、盗賊2（仮）

「もしかしながら、あなたたちつて盗賊ですか？」

と、俺は盗賊（仮）に尋ねた。すると盗賊1（仮）は、

「ああ、そうだぜ？さつきも街道を歩いてた新人っぽい冒険者を殺して金を奪つてきた。なあ、相棒？」

と下品なニヤツキを浮かべて隣をみた。しかしそこに盗賊2（断定）の姿はない。

「ああ、隣に居た人ならさつきあなたが『ああ、そうだぜ?』と言つた瞬間に殴り飛ばしたんで今頃はどつかの木にぶつかって氣絶中かと」

決して作者が戦闘描写が下手だから何時のためにか終わらせておこうなんて考えたわけじゃない。

「てめえ、よくもつ……」

盗賊1（断定）は顔を真っ赤にして懐から大振りのナイフを取りだした。ちなみに顔を真っ赤にしてつてのは恋する乙女的な感じじやなく、怒り心頭つて方の…え？ 分かってる？ さいですか。

顔を真っ赤にするつて言えばね～、俺が中学2年生の時に…

「死ねや！」

盗賊1（断定）が俺に向かつて手に持つているナイフを振り下ろしてきた。まだ話の途中なのに…毎に出会つた狼たちよりせつかちだな。しょうがない、サクッと終わらせますか。

「舐めた真似しやがつて」

再び俺にナイフが迫る。白刃の煌めきは今までに俺の命を刈り取ろうと…やめたやめた。俺にこんな高度な思考なんて似合わないな。「そんなもん振り回して危ないですよ」と

そう言つて俺は振り下ろされたナイフを避け、盗賊1（断定）に足払いをして前向きに倒れさせようとする。案の定盗賊1（断定）は倒れ始め、俺は盗賊1（断定）の鳩尾田掛けて膝蹴りを食らわした。盗賊1（断定）は膝蹴りがクリーンヒットして肺の中の空気と共に血を吐いて気絶した。

「ふ～、終わつたな」

そう言つて俺は盗賊たちを放つておいて夜の森を後にした。眠気？ 命のやりとりをした後にそんなもんありませんよ～。

「あ、どうせなら街道への出方聞いとくんだった」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（後書き）

次回予告

潤「最近後書き以外で名前が出てこない潤君です えへっと、次回はいよいよ街に入るのか？ってからくなもん食つてないんでマジで入れて下さい。あと作者、盗賊の表記がいちいち^懶陶しいんだけど。俺の扱いも酷いし…後で覚えてろよ～」

6 なんか、いい人みたいですね（前書き）

潤は二ートにジョブチェンジした。

6 なんか、いい人みたいで

「はあ、やつと着いた」

俺は盗賊気絶させた後、さんざん歩き回って街道を見つけ、やつとの思いでどつかの街の前まで辿り着いた。詳しく述べる？『冗談を、今は腹が減ってるんでそんな暇ありませんよ』。

（（ここはカラコルね））

KY女神もつい5分位前に繋がった。何で括弧が変わったか？それはだな～、実は今までアイツは俺の頭の中に直接話し掛けたんだと。んでもってその事をさつき知らされて、なら俺もできんじゃね？ってなつて実際に出来ちゃったから、じゃあ声に出してないんだから括弧を変えなきゃつていうわけ。

（（街の名前か？））

こんな感じで。

（（そう。貿易都市で色んな物が手に入るんだよ～？））

（（へ～。でも俺金持つてないぞ））

盗賊から剥ぎ取つてくるべきだつたかな…

（（この街、つていうか殆どの街にはギルドつていつ組織があつて、そこに加入すれば依頼の報酬としてお金が貰えるよ～））

（（なるほど。じゃ、早速行きますか））

一旦交信を切つて俺は街の中へと入つていぐ。

しばらく歩いていくと、明らかに普通の住宅とは大きとも雰囲気も違う建物が目に入った。

「あれがギルドか。でかい建物だな～」

入つてみないことには始まらないと、その建物に足を踏み入れる。中はとても広かつたが、ゴツい男が沢山いて、どちらかといふと狭苦しい感じがした。

カウンターには受付嬢、ではなく爽やかな男性が座つていた。テンションショーンだ下がりだ。

「すいませ～ん。ギルドに入加入したいんすけど～」

テンション今なお下降中の俺。

「はいっギルドの加入ですね～！」ひらひらと身分証明書と経歴をお書き下さい！」

やたらテンション高い爽やか兄さん。

ん？ 身分証明書なんて持つてないぞ～？

「身分証明書つてないとダメですかね」

ダメもとで聞いてみる。そして帰ってきた答へが

「ダメですね。もし犯罪者を加入させてしまつとギルドの信用に関わりますから」

というものだつた。ま、何となく分かつてだけど。

「身分証明書忘れちゃつたんで出直して来ます」

という無難なことを言つてギルドを出た。

「さて、どうするか～」

ＫＹ女神とはまた繋がらなくなつたし… とりあえず仕事探すか～

仕事みつからね～…！ 何でここの仕事は専門的なものばっかりなんだよ！

おまけに商売始めようにもギルドに加入しなきゃ出来ないらしい
し…ギルドなんて創つた奴今すぐ出てこ～い！

はあ、もう仕事しなくていいかな。俺は悪くない。社会が俺を受け入れてくれないだけなんだ。ハハハハハ。

「あんたこんな所で何してんの？ 邪魔なんだけど」

不意に俺の背後から声が聞こえた。振り返るとそこには…

いい感じで区切れそつだから今回せième。え？ダメ？セイですか。

作者からダメと言われたのでもうひとつ進めるよ～。
俺の背後に立っていたのは、綺麗な夕焼け空をそのまま移したか
のようなオレンジ色の髪をもち、自信に満ち溢れているようなやや
つら田の田も髪と同じオレンジ。容姿は上の上と言つても過言では
無い。田測で身長一六〇cm位の少女だった。だが、やつとの言動
といふ、この容姿といふ、

「どこのシンデレですか？」

しまつたアアアツ！！思わず口に出してしまつた～！

「はあ！？何訳わかんない事言つてんの？」

反応から察するに異世界にはシンデレといつ言葉は無いらしい。

が、機嫌を損ねてしまつた。

「ゴメン。君があまりにも可愛かつたからつこ」

すると彼女は顔を真っ赤に染めて、

「か、可愛い！？な、何変な事言つてんのよー」

と言つてきた。うん、ナイスシンデレ。

「ところであ、今日俺金も無くて泊まる所無いんだよ～。一日だけ泊めてくれない？」

深刻な問題を忘れてた。つて事でお泊まり交渉開始！

「ふ、ふざけないで！誰があんたなんか」

開始2秒でノックダウンされました。

「そ、そうか。残念だが他をあたるよ」

無理に泊めてもうわけにはいかないからな～。じゃ、今夜も野宿かな。

よつこらせ、と俺が立ち上がり街の外へ歩き出しつとすると、
「い、一田くらいなら、しょうがないから泊めてあげてもいいわよ
わつきも言つたがもう一度言おう。

ナイスツンデレ

6 なんか、いい人みたいですね（後書き）

次回予告

潤「何だあの前書きはアアア！俺は断じて二ートじゃない！二ートつていうのはだな、not in education, employment or trainingの略でだな・・・（長いので省略）だから俺は二ートじゃない！さて、ではやつと次回予告だな。次回はツンデレと仲良くなれば彼女の過去が明らかに！全ては俺次第ってか？。選択肢間違えないようにしないと」

7 なんか、真面目です（前書き）

何か纏まりの無い話になってしまった。

7 なんか、真面目です

「おじやましまーす」

そう言つて俺はシンデレさん（仮称）の家に入れてもらつた。1人暮らしなのか生活感を感じさせる物はクローゼットとテーブルとイスくらいだつた。キッチンはあるが料理はしないのかあまりにも綺麗だ…ってか未使用だろ。

「何突つ立つてんのよ。さつさとそこいら辺に座りなさい」

では遠慮なく、とイスに座る俺。シンデレさんも近くのイスに座る。

「ん？ そういうえば君つて1人暮らしだよね？ 何でイスが2つも…はつ！ もしかしてこれには今回の話のキー・ポイントなんじゃ…」

「何一人で暴走してんのよ？ イスが2つあるのは、このテーブルを買つたときにつ属品として付いてきたからよ」

「バツカジやないの、と言わんばかりに…

「バツカジやないの？」

言されました。

「ごめんなさい… それにしても生活感の無い部屋だなー」

女性にこんな事聞くのは失礼だと分かつてはいるけど何か引っかかるものを感じたので聞いてみる。

「あ、あんたなんかに関係無いでしょ！」

やはり無理か… ってか一切デレを見せないってどういうこと？ このままじゃせつかくのシンデレラがシンシンになっちゃうぞ？

「悪かった。そうだ、まだお互いに自己紹介してなかつたよな？」

「え？ ええ、まだね」

自己紹介は大切だからな。お互いの印象アップの為にも。

「俺の名前は羽山 潤。出身とかは… 知りたかつたら教えるけど…

？」

そう言つてシンデレさんを見る。

「珍しい名前ね。話すことが嫌じゃなら教えて。犯罪者だとこ
っちは困るし」

「この世界って犯罪者が多いのか? ギルドでも言われたし…
だが何て言うべきか、いきなり異世界人ですなんて言つても信じ
てもらえないだろうし。

「羽山 潣つて珍しい名前だろ? それは俺が他の世界から来たから
なんだ」

つて事で正直に言つことにしました。

「何言つてんの! ? 確かにハヤマなんて名前は珍しいけど他の世界
なんて… ふざるものいい加減にして! 」

まあ、こうなりますわな。

「今は信じてもえなくていい。あと、俺の名前は瀧の方。羽山は
ファミリーネームだよ」

「ふうん、まあいいわ。言動は怪しいけど悪い人じゃなさそうだし
言動は怪しいけど… ホントの事なんだけどな~

「そりやどーも、じゃ今度は君の名前を教えてよ」

「私? 私はセレン。セレン・レイナンドよ」

「セレンね。セレンはギルドに入ってるの?」

今更だがセレンの腰には西洋の剣がさしてある。

「ああ、この剣を見て言つてるのね。いいえ、ギルドには入つてな
いわ。ただの護身用よ」

ふうん。日本じゃ剣なんて持つてたら即銃刀法違反で捕まるから
遠い存在だったけど、こっちじゃこんなに一般的なのかな?

「そういえば、セレンの髪の色つて珍しいけど、それって地毛?」

元の世界にこんな髪の色の人がいないのはもちろん、こっちの世
界でも赤、黄、緑、青の4種類しかいなかつた。

そう言つた瞬間、セレンの顔に影が差した。

これが今回の話のキーポイントになりそうだな。

「ええ、まあね」

と、さつきまででは想像もつかないほどその声は小さく、重かつた。

そんな重苦しくなつた空氣の中、俺は思った。

あれ？俺ら（作者含む）が考えてた以上にシリアルスだぞ。

「何か聞いたやうない事だつたか…その、すまん」

「ここでふざけるのは少し違つう氣がするので素直に謝つておくれ。

「いいの。氣にしないで」

・・・・
「気まぎへへへい！誰か助けて！つてかＫＹ女神仕事入りすぎだろ
！繫がりにく過ぎるわッ！！

一体どこで選択肢間違えたんだ？あれ？つてか最初から選択肢の
「マンドが下に出でないぞ？まさかこれはギャルゲーじゃなかつ
「ちょっと長くなるわよ？」

「はいっ？」

何のこと？選択肢の「マンドが出てない理由か？

「私の髪の色、珍しそうって言つたでしょ？」

「あ、ああ」

そつちの話か～

「私の髪のこのオレンジ色はね、この世界じゃ異端の色なの
「異端？どうして？綺麗な色なのに」

「う、うるさい！黙つて聞いてて！」

こんなシーンでシンデレラ発動させなくとも。

「人が生きていく上で欠かせない太陽が沈み、闇が人々を包み込む

直前の色。それは破滅の色と人々から恐れられてる。それがこの

オレンジ色よ」

「んなバカな」

髪の色なんてどうしようもないだろう。

「そんな事を教義としているのが、この世界の人口の9割以上が信仰している《シャイネン教》よ」

ドイツ語で《光る》か、如何にも闇が嫌いそうな名前だ。

「そうして私はこの16年間迫害され続けてきたの。どうつ？これあなたも私の事が嫌になつたでしょ…？いいのよつ、もつ慣れてるか…」

「今まで、辛かつたんだな」

そう言つた俺は、いや、そつとしか言えなかつた情けない俺はセルンの頭を撫でる。

「な、なにを……ふ、ふえ～ん」

と、遂に限界がきたのか泣き出してしまつた。

「泣くといいさ。その涙と一緒に今まで溜め込んできたもの全部流しちまえ」

そうして俺は彼女が泣き止むまで頭を撫で続けた。

7 なんか、真面目です（後書き）

次回予告

潤「珍しく真面目度の高い話だったなー。こんな読んでも面白くないつつーの。次回は頼むよ？次回はどうやらセレンとお出掛けするらしいぞ？マジっすか？めっちゃ楽しみになってきた！」

8 なんか、旅に出ます（準備編）（前書き）

小説長文化計画実行中

中国語みたいです。.

8 なんか、旅に出ます（準備編）

結局セレンが泣きやむ頃には夜になってしまい、夕飯を俺が（こ
こ重要）作り、普通に寝た。自分で作ったとはいえ、調理したもの
があんなに美味しいとは思わなかつた。あの時はつい悲しくもない
のに涙が出てしまつたね。

で、今は俺が作った（ここアンダーライン）朝食も終えてひと
息ついているところだ。

「ところでジュンはこいつ出発するの？」

・・・・はい？ 何のこと？

「何惚けた顔してんのよ。こじり泊したらまた旅に出るんじゃな
いの？」

「そりだつたつけ？ ってか俺つて旅してたんだつけ？ いや、違うは
ずだ。そもそも俺はこっち（異世界）に飛ばされてこの街に流れ着
いただけのはず。待てよ？ 人生という面においては俺は旅人だな。
そう考へると俺はた…

「違つたの？ 酷く難しい顔してるけど。べ、別にジュンなんか居て
も居なくても変わんないから居てくれてもいいのよ？」

顔を真つ赤にしながら提案してくる。おおうつ！ 俺が考へてる間
にセレンはツンデレレベルを上げていたらしい。だいぶいいツンデ
レだつたぞ！

「マジっすか！ ？ でもこじり泊つてたのわけにはいかないからそろ
そろ行こうと思つ

「そう言つとセレンはショボンとした顔になつた。

分かりやすい表情だな～

「で、提案なんだけど、セレン、お前も一緒に来ない？ 俺はこの世
界についてよく知らないし、何よりお前と離れるのも寂しいしさ～
ホントのこじり泊つてコイツをこいつのまま放つておけないからなんだけ
どな。

…………あとボケとシッ「ミ」を一人2役やるのが大変という理由もあつたりする。

「な、なに言つてんのよーま、まあ、そんなに言つんなら一緒に行つてあげない」ともないけど、「

とは言つものの、セレンの表情は喜色満面といつた感じだつた。「じゃ、早速出発! と、いきたいところだけどお互に準備もあるだろ? から、出発は今日の正午。ギルド前で

「分かつたわ。じゃあ、またあとで」

今街の時計は10時15分を指している。

「さて、何を準備しようか」

まずは食料と思い、スーパーみたいな所に入る。いつにもスーパーつてあつたんだね…

中は野菜や干し肉ばかり、といつことはなく、冷凍食品とかインスタント食品、缶詰め、お惣菜までもが売られていた。

確かに旅には便利だけども、何かちがくね!? せつかくの異世界なのに普通すぎでしょ。おい作者、俺のこの気持ちどうしてくれれる。

スーパーで水や、保存が効きそうな缶詰め・インスタント食品を買つて、俺は図書館へと向かった。

上の段落だけ見たら俺が異世界にいるなんて誰も思わないだろうな? 図書館へ向かつた理由? それは異世界に来たら魔法を習得しないと。KY女神は前にこの世界には魔法があるつて言つてたからな。

((あるよ~))

((おおう、久しぶりに出たなKY女神。セレンに活躍の場を取られそだから慌てて出てきたな?))

((違う違う。今日はあなたに連絡があつて繋いだの))

(（連絡？何）？）

(（今日から出張があつてさへ、しばらべの間繫がらない所にいる

から連絡は出来ないよ？）

(（遂に作者がリストラを始めたか））

((ラスト) 還^{もど}う! 出張^でで^いたでしょ! 戻^{もど}なくなるのは少^{すこ}し

たけたよー！！

(分が) た
分が) たから落せ着け
と JUN でさ
魔法) て詰

モウソウの、(一)

(（ちなみに俺の魔力はどの位だ？そして増えることはあるのか？）

（（あなたの魔力量は…平均的な魔術師くらい。一般人よりは高いかな。あと、魔力っていうのは身長みたいなもので、あなたくらい

の年齢で魔力の増加は止まるんだよ

(（それだけ分かれはしゃせ
じや出張頑張れよ）

あつ、交言切つちやつた。ま、いつか。話してゐる間に図書館にも

着いたし、早速入りますか。

図書館の中はギルド並に広くて壁には本がギッシリ詰まっていた。

「これだけの図書館で元の世界じゃ見た」となしを上

こりや探すのも大変だ
と思っていたら検索用のハン二ンを見つけた。見つけてしまった。

夢壊しそうだチクショーツ！！

まあ、便利なことには違ひがないので、俺はパソコンで『魔法』と打ち込み、魔法に関するそれっぽいのを探す。パソコンで調べた本を取つてみる。

『魔法のように相手を惹きつける10の方法』

はつ！つい自分の興味のある本を手にとってしまった。まさに魔法だ。

『初級者の魔法』

今度は眞面目に取つて来ました。

『第1章 まずは魔法について正しい知識をもとつ。・・・』面倒くさいので読み飛ばす。

『第2章 ジヤ次、魔力がなんのかやつてみようよ。・・・』わざわざ聞いたから読み飛ばす。ってかだんだん馴れ馴れしくなるな。

『第3章 魔法を使う時の注意、は後で他の本読んで学んで』2行で終わつたアアア！！後でこの本の著者に文句言つてやる。

『最終章 簡単な魔法を使ってみよう！』これこれ、じや、早速学びますか。

『・サンダー 対象に雷を落とす魔法。

使い方：適当に詠唱して雷のイメージが明確になつたら「サンダー」と唱える。

・ファイヤー 対象を炎で燃やす魔法。

使い方：適当に詠唱して炎のイメージが明確になつたら「ファイヤー」と唱える。

・アイス 対象を氷漬けにする魔法。

使い方：適当に…以下略

・ウインド 細かい刃の風を起こす魔法。

使い方：適当に…以下略

・フォースグラビティ 重力をあやつり身体能力の強化、敵の

無力化に使用する上級魔法。

使い方：使用する場所の標高などから、大気圧、位置エネルギーを計算し、それに見合った重力を計算し、その計算結果以内の重力を対象の周囲1メートルの範囲で操作する。詠唱は「太古より流れたる大地の力、我の魔力を礎として今ここに具現せよ。（発動する場所の緯度経度を正確に言つ）。フォースグラビティ」である。まあ、ファイト。』

だそうだ。つてか突っ込みどころ満載過ぎだろコレヒエッ！！！
誰だよ著者。

『著者 誰かの何か』

作者アアアアアアアー！！ふざけんじやねええええ！！だいたいお前はな、（しばらくな待ちください）なんだよ。つたく、気を付けてくれよ？

もうお別れの時間？じゃ、あの後の行動をササッと纏めますか。

あの後俺は中級魔法も習得して、上級魔法もと思ったが、上級魔法は難し過ぎて分からなかつたので、とりあえず図書館を後にした。その後俺は武器屋に行つて武器を買って、ギルド前でツンデレと合流した。こちら辺はまた次の話で…

8 なんか、旅に出ます（準備編）（後書き）

次回予告

潤「何で俺が食料を買ったかって？そりゃセレンにお金を借りたからですよ～。そういうば魔法覚えたよ魔法。どんなもんのか今から楽しみだな～。・・・忘れてた、次回は武器屋行ってギルド前でツンデレと合流して旅に出ます。つて事で次回もよろしく」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（前書き）

0時に間に合わなかつた…

9 なんか、旅に出ます（出発編）

「お待たせ~」

予定の時間より15分早く、ギルド前に着いたが、そこには既にローブを脱いだ寧にフードまで被つて着ているセレンが立っていた。

「遅いわよ！私なんか1時間前からずっと居たのよ~」

もう一度言うが俺は遅れたわけじゃない。ってか早いな！1時間前つて、今11時45分だから10時45分には居たのかよ。30分で準備終わつたのか。

「悪い悪い。待たせたついでにもうちょっと待ってくれない？」

「何よ、まだ準備終わつてなかつたの？」

「ちょっと約束があつてさ~」

「まつたく、わざわざとしてよね~」

「サンキュー~」

さてさて、約束通りセレンと合流するまでの回想をしますか。

図書館を出て俺は武器屋へと入つていった。

カラコルという街は貿易都市と呼ばれるだけあつて（6話にじゅうひとつだけ書いてある）武器の種類は豊富だ。

剣、鎌、槍、ロッド、ハンマーなどたくさんあつた。

ちなみに俺は魔法で戦つていいと思うのでロッド希望だ。前衛後衛のバランスを考えてもセレンは明らかに前衛だからな… というのは建て前で、ホントのところは怖いからだ。命の奪い合いなんて元の世界じゃしたことないし、相手の命を奪つことに躊躇して殺されるかもしれない。そんな前衛に少女であるセレンを出すのはどうかと思うが、じつちの世界で戦ってきたセレンの方が俺より適任だ。

いすれは俺も最前線で仲間を守れるようになりたいが…まあ、今こんな事を話してもしょうがない。

さて、この店にあるロッドだが、

- ・天雷のロッド（雷強化） 1万ワロ
 - ・業火のロッド（炎強化） 1万ワロ
 - ・氷雪のロッド（氷強化） 1万ワロ
 - ・風斬のロッド（風強化） 1万ワロ
 - ・店先に落ちたロッド 1ワロ
- が、主なロッドだ。ちなみにワロといつのはこの世界の貨幣で、スーパーで100円で買えそうな缶詰めが10ワロだったから1ワロ10円と思つてくれて良さそうだ・・・・もう突っ込んでいいよな？最後のつて商品なの！？売る気ゼロだろー！

「すいません」

俺が店員を呼ぶと、店の奥から若い男性が出てきた。

「どうしたつすか？」

□調輕いなこの人。

「この『店先に落ちたロッド』って何ですか？」

「ああ、それですか？それは先週1日の仕事を終えて店をしまおうと店先に行つたら『持ち主を見つけてやつてください』っていう張り紙と一緒に落ちてたんですよ。で、一応誰かが持ち主になつてくれるようになつてるんですよ」

変わつた人も居たもんだな

「へへ、じゃあそれ俺が買つてもいいですか？」

「ワロだしな。損はしないだろ。

「へい、まいどあり～。代金はワロつす」

1ワロスー？と、つい反応してしまつた俺だがすぐにこの人の口癖と理解する。

「はい、1ワロス」

しまつた～！…そんな事考えてたらつい言つちまつた～！～

「？ ありがとうございました～」

良かつた。店員は無視してくれた。

さて、時間もちょっとどうじいし、ギルドに行きますか。

つて感じでした。

「サンキュー、終わつたぜ」

「終わつたぜって、あんた何もしてなかつたじやない」
変なの、と半眼で見られてしまつた。

「さて、準備が整つたわけだが、どこに行こうか

「え！？ そんな事も決めてなかつたの？ ホント馬鹿ね！」

「ごめんなさい。じゃ、どつか静かな村みたいなのつてある？」
この街は人が多くて住むには落ち着かない。

「この辺りだつたらキルファ村かな？ カラコルから南東へ3時間
くらいういた所にあるわ

「じゃそこにしますか。それではそれでは、出発～！」

「ちよつと待つた

歩き出した俺の首ねっこを掴まれて立ち止まる。

「どしたの？」

「どしたの？ じゃないわよ！ まったく… 街を出たらいつ魔物に遭
遇するか分からぬのよ！ 戦う時のこと考えないと」

ああ、そうか。今まで俺一人で戦つてたから全然気にしてなか
つたな）。反省。

「俺はロッド持つてることから分かるように魔術師。後衛で応援、
もとい支援がメインだな

いざとなつたら前衛でも頑張るけど。

「ちよつと良かつたわね。私は剣士で前衛タイプよ
「じゃ、戦闘がはじまつたら・・・・・・

と、打ち合わせをした。じゃ、今度こそ、「行きまつか？」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（後書き）

次回予告

潤「いよいよ出発か～。オラ、ワクワクすつぜ。ええっと、次回は俺とセレンによる初めての共同作業。だそうです。どうせ戦闘だろ？期待させて落つことは作者の常套手段だからな……みんなも気をつけようよ～。」

10 なんか、相方が凄いです（前書き）

朝から何書いてんのと「うしづコリ」といつてはスルーの方向で…
学生は学校があるから早起きなんです

10 なんか、相方が凄いです

「どうも、この頃名字である羽山を使わなすぎて、「あれ?俺って何潤だったつけ?」つてなり始める羽山潤です。
さてさて、前回はセレンと街を出て終わりました。では今、俺たちはどうな状況にいるでしょう?」

答えは簡単。ちっこいドラゴンだかでつかいトカゲだか10匹くらいと戦闘中(初めての共同作業中)です。おかしくなー。前回の後書きで作者の意図を見破つて戦闘フラグを回避したと思ったのに…

「ジュン!何突っ立つてんの!戦うわよ」

「だそうです。もう剣抜いてあるよ…やる気Maxだなセレン。

「へーい。じゃ、後衛で大人しく応援してるよ

「分かった。って、ちゃんと支援しなさいよー」

思わず後ろを振り返り俺を睨みつけるセレン。のりしきコモリも出来るのか優秀だな。

つてかトカゲ来てるぞ?前見ないと危ないんじゃ…しかしあのツンデレ剣士(略してつんけんなんてどうだろ?…どうでもいい?さいですか)は背後に迫ったトカゲを

「邪魔つ

と言つて振り返りもせずに斬り伏せた。

つてか普通に強くね?俺いらなくね?

「俺は今『いのちだいじに』つて命令が下ってるから攻撃の行動がこれなくて

と、某ゲームの作戦名を出して動こうとしない俺。

「何意味わかんないこと言つてんの?早く戦いなさいよつ!」

トカゲを斬つては捨て、斬つては捨てを繰り返して残りを3匹にしたセレンが言つ。もう戦闘にすらなつていない。

「分かったよ

つて言つた瞬間、空氣を読んでかトカゲが1匹俺に向かつてきました。

そういうことで俺も戦闘に強制参加。

じゃ、折角だし魔法使ってみるか。まずは詠唱してイメージを高めるんだっけ？

「え～、雷、電気、電池…」

と詠唱だか連想ゲームだかを始める俺。5こくらい言つてもういいかと思い、

「サンダー！」

つて唱える。すると次の瞬間、天から敵に雷が…なんて都合のいい展開は待つておらず、俺とトカゲの間にビリツと静電気くじりの電気が流れた。

・・・よ、弱え～。想像力が足りないっぽいな。

でも今の静電気でトカゲは苛立つたようで、真っ直ぐ俺に突っ込んできた。それを俺は大上段に構えたロッドをトカゲの首田掛けて振り下ろし、首の骨を折つて絶命させた。うん。結果オーライ。

さて、俺が1匹倒す間にセレンは残りの2匹を倒していく、初めての共同作業は無事終了した。

「ジュン、後衛なのに魔法が出来ないって…もしかして弱い？」

まあ、魔法使つたのも初めてだし元々前衛タイプだからな。とは言わずに、

「はい、こっちの世界に来て田が浅いもんで」

と言つておく。嘘ではないからな。とにかく非常時以外は後衛でのんびりしてたいし。

「ジュンの世界は平和だったのね。まあいいわ。しょうがないからジュンも私が守つてあげる」

ニヤニヤしながらそう言つてきた。セレンにしては珍しい表情だなどおもいつつ、断る理由もないつてかむしろ大歓迎なので、

「よろしくお願ひします」

とだけ言つておいた。

ちなみに今俺たちはカラコルから南東に2時間ほど進んだ所にい

る。つまりあと1時間ほど進むと村に着くのだ。今まで魔物はさつきの集団以外見かけていないので、この辺りに魔物は少ないのかセレンに聞いたところ、「そうね。街道が整備されてるから遭遇するることはめったにないわ」らしい。

本題はここからだ。残りの道のりは街道の整備されていない森を行かなくてはならないらしい。当然魔物もうつじやうつじや…今から気が重いぜ。

「じゃ、行きましょ」

といふ言葉が「じゃ、逝きましょ」に脳内変換されたのはしきりがない事だろう。うん。

「魔物に会わないように祈つときますか」

そう言い、俺たちは森の中へと入つていった。

10 なんか、相方が凄いです（後書き）

次回予告

潤「うわ～次回は・・・森とか憂鬱だ～。どう考へても戦闘がある
でしょ。森林浴で終わるわけないもんね。何の嫌がらせだ作者。あ
と電車の中だからつてコソコソとスマホ使って打つの止めろよ。次
からは堂々と打つよ～に！～」

11 なんか、地面から出てきました（前書き）

魔法使っちゃいます。

11 なんか、地面から出でました

やつてきました。森の中。まだ日が出ていなはずなのに中は薄暗い。虫もいっぱい。しかもジメジメして。うん、最悪だね。

「まーだー？」

セレンに聞く。

「まだよつ！うつさいわね！！」

大分厳しい言い方…もつと優しくしてくれてもいいじゃん。ツンツンめへ。

「すぐに怒るなんてカルシウムが足りないんじゃないかい？」

牛乳嫌いな俺が言えたことじゃないけど。

「森に入つてから5分おき位に言われてれば誰だつて苛立つわよ！ジユンの方が我慢が出来ないなんてカルシウムが足りないんじゃない？」

言い返されてしまった…読者の皆さんだつて俺の方が正しいと思うでしょ？え、お前が悪いから謝れって？俺が間違つてたの？そうだったのか～。

「セレン。脳内会議の結果、俺が悪いと分かつたよ。悪かった」

そう言つとセレンは顔を赤く染めて、

「わ、分かればいいのよ。変なジユンね！・・・私も言ひ過ぎた、『じめん』

と返した。最後の方はよく聞こえなかつたが、俺の情報（もちろんラノベですが？）によると聞き直さない方がいいとなつてているので無難に、

「お、おづ。今度からは氣を付ける」と言つておいた。

こんなやりとりをしていたら森を抜けていた。うん、太陽つて素晴らしい。あれ？ そいつえば1回も戦闘がなかつたな。俺の予想の常に正反対を貫きやがつて、作者の天の邪鬼め。

あとは平原を5分ほど歩けば、歩けば…

「何で村だつけ？」

誰にでもど忘れはあるよね。あくまでもど忘れです。忘れているわけではありません。大切な事なので2回言いました。

「キルファ村よ。300人位の人が住んでる小さな村。周囲を大きな川と森で囲まれているから基本的に自給自足で成り立っているわ」

だそうです。

「ありがとう。助かつたよ」

するとセレンは顔をさつき以上に

真っ赤に染めて、

「ふ、ふん、常識よつ！ ジュンも早く覚えてよね！」
と言つて早足で前に進んでしまつた。可愛いヤツめ。

俺は「善処する」と言つて歩みを進めよつとした。そう、進めよう（・・）とな。

（地面の下に何か居る！？）

咄嗟に気付いた俺はセレンにも声を掛けた。

「セレン！ 下から何か出てくるぞ！！」

俺の言葉にセレンは、え？と反応をし、ヤツに気付いたのか走り出すが、ダメだヤツの方が速い

。（ヤバい、このままだと間に合わねえ）

何故か知らんが地面の下のヤツの狙いはセレンだ。ショウガねえ。
「安定する体勢になつて剣の腹をこっちに向ける！」

セレンは有り難いことにすぐに行動に移してくれた。間に合つか…

「凍りやがれ！ グランドアイスツ！ 吹き荒れる！ テクノウインド！」

中級氷魔法を詠唱してセレンの足下やその周囲50メートルの地面を凍り漬けにする。その後に詠唱したテクノウインドという中級風魔法を、セレンの剣の腹に1点集中させると瞬間に遠くまで滑らせる。

セレンが滑つていった直後、さつきまでセレンがいた場所の地面から氷を突き破つて直径2メートル位のやたらでかい縁のワームがでてきた。

（なんとか間に合つたな。正直魔法に頼るのは賭けだつたけど）ちなみにさつき使つた魔法。グランドアイスはアイスの1っこ上の魔法で、地面を凍らせる範囲魔法。テクノウイングはウイングの1こ上の魔法で、対象に鎌鼬をぶつける技だ。今頃セレンの剣はボロボロだろう。後で謝んないと。ちょっと飛ばす方向間違えちゃつて、セレンが木にぶつかつて気絶したのは俺と読者の皆さんとの秘密だ。くれぐれも作者にばれないようにな？

「デカブツめ。よくもセレンを吹つ飛ばしたな！ 覚悟しろよ？」
皆さん、頼むからそんな目で俺を見ないで。・・・新しい境地に目覚めちゃう。

グオオオオア！！

ワームが待ちかねて吠え出しちゃつたよ。じゃ、冗談はこじら辺にして、

「俺がセレンを氣絶させたのをお前は見てたからな。悪いが口を滑らせないよう殺させてもらつぜ」
え？ 悪役になつてるつて？ バカ言つちやいけませんよ。俺は善良な一般ピーポウ（ネイティヴっぽく）ですよ。
つて、また冗談始まっちゃつたよ。俺の意志は生卵よりも柔らかいな…ま、いつか、俺らしいし。

グオオオとワームがこっちに向かつて突進してくる。ハッキリ言つてめちゃくちゃキモいっすワームの兄さん…
さて、あれだけでかいと物理攻撃は効きそつにないな。魔力もまだ余裕があるから魔法で戦うか

あ、そうそう、気づいてる人も多いと思うけど、今回はここまで。後書きに俺が習得した魔法を載せとくから、それでも読んで予習しつつ次の投稿をお楽しみに！

どうした作者？え？魔法の説明に文字数使いそุดだからここで次回予告しどけつて？ハイハイ、了解。

潤「次回予告なんて誰得なコーナーだよ、と最近思い始めている潤君です 次回は皆さん想像通り、ワームとの戦いです。一刻も早く倒して俺の心の安寧を取り戻せ！」

（魔法一覧）

『下級魔法』

- ・サンダー 対象に雷を落とす魔法。のはず。本編じゃ残念な結果に…

- ・ファイヤー 対象を燃やす魔法。外で料理するときに便利。
- ・アイス 対象を凍り漬けにする魔法。風邪を引いたときにも使えるぞ

- ・ウインド 対象を細かい風で切り刻む魔法。キャベツの千切りにもつてこい。

『中級魔法』

- ・サンダーブラッジメント 10～20個の雷球を対象の周りに浮かべ、任意のタイミングで一斉に雷球から雷が対象目掛けて飛んでくる。

- ・サンダーボイル スーザン・ボイルとは関係ない。サンダーブラッジメントの派生系。10～20個の雷球を一つ圧縮し、対象にぶつける魔法。

- ・ファイヤーワール 別に何かのシステムの名前じゃない。炎の壁を作り出し、任意のタイミングで倒して対象を焼き尽くす。防御としても使える。

- ・ダークネスファイヤー ファイヤーワールの派生系。炎自身をも焦がす温度の黒い炎を対象の地面から柱状に発生させる魔法。
- ・グランドアイス 対象の足下を中心に半径50メートルの地面を凍り漬けにする。

- ・ピアシングアイス グランドアイスの派生系。対象の足下を中心半径30メートルの地面からドデカイ氷柱を出現させる魔法。
- ・テクノウインド 対象を鎌鼬で四方八方から切り刻む魔法。潤

君は頑張つて1点集中させました。

- ・ウインドバースト テクノウインドの派生系。自分を中心半径10メートルに鎌鼬を起こす。これも防御にも使える。
- ・デイザスカラスクエイク 対象の地面をひっくり返す魔法。農業に使えるかも。

12 なんか、シリアルです（前書き）

何か最終回みたいになりました。

12 なんか、シリアルズです

さて、前回は微妙なところで終わってたから、ワームが突進してい
る途中という気持ち悪い画からスタートする。

つてか早いとこどうにかしないと喰われそうだ：

「燃やし尽くせ！ ファイヤーウォール」

俺の目の前に高さ10メートル横5メートルくらいの炎の壁が出来上がる。熱く感じないな。術者に対する安心設計か？

俺気付いたんだけどさ、下手に長い詠唱するよりもせりと詠唱した方が上手くいくんだよね。たぶん俺の場合、ラノベとかゲームとかでこういうイメージは身近に有ったから、変に意識するとかえつてイメージが霞んじゃうんだろうね。

さて、そろそろ間合いに入つたな。

そう思い、俺は心の中で倒れろ～って念じた。
すると、炎の壁は俺の思い通り倒れ始めた。

・・・「こっち側に…つて、ええええツ！？」「こっち側！？何でこんな時にギヤグ発動してんだよ！ちよ、まつ、や、やべえ！

と、俺はどうすることも出来ず、あたふたと慌てる。

どうするどうする、と考えに考えて、俺はもう一つの防御にも使える魔法『ウインドバースト』を唱えることにした。

「我を守りし聖なる風よ～マジで頼みます！ ウィンドバースト」

ゴウツという音と共に俺の周りで風がうねった次の瞬間、凶悪なまでの風が周囲の草花とファイヤーウォールの炎を刈り取った。ワームも例外ではなく、動けばするものの、身体から体液が漏れ出してグロさ当社比2倍である。

・・・「」の魔法強過ぎだろ

そんなことを考えていたら、ワームが口に向けて何かこそそと行動していた。無傷で。

「何でこんなに生命力が有り余つてんだよーー1発で倒せつてか?いいぜ、やってやろうじやないか。」

「言つても使える魔法はあと2回が魔力の限界だな。どうするか…と考えていると、こそそしてたワームの口から変な液体が俺に向かつて飛んできた。

テンプレだな。この手の攻撃は酸か毒で、触れるのはもちろん発生した気体を吸つてもアウトってパターンだろ?」「見え見えだぜ!」

と、軽く飛んできた液体を避ける。・・・移動した先に地面から出したワームの尻尾があると氣付かずに。

俺はヤツのめちゃくちゃ重い一撃を食らひてしまつた。チクショウ、こそそしてたあの時か…

その後もヤツは俺で遊ぶかのように尻尾で俺を木に叩きつけたり、空中に放り投げて尻尾で叩き落としたりしていた。

「やつべ、身体が動かねえ…」

恐らくあばらが何本かいつてしまつただろ? 内臓ももうボロボロだ。思えばこっちの世界に来て初めて怪我したな…はあ、もうすぐ俺は死ぬのか? 思つたよりあつけなかつたな…いや、まだあと一つやり残したことがあつた。

「俺にはな…まだ死ぬわけにはいかねえ理由があんだよ…!」

恐らくこの言葉はワームに対してもう言いたいことだらう。「俺が死んだら誰がセレンをワームから、いやこの世界から引つてんだよ!」

そう考へ俺は自分の身体に鞭打つて無理やり立ち上がる。「デカブツ、今から俺の最大の一撃を叩き込んでやる。・・・かか

つてきな

その言葉を理解したのかは分からぬがワームは俺に向かつて突進してきた。ヤツも決着を付ける気だろ？

俺は口の中に溜まっていた血を吐き出しつつ、全身で魔力を巡らせる。身体強化を図る。

そして残った魔力を右手に集めて刀のような形状をとて黒かつたんだな。見たこと無かつたから知らなかつた。

さあ、決戦の時間だ。

ワームが俺の目の前にまで迫ってきて、俺の身体の呑み込まんとして、何重にも重なった歯を持つ口を大きく開く。

俺はワームの頭と思われる辺りまでジャンプした。身体強化

ワームは一瞬混乱したが、すぐに俺の場所に気付いた。しかし、俺にはその僅かな隙だけで充分だった。

「食らいやがれええええッ！-！-！-！」

ケモヤツといふ擬音語がひたりたる。そんな音を立てて俺の魔力でできた黒い刀はワームの脳天から突き刺さつた。もう動かないし殺せんだろう。

・・・・・ダメijo。標識が、壇の、く。

ごめん、な、セレーン。お前の、事、世界から、、守つてや、、
れそ、、う、二、、な、、、、、、、、、、

12 なんか、シリアルです（後書き）

次回予告

転生の女神「どうもどうも、久しぶりね～。最近出れてなかつたけど主人公が生死不明って事で今日は私が次回予告をします。つかヤバかつたね～。潤君大丈夫かなあ？最終回にならなきやいいけど…とりあえず次回は潤君が生きてた場合は潤君視点で何かするんじゃない？とにかく、次回を見てみないと分かんないわ～」

13 なんか、生きてました（前書き）

潤は爆発すれば世の中平和になると思つ

13 なんか、生きてました

「ん、ここのは？」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見当たらないから真っ白い空間か？

・・・あれ？この文章。それにここの空間。何か俺は知ってる気がするぞ？

「あつ、起きた？」

そこには、セレンではない見知った顔がいた。

「お前はＫＹ女神！ そうか、ここは転生する直前の大空間だ～」

でも何でここに居るんだ？

「転生の女神だけどね… あなたはワームと戦つて死にかけてたから私が空間転移で運んで復活させたの」

ワーム、ワーム・・・はつ！

「セレンは？ セレンは大丈夫だったのか？」

「復活して早々に彼女の心配とは、二クいねコノコノ～」

「そ、そんなんじやねえよ！ で、どうなんだよ？」

こんな時に顔を赤くするのはセレンのはずなのに何故か今俺は顔が熱い。きっと顔が赤くなってるんだろう。

「彼女なら無事だよ」誰かさんがいなくて泣いてたけどね～」

KY女神がニヤニヤしながら言つてくる。

そうか、俺がいなくなつたことに泣いてくれたのか… 申し訳ない気持ちもあるけど何か嬉しいな。

「で、そろそろ戻りたいんだけど」

「どっちの世界に？」

「はい？ どゆこと？」

「今なら元の世界と異世界、どっちか好きな方に戻してあげ…」

「異世界だな。考えるまでもない」

俺がそう言うとKY女神は意地の悪い笑みを浮かべて、

「異世界には未練をたっぷり残してきたんだね～」

とか言いやがった。まあ、ホントのことなんだけど。

「う、うるさいな～、早く転移してくれよ」

「ハイハイ、あ、あとこれはアドバイスね～。もつと強く、仲間を守れるくらい強くなつたら古の神々の神殿つて所に行くといよいよ。あなたの為になる何かが置いてあるから」

「おう、サンキューな。お前は今まで会つた女神の中で一番の女神だ」

「ホント? ありがとう～。困つたら何時でも呼んでね～」

女神なんてお前以外見たこともないが、嘘は吐いてない。嘘は。

「つて、お前呼んでもほとんど居ないだろつー?」

転移が始まつたのか俺の身体が薄くなつてきた。

「嘘は吐いてない。嘘は

「イツ…俺の考えまで読んでやがつた。プライバシーの侵害で訴えてやるうつかな。

そんなことを考えていたら一つの間にか異世界に着いていた。

「ここは…ワームと戦つた場所か

そこにワームの死体はもう無く、俺がウイングドバーストを使った痕だけがぽつかりと残つていた。

((着いた) ?)

「の声はKYOU女神か。

((おう、着いたぞ。セレンはキルファ村に居るのか?))

今は一刻も早くセレンに会つて安心させたい。

((うん。村に居るよ～))

((分かった。じゃ切るぞ。・・・覗き見るじゃね～ぞ))

ぐきを差しとかないとやりかねないからな。

((ソ、ソンナノアタリマエジヤナイ))

分かり易つ!! 女神酷く分かり易つ!!

キルファ村に入つたはいいが、セレンがビニにこむのが分からん…
片つ端から行きますか。

村自体は広くないので一人田にて尋ねてセレンがビニに面するかすぐ
に分かつた。どうやら宿屋に居るらしい。

宿屋2階のセレンの部屋の前まで来た。第一声はどうじよつか、
セレンは怒つてないだらうか。そんな余計なことばかり頭に浮かぶ。
(しつかりしろ！羽山 潤！何を怖がってるんだ)

自分を叱咤激励して部屋へと入る。中にはイスに座つてどこか暗
い表情で床を見つめていた。

「セ、セレンさん？ セレン？ セレン？」

なかなか気付かずないな…

「セレンってば」

少し強めに言つてみる。

「？、！？」

あ、気付いた。セレンはまるで幽霊でも見たかのよつて口をパク
パクさせている。いや、金魚にも似ているな…いやいや、よく考え
てみれば口をパクパクさせるのはなにも金魚に限つたことじやない。
魚であればあの行動はみんなやつている。だとすれば魚のよう
と言つべきか？いや、それは抽象的過ぎだらう…

おつと、セレンの心理戦で危うく思考の深みにはまるとこいつだつ
た。セレン、恐ろしい娘つ！

「ジ、ジュン？」

あ、あれ？ もしかして忘れられてる？いやいや、まだ数日しか経
つていなければだぞ？

「俺のこと、ご存知ですよね…ほら、数日前まで一緒に…」

「ジュン…！」

そう言つて（呟んで）セレンは俺に抱きついてきた。俺はビシ
クリしておもわず、

「は、はい。確かに潤は俺のですよ」

ところ変なことをこいつてしまった…本当は「潤は俺の姉前ですか
つて言つぱすだつたのに。」

「今まで何処行つてたのよ！バカッ！」

「グハアッ、涙目 + 上田遣いは反則！審判、早く反則とつてよ。こ
のままじゃ俺の心臓に良くない！」

「ど、とりあえず一旦離れて、お、落ち着こつじや、じゃないか」「
まあ俺が落ち着け～！と思わず自分に突つ込んでしまつたのは秘
密だ。

「つーーーー、ごめんなさい。つーーーー」

「いこつて、と言つて一回落ち着く。すーはー、すーはー。よし。
「今まで何処行つてたかだけど、友達に拉致られて、しばらく療養
してた。おかげですっかり元気になつちゃつて」

「ハハハ、と笑つて誤魔化す。それに対してセレンは「ふ〜ん。無
事ならいいわ」と言つていた。

その後、俺たちは氣絶した後どうなつたかそれぞれ話し、その日
は宿で寝た。か、勘違ひしないでよねーちゃんとお金は払つたんだ
からね！

「うへん、俺にシンデレの才能は無れやうだな…

13 なんか、生きてました（後書き）

次回予告

潤「次回予告に復帰したぜー！あと誰だ前書きにあんな事書いたの！？どうせ作者だらうけどな…さてさて、次回からは、またいつも通りの日常にもどります。俺はこれからキルファ村でなにをしていくのかな～」

14 なんか、違法な気がします（前書き）

説明回です

14 なんか、違法な気がします

「セレーン、今日は何をしようつが」

金が無くなつてきたから働かなきゃいけないし、セレンの剣も買わなくちゃいけない。あと魔法の研究もしたいし……やるべきことこの事欠かない。

「そう言つことはまずベッドから起きてから机になさい」

セレンは一蹴されてしまつた。だつてベッド気持ちはやん。

「俺はベッドから起きよつとしたてるんだ。ナビベッドが俺を離したくなつて起きかなくて……」

「…………」

「…………」

「…………」

なんかあざ笑われたアツ！

「しようがない、起きるか」

セレンは言つて掛け布団を持って起き上りが、ひつとじて止まる。

「ど、どひしたの？」

体調でも悪いのかと、セレンが心配でついつい聞く。

「ベッドじゃない！」

「え、え？ どうしたの？」

突然変なことを言つて出した俺にセレンが一層混乱してゐる。

「だから、ベッドじゃなかつたんだよ。セレン」

「何がよ？」

俺の真剣な表情を見てセレンも真剣な表情で聞き返す。

「本当に俺を離したくないのは・・・掛けぶ…」

スローンとこつ音を伴つて頭を叩かれる。まだ最後まで言つてなかつたのに。

「私の心配を返しなむよーーーわかつ起きなむーーー」

「分かつたよ、お母さん」

「私はおぬせんじやないわよ！バッカじやないの？」
そう言つてセレンは部屋を出て行ってしまった。

「・・・起きるか」

一人でやることもないので起きよひとする。が、今度は本氣で起きれない。この感覚、覚えがあるぞ。確かにその時は周囲の風景が動かなかつたんだが、つてことは

「作者アアアツ！お前か！面白い事しやがつて」

このままじや俺がまたふざけてるようにしか見えないじやねえか！こや、マジで、次はマジでヤバいから。ちゃんと異世界旅しますから～！

作者様お願いします。

おっ、動けるようになつた。さて、今後の方針も旅をするつてことになつちやつたな～。セレンに言つてくるか。

「つじことでまた旅に出る」となりました」
正直に話しました。作者からお告げがあつたと、「へ～、作者がね～。つて、作者つて何のことよ～ふざけてないでちゃんと方針考えて！」

だらうね。こんな反応だつて分かつてたさ。
「ホントなんだつて～。とりあえず適当に旅しようぜ。世界一周すれば作者も満足だらうしさ」

「世界一周つて、どんだけ長い旅する気なのよ。まつたく、まあ、なんとか了承してもらえた。

「でもその前に私の剣をどうにかしてね」

・・・そうでした。今セレンは武器持つてないんだった。
「じゃ、そのための金をササッと稼ぎますか」

つてことでやつてきました。ギルドです。

セレンは外ではローブを着てフードを深く被つている。大変なんだな…

ギルドに加入するために、前回の俺の失敗を生かして今回は秘密兵器を持ってきたぜ。

「すいませ～ん、ギルドに加入したいんですけど～」

この村のギルドの受付は可愛らしい女の子だったので、俺のモチベーションは上がりっぱなしなのはセレンには絶対に秘密だぞ。

「ではこちらに身分証明書と経歴を提出して下さい」

前回はここで失敗した訳だが、今回の俺は一味違うぜ！

「これですね。どうぞ」

そう言つて俺は2人分の身分証明書と経歴を出す。・・・偽物のな。

本来この世界では身分証明書は国から発行してもらうのだが、俺はカラフルの街のギルドで身分証明書の形状、デザインをこつそり覚えた。それなりに時間は掛かったがバレないようなものが出来たと思う。違法な氣がするのは気のせいだろう。

「確かに承りました。兄妹でのご登録ですね？お兄さんはウェル・カラーラーさん。妹さんがセラフィ・カラーラーさんでよろしいですか？」
セレンのア承も得ているのでなんら問題はない。

ちなみに俺の偽名ウェルは潤つているという意味のウェルシーからとり、セレンは天使のような美しさと気高さを持っているということでセラフィックからとった。

「はい。間違いありません」

偽名だけどね。

「ではギルド加入を承認します。ギルドの説明は必要ですか？」

俺はもちろんセレンもギルドには入っていなかつたので知らないだろう。

「お願いします」

「了解しました。まずギルドについてですが、ご存知の通りギルド

はほとんどの街や村に存在しています。そしてこの…」

と言つて受付の女の子は机の中からクレジットカード大のプラスチックっぽいカードを出した。

「このギルドカードがあれば、どのギルドでも依頼が受けられます。逆に無くしてしまつと作り直しなつてしまいますが無くさないようになります。これはあなた方のギルドカードです」

そう言うと、彼女は俺たちにギルドカードなるものを渡した。

「次に依頼についてです。依頼にはE～Sランクまであり、D～Eが初級冒険者向け、Cが中級冒険者向け、A～Bが上級冒険者向けとなっています。あくまでもこれは目安ですので、初級冒険者が上級冒険者向けの依頼を受けることも出来ます。しかし依頼は失敗してしまうと違約金を払わなければならなくなり、下手すると命を落としかねないので、自分の身の丈に合つた依頼を受けるようにしてください。あとSランクについてですが、Sランクの依頼はプロミネットギルダーという、冒険者のトップ10に入らないと受けられません。プロミネットギルダーになるには現在プロミネットギルダーである人をギルド立ち会いの下で倒すことが条件です。ですがプロミネットギルダーは実質世界最強の10人なので年老いるまでは無理だと言われています」

途中からそのなんちゃらギルダーの話になつていてよお姉さん…

とりあえず俺はD～Eランクの依頼をやって稼げばいいんだな。

「最後に冒険者同士の共闘、パーティーについてですが、これは特にギルドに申請する必要はありません。パーティーに入るか入らないかは自由ですが、依頼達成時の報酬は変わらないので人数を多くするとその分1人あたりの報酬は少なくなります。以上がギルドについてですが、何か質問はありますか？」

パーティーはセレンと2人で組めば充分だろう。あとは…

「依頼の達成はどこで報告すればいいの？」

と、セレンが質問する。確かに、どうすればいいんだ？

「依頼を完遂したら、私たち受付の者に報告すれば依頼達成となり

ます。その時に魔物なら特定の部位、採集なら採集した物、配達なら領収書を提出していただきます

なるほど、インチキは出来ないと。

「他に質問がないようでしたらこれにて説明を終了させていただきます」

セレンは?と顔を見るが、質問は無いのか首を横に振った。俺も特にならないな。

「大丈夫そうです。ありがとうございました」

「はい。ご活躍をお祈りしています」

そうして俺たちは受付から離れた。

「さて、依頼を受けますか」

14 なんか、違法な気がします（後書き）

次回予告

潤「せつかくのんびりいこうと思つてたのに…作者の奴め、怨んでやる。さて、ギルドで説明も終わつて次はいよいよ依頼を受けるぜ！って言つても簡単なのしか受けれる気はないけどな」

15 なんか、反戻ぬです（前書き）

殺すとは、死にこなれと

15 なんか、反則的です

「依頼、依頼」と

俺たちは今、依頼が提示されている。掲示板の前で依頼を探している。

「これなんか良さそうじゃない?」

と、セレンが俺に依頼用紙を見せる。

『Dランク配達依頼』

キルファ村のギルドに預けてある小包をカラコルの街まで運んでほしい。

報酬：3000ワロ

注意：中身は割れ物なので、慎重に運んでほしい。中身が割れてしまったり傷ついてしまった場合報酬は減額。

「ん~、確かにカラコルは一度行つてるから分かるけど…セレンは剣がないから戦えないし、この前みたいに魔物に襲われたら危ないんじゃない?」

つてか久しぶりにワロつて聞いたな…

「それもそうね…じゃあこれは?」

『Eランク雑務依頼』

キルファ村の宿屋で模様替えをする。その手伝いをする。

報酬：1000ワロ

注意：お好きな物も動かすので力のある人でお願いする。人数は1人のみ。

「人数が1人までかあ、いい依頼だけどな？」

まあ、あの宿屋小さかつたし、人数が居ても邪魔なんだろ？。

「ならお互い別々の依頼を受けない？その方が効率もいいし」

「そうだな。じゃあ俺は自宅警備員として部屋に…」

「ちゃんと働きなさい！」

言われてしまった。ちゃんとした仕事だと思つた…自宅警備員。
給料はもらえないけどな。

「へ～い。じゃ、どの依頼を受けようかな？」

「私はこの模様替えの依頼を受けるから、ジュンもちゃんと働きな
さいよ！」

そう言い残してセレンは行ってしまった。

「さて、真面目に決めますか」

そう自分に言い聞かせて、改めて依頼を見る。

（そう言えば、ワームを倒したときのあの戦い方、あれが実用的か
どうかやってみるか）

そう思つて魔物の討伐依頼を見た。

『Dランク討伐依頼』

キルファ村の南西でビッグリザードを確認。これを討伐してほし
い。

報酬：ビッグリザード1体につき500ワロ

証明部位：牙（2本1組とする）

注意：群れで行動するので周囲を警戒する。

写真があつたので見てみると、キルファ村に来る途中に出会つた

小さいドラゴンみたいなヤツだった。

ビッググリザードってことはトカゲだったのか…

何にせよ、そんなに強くない魔物だったので、この依頼を受けることにする。

「この依頼受けたいんですけど」

受付まで依頼用紙を持っていく。

「ビッググリザード討伐ですね。お一人で行くんですか？」

「はい、そのつもりですけど…」

「相手は群れで行動する魔物です。よければ1人くらい一緒に行く仲間を探しましょうか？」

今回は自分の力を確かめるためでもあるので1人で行きたいところだなあ。

「今日はいいです。ご親切にどうも」

そう言つと、受付のお姉さんは心配そうな顔になるが、

「分かりました。頑張つて下さい」

と言つてくれた。

「じゃ、行つてきます」

と俺が言うと、

「はい。逝つて…行つてらっしゃい」

と、言い直しながらも返してくれた。みんな、誤字には気をつけようね！

「あいつらか…」

そう言つた俺の視線の先には件のトカゲがいた。30匹位…

多くねッ！？前回セレンと戦った時は10匹位だったのに。予定変更。最初はあの黒い刀と身体能力強化だけで戦う予定だったけど、魔法で一旦数を減らそう。べ、別に自分の接近戦の力に自信がない

訳じやないんだからね…うざい？」「めんなさい。

「さてと、出来るか分かんねえけど…俺の魅力に痺れなつ…！サンダージャッジメント！」

普段じや恥ずかしくて言えないようなセリフを一人なので恥ずかしくなく言える。

ちなみにこのサンダージャッジメントは普通のとはちょっと違つ。普通は20個位の雷球を1体に集中させるのだが、今回は1個1個をビッグリザード1体毎に集中させた。おかげで制御が物凄い大変だ。

ビッグリザードも俺のことに気付いてこっちに向かってくれる。

「ああ、いくぜ！」

と気合を入れて、パチンと指を弾く。

バリバリッと音を立てて20個の雷球がそれぞれの標的に雷を放つ。初めて戦つた時のよつたな静電気ではないので、その一撃で20匹が絶命する。

「残り10匹！」

そう言つて魔力を身体に巡らせて身体能力強化をする。さらに右手に魔力を集中させて刀の形状をとらせる。

「ああ、いくぜ！」

と気合を入れて…え？ わつきと同じ」と言つてる？ そう堅いこと言わば。読んでやつてんだから文章を工夫しなつて？ いやいや、咄嗟に出ちやつたんだからしょうがないでしょ！？ そんな無茶振りされ…

グギヤーッと、田の前にビッグリザードの牙が迫る。

「危ねつ…！」

間一髪のところで避けて、後ろに跳んで距離をとる。

ほひ～、皆さんが邪魔するから危なかつたじやん。次からは気をつけよう。

「ふつ…！」

と、脚に力を入れて強化された脚力でビッグリザードに迫り、刀

を一閃。その一撃でビッグリザードは胴体が2つにさよならした。
身体が風のように軽い。俺は今、千でも何でもない風になつているようだフハハハ。

そんな事を考えていると、残りのビッグリザードが全て俺に向かつてくる。

「つはあつー！」

と、魔力を刀に込めて薙ぐ。すると、魔力が刃となつてビッグリザードたちに襲いかかり一瞬でその命を刈り取る。

・・・人向けては使えないな。

何はともあれ、依頼は完了したので牙を取つて帰ることにした。
戦つてる時はそれどころではなかつたけど、可哀想なことをした
な、と今更ながらに思う。俺もいつかはこんな感じで人を殺めてしまふのだろうか、と少しブルーになりながらビッグリザードたちに手を合わせ、その場を後にする。

15 なんか、反則的です（後書き）

次回予告

潤「殺したものの分まで生きるのが俺の責任、か…ま、頑張りますか。さて、次回も引き続きギルドでお仕事だ。次はどんな依頼を受けようかな~。ん? 何か新たな出会いの予感」

16 なんか、巻き込まれました（前書き）

ギャグ成分が…足りない

16 なんか、巻き込まれました

「依頼達成ですね。では証明部位を提出して下さい」
あの後俺は身体能力強化を掛けたまま村まで軽く走って帰った。
1キロくらい離れた場所だったが、それを10秒程で帰れた。軽く
走つて時速360キロかよ…半端じゃないな。

つてか最近真面目な冒険っぽくなってるな…作者もギャグ成分が
足りなくて萎びてきてるぜ。お前は植物かっ！」

「あのお、どうされたんですか？」

作者のせいで、心配されけやつたじゃないか。え？ 責任転嫁だつ
て？「めんなさい。

「すいません。これが証明部位の牙です」

そう言つてビッグリザードの牙を60本出す。

「これ全部一人でやつたんですか！？」

お姉さんが信じられないような顔でこちらを見てくる。俺つてそ
んなに弱そうに見えるのかな…

「そうですけど…何か問題でもありましたか？」

まさか、殺し過ぎで動物、いや今回は魔物か…魔物愛護団体に訴
えられるとか？自分で言つていてなんだが、魔物愛護団体つて良い
人なんだか悪い人なんだか分からない団体だな。

「いえ、凄いなーと思いまして…魔物愛護団体が見たら発狂しそう
ですね」

居るんだっ！！魔物愛護団体ホントに居るんだっ！！

「ハハハハハ」

と、乾いた笑いしか出てこない。

「では依頼を達成しましたので報酬です。ビッグリザードの牙60
本なので30匹分、15000ワロです」

どうぞ、とお姉さんがお金の入った袋を渡してくる。

ありがとうございます。と俺は言つて受付を離れた。今はちょうど1時だ。あ、午後の1時な。当たり前？さいですか。

「あと1つくらい依頼は受けられそうだな」「さつきの依頼も2時間くらいで終わつたし。

というわけで掲示板前へ行きま…

「てめえ、何のつもりだ！！」

厄介事の香りが…でも野次馬根性が抑えられねえ。止まれっ、俺の両足！

「だからわたしは他人と共闘なんて無理つて言つたの、もう付き纏わないで」

結局見に来ちまつた…それにしてもどうしたんだ？

ああ、読者の皆さんを置いてしまつたな。今俺の目の前ではゴツい男2人と、俺と同じ年くらいの灰色の髪をもつ少女（ロッドを持つているから魔術師だろう）が言い争つていた。

「てめえが仲間を敵ごと魔法で怪我させたんじやねえか！何だその口のききかたは！！」

ふざけんじやねえ！と、男は少女を殴る！とする。つて冷静に実況してゐる場合じやねえ！

「止めるよ。大の大人が暴力振り回してんじやねえよ」

と、男と少女の間に入つて男の拳を止める。はあ、結局厄介事に首突つ込んじやつたよ。

「てめえには関係ねえだろ！？引っ込んでろ…」

と、男は俺の肩を強く押す。いや、押そうとする。しかし努力の結果虚しく俺はびくとも動かない。

これがこの男の本気だとしたら見かけ倒しもいいところだ。

「目の前で女の子が殴られそうなのに黙つて見てられる程腐つちやいないんでね」

決まつたー！俺の言いたい言葉ランキング第3位の言葉を言えた

♪

表面上は何て事ない顔してるけど、内心はしゃざわらへつである。

「てめえ、表へ出ろ！」

えへ、俺これから依頼受けよつと思つてたのに。時間無くなつちやうじゃん。何で動いちゃつたんだよ俺の足！

つか最近厄介事に巻き込まれる率が半端じゃないんですけど…
1回お祓いしてもらおうかな、作者が俺に取り憑いてますって。危
ない人だと思われること請け合いだな。

「どうした？早く來い。今更謝ったところでもう遅いからな」

おっと、男が待ちくたびれて言つてくる。最近のすぐキレる若者
つて恐いっ。つていうか俺の行動の中に謝るような要素あつたか？
いや、無いはずだ。（反語）

そんな事を考えつつ男の後ろを歩いていく。

ギルドの中にいる者が騒ぎ立てる中、件の少女だけがどこか冷めた
目でこれを見ていた。

16 なんか、巻き込まれました（後書き）

次回予告

潤「はあ、面倒くさいな～ホントに。今から次回が憂鬱だ。俺の運命の管理人（作者）は早いところどうにかしないとな。さて、サッサと男倒して冷めた少女の攻略といきますか」

17 なんか、冷たいです（前書き）

ジュン　は　ふたまた　を　しょつ　と
ゆるします　か？

・はい

・いいえ

・爆発しろ

17 なんか、冷たいです

俺は男に連れられて外に出た。

「さあ、死にたくないきや 全力で来な！」

こんな所で全力なんて出せるわけねえだろ。 つてか全力出したら本当に殺しちゃうかもしれないだろ。

「ハイハイ。じゃ、いくぞ」

と言つて俺は全身に魔力を巡らせる。 もうお馴染みの身体能力強化だ。

「いい気迫だ。 てめえ名前は何て言つ?」

自己紹介してるような暇は無いんだけどなー。 まあ、いいや。

「じゅ、いや・ウェルだ。 ウェル、ウェル、 ウェル・カリー? いや、 ウェル・カーラーだ」

やつちまつたアアア!! 本名言いそつになつた上に偽名間違えたア!! 何だよカリーツてネイティヴなカレーかつ!?

「? 変な奴だな。 カリーは俺だ。 アレン・カリーだ」

カリー居たアアア!! どんな偶然だッ!

「そ、 そんな事よりサツサと終わらそつ」

マジでお願い。 これ以上ボロだす前に早く始めよ?

「生意気言いやがつて。 いくぜ!」

と、 アレン、いや、カリーが俺目掛けて突っ込んできた。

身体能力強化をした俺の目には止まつて、 は見えないけど。 かなり遅く見える。 じゃ、 サクツと

「はい、 終わりつと」

俺はカリーに一瞬で間合いを詰め、 鳩尾に軽く一発叩き込んで意識を刈り取つた。

カリーと一緒にいた男は、 カリーが倒されたのを見るや否や逃げ

出してしまった。薄情な奴だ。

「さじ」

ギルドに戻つて少女の心を開かせるとしますか。

「よつ」「ひみ

ギルドには彼女と受付のお姉さんしか居なかつたのですがに見つけられた。

「なんですか？」

おおうっ、随分冷たい…」リヤセレンの時より難しそうだな。

「変な奴に絡まれて大変だつたな」

「今もあまり変わつていません」

え？ それつて俺の事？ どうやら彼女の認識では今も変な奴（俺）に絡まれて大変な状況らしい。ああ、田から汗が出てきた。今日そんなに暑くないのに。

「そりやど～も。といひで君の名前つて何て言つの～？」

とりあえず話題変更。

「何であなたに教えないではないのですか？」

「君に興味があるつてだけじゃダメか…」

「ダメです」

俺の恥ずかしさを堪えて出したキザなセリフがバツサリ切り捨てられたア！ まだ言い切つてなかつたのに…

「じゃ、俺の名前でも…」

「興味ありません」

そう言い残して彼女はギルドを出て行つた。

まあ、今日一日で心開いてくれるとは思つてなかつたけどね。

「ナンパに失敗してしまいましたね」

受付のお姉さんがニヤニヤしながら見てくる。

ヤメテッ！何か恥ずかしくなつてきた！

その後何だかんだで夜の10時頃に俺は宿の部屋へと戻った。何してたかって？何だかんだだよ、何だかんだ。そこには既にセレンが帰つてきていた。

「遅かつたわね」

そう言つて俺を迎えてくれる。ちゃんと喋つてくれる女の子が居るつていいなあ。さつきとは別の種類の涙が…
「セレン～！やっぱりお前が一番だ～。俺にはお前しかいない」
そう言つてセレンに抱き付く。

「え、ちょ、な、何！？は、離れなさいよ。バカッ！」

顔を真つ赤にして言つてくる。

嫌そうな顔をしてないところから察するに…うん。久しぶりのツンデレだな。

「ゴメンゴメン。今日も～魔術師の女の子に声掛けたんだけど、冷たくあしらわれちゃつてさ～」

俺がそう言つとセレンは目に見えて不機嫌になつて、「バカッ！ジユンのバカ！バカジユン！もう知らない！」

と言つて自分の部屋に戻つてしまつた。

やつぱり女の子の前で別の女の子の話題はタブーだったかな？謝りに行こうかとも思ったが、もう時間も遅いので明日謝ることにして今日はもう寝ることにした。

17 なんか、冷たいです（後書き）

次回予告

潤「ああ、明日はやることがいっぱいだぞ！セレンに謝つて、あの娘の心を開いて、ギルドでお金稼いで…まあ、頑張りますか」

18 なんか、再戦するみたいですね（前書き）

遅くなりました。

言い訳をするなら、他の作者さんの作品を読んでもました。
そうだ、私は悪くない。悪いのはあんな面白い作品を書く作者さん
がいけな…すみませんでした。

18 なんか、再戦するみたいですね

・・・朝になってしまった。昨日は明日の朝にでも考えればいいや、と思っていたのだが、どう謝つていいか分からぬ。

例えるならそう、テスト前日に明日の朝勉強すればいいや。と思つてその日の夜をゲームに費やしてしまい、次の日の朝に後悔するあの気持ちと相似である。ちなみにこれは作者談であり、俺も元の世界で何回かやらかした事もある。

おっと、こんな事言つてる場合じゃないな…

案としては、早いとこ謝る。謝罪の意思表示の為に、謝ると共に贈り物をする。この2つが有力候補だな。紙に書いとくか。

うん、早いとこ謝るを選ぶなら昨日の夜に謝るべきだったな。

そう思い早いとこ謝るにバツをする。

だとすると贈り物か…セレンには悪いけどこの件は俺が贈り物を買つまで先延ばしにしてもらおつ。

そうして贈り物と書いた方にマルをして机の上に置いておく。

「さて」

謝らないのにセレンと会うのは気まずいな…今はまだ6時だけどギルドに行きますか。

『用があるから先に行つてゐ』といつ書き置きをドアに貼つておく。これで気付くだろう。

そうして俺は眠い身体を動かしてギルドへ向かつた。

ギルドには朝だというのに人が結構いた。みんな仕事熱心だなんて感心してしまつたが、後で聞くと今ギルドにいる連中は家がなく、ギルドに入り浸つて1晩中酒を飲み続いているらしい。だからこんなに酒臭いのか。

「今日はどんな依頼を受けようかな？」

昨日の昼まではギルドにあまり乗り気じゃなかつたくせに何で今はノリノリのかつて？そりや贈り物をするつていう目的があるからでしょ。昨日も剣を買つて目的はあつたけどほら、モチベーションの違いが、ね。

さて、依頼依頼

『Aランク討伐依頼』

キルファ村の東にあるシグト山にジーニアスワームが確認された。村に被害を及ぼす前にこれを討伐せよ。

報酬：30000ワロ

証明部位：ジーニアスワームの触角

注意：見た目通りの凶悪なまでのパワーと見た目からは想像出来ない頭脳戦も使える魔物。パーティを組まねば初級冒険者はもちろん上級冒険者も返り討ちに遭つだらう。

そこに載せてある写真は以前俺が死にかけた件のワームだった。あのテカブツ、そんなに強かつたんだな。確かに俺も死にかけたけど。

この依頼はそこら辺の冒険者が受けると死者が出るかもしけれないな…俺は昨日のカレーとの、違つた、カリーとの戦いで冒険者がどのくらいの強さか分かつたが（今朝酔つぱらいから聞いたがカリーはこの村では腕の立つ方らしい）、あの程度では戦いにすらならぬいだらう。

「俺がやるか」

という一種の責任感の下、この依頼を受けることにした。

「おはようございます。この依頼を受けたいんですけど」

受付まで依頼用紙を持って行った。

「おはよつじざいます。依頼の受注ですね……この依頼を受けるんですか!? いくらビッググリザード30体を1人で殲滅したからって、この依頼は冒険者になつたばかりのあなたには無謀かと… あなたがやらなくてもこの村の中級冒険者がやつてくれますよ。最近この近くに現れたジーニアスワームを倒した手腕の持ち主も来てくれるかもしれませんし…」

その声はどこか絶望が混じつているように感じた。つてかそのジーニアスワーム倒したの多分俺つす。
「来てくれるなかつた場合はどうなるんですか?」

「中級冒険者では多分無理でしょうし、国はこんな辺鄙な所にある村なんて放つておくでしょうから軍にも期待出来ません。村にジニアスワームがやつてきたらあきらめるしか無いでしょうね」

国の軍つてのはそんなもんなのか…

だからさつき受付のお姉さんはどこか絶望したような感じだったんだな。しかしそんな事言つと、

「やつぱり俺が受けます。この村にはお世話になりましたし

より一層この変な責任感が暴れ出しちゃうじやないか。

「これ以上何か言つても聞いてくれなさそうですね。分かりました。依頼の受注、確かに承りました。お気をつけ下さい」

その声は不安に満ち溢れていたが、逝つてらっしゃいっていわないだけいいか。もうこの作品の中じやお約束のネタになつてきてるからな…

「じゃ、逝つてきます!」

お約束なら俺もやらないとな!

「洒落になつてしませんからヤメテ下さー!」

言われてしまつた。そんなに頼りなく見えるだろつか…

へ~イと、返事をして出て行く。

「え!? 1人で行くんで…」

何か言つていたが聞こえないと、

そう言えば今日はあの娘居なかつたな…まあ朝早いからな。

さて準備を整えてワーム倒しに行きますか！

待つてろよセレン。良いもんプレゼントしてやつからなー！

18 なんか、再戦するみたいですね（後書き）

次回予告

潤「ああ、セレンには何をプレゼントしようかな～。わっわとワーム倒してセレンの笑顔を取り戻してやるぜーえ？元はと詮ればお前が悪い？まあそういうわざに…」

19 なんか、科学的です（前書き）

作者が初登場を果たします。

19 なんか、科学的です

さて問題です。俺は今何処にいるでしょうか？

- 1・山の中
- 2・焼け野原
- 3・ワームの前

正解は…全部で…す！

そうなった経緯は至極簡単。回想をするまでもないね！

山登り ワームを見つけ 焼け野原

ほら、五七五に収まった。え？ 説明になつてない？

そのまんま何だけどな。準備整えて山に登つたら、運良くワームを見つけて、森が邪魔だつたから魔法で焼き払つた。魔物愛護団体の次は自然愛護団体に怒られそうだけどな。

さて、さつきも言つたが俺の目の前には討伐対象のワームがいる。前回戦つたワームより一回り小さいが、大きいことには変わりがない。それに何か黒い。真っ黒だ。・・・日焼けしたのかな？そんなわけないか。

「お前に恨みはないが、コッチも仕事なんでね…死んでもらうぞ」
悪役になつてる？いやいや、人聞きの悪いこと言わないで下さいよ。前も言つたけど俺は善良な一般市民だから。

そんな事を思いながら俺は身体能力強化をかける。
「そろそろ技の名前でも付けるか、いちいち長つたらしいし」
そして既にテンプレになつてきてる魔力の黒刀を生成する。
「準備も出来たし、いくぜっ！」

そう言つていっしゅ…刹那のうちにワームまで間合いを詰める。・

・・別に一瞬を刹那と言つたことに深い意味はない。

「ハアアツ！」

と氣合いを入れて10太刀くらいワームに浴びせる。しかし、

キキキキンッ！と、金屬質な音がして、ワームの身体に傷つけることは出来なかつた。

「情報通りだな。山で育つたようなワームは硬い鉱物を食物としていて、身体がダイヤモンドのように硬くなつてゐらしい」

はで、誰に向けての説明口調だつたんだろう。

「ならつ、黒鴉つ！」

またまた説明しよう。黒鴉とは以前のビッグリザード戦の時、刀に魔力を溜めて放つた技の名前だ。形状が翼を広げた鴉が敵に突っ込んで行くように見えるから、今名付けた。

ギンツ！というさつきとは違つ音が響いた。ワームの表面に刀傷みたいな痕があるところを見るに、少しば効いたようだ。

さて、次は…と考えていると、ヤツは口を開けて俺に岩を吐き出してきた。

（この攻撃はつ！）

何か見覚えのある攻撃方法だ。みんなも気づいただろ？俺を瀕死に追いやつた原因となつたワームの連続技だ。

飛んでくる岩の配置は俺が右へ逃げるよつた時にそこだけ岩が飛んできていなかつた。

（同じ攻撃は食らわねえよ！）

と、俺は避けることはせず、

「黒鴉！」

で自分に当たる岩だけを碎き即座に

「貫け天雷！サンダーボイル！続いて～、切り裂きの風刃！テクノ

「ウインドー！」

と、2つの魔法を放つた。サンダーボイルは真っ直ぐにワームに向かい、テクノウインドは対象をサンダーボイルに設定し、雷の弾丸に風の刃を纏わせた。

流石にこれだけの魔法には耐えられなかつたが、ワームの身体を貫通する。

・・・ヤツは中も黒い石みたいなので出来てゐるのか。よし、実験の時間だ。

「狂気に乱舞しな！テクノウインドー！まだまだ！テクノウインドー！テクノウインドー！テクノウインドー！」

詠唱が毎回変わるのは気にしないでほしい。なんせその時に思いついた言葉を言つてるだけなんだから。大事なのはイメージなんです。イメージ。大切な事なので2回言いました。

ああ、俺が何したかなんだけど、ワームの体内をテクノウインドで粉々にしています。粉々にアンダーライン、ここ重要。

そんな事出来んのかつて？さつきワームに穴あけた時の傷痕から掘り進んでるから出来ちゃうんだな。

・・・さて、そろそろかな。

「仕上げのファイヤー！」

と、ワームの体内にファイヤーを唱える。最早詠唱してないつて？馬鹿言つちゃいけませんよ。ちゃんと仕上げのつて詠唱したじやないです。

ドガーンッ！――――

といづ音と共にワームの身体はバラバラになつた。

何をしたのかつて？じゃあ科学の授業をしてあげましょ。え？そこまで聞きたくない？え、ちょ、お願ひですから聞いて下さい。

『炭塵爆発』って知ってる?まあ、粉塵爆発の一種なんだけど、炭の粒が舞い上がっているところに種火を注ぐと大爆発が起こる現象のこと。比表面積、つまり体積に対する表面積の・・・(長くなりそなので暫くお待ち下さい)・・・っていう事。みんなも粉塵爆発には気を付けよう?

後は何故あのワームの身体が炭で出来ているか気付いたかだけど、ヤツの身体が黒かったことが一点。事前に調べた情報にダイヤモンドのように、つて書いてあつたからな。もしかしたら炭素を多量に含んでいて、炭素の結合が頑丈だつたからじやないか?つて思つてね。そもそも炭素つていう物質は・・・(長くなります。度々申し訳ありません)・・・という訳。

おっと、話し込みすぎて暗くなり始めちゃつたな…
つて、俺は10時間くらい話し続けてたのか!やべつ、セレンに謝んなきゃいけないのに。

という事で、吹っ飛んでしまつたワームの触角を探すのに更に1時間かかって、15秒で下山し、村へと戻つた。

潤が下山した後の焼け野原にて、

「はい。あの力は我が国に多大な利益をもたらすかと…はい。では引き続き羽山 潤という異世界人を監視します」

という何者かの無線での通信を知る者は、恐らく私(作者)だけだろう。

19 なんか、科学的です（後書き）

次回予告

潤「よし、セレンにプレゼントする分のお金が稼げたぞ！あとは報告してお金貰つて品を買つだけだ！どんな物を贈れば喜ぶだらうか」

20 なんか、不穏な空気が（前書き）

短いです。

勉強が調子良くなったらもう一話投稿するかもしれません。

20 なんか、不穏な空気が

ジーニアスワームの触角を持つてギルドの中にはいると、信じられないというような顔でギルド内に居る者全員が見てきた。

・・・止めてくれよ。そんな目で見られると、興奮しちゃうだろ！え？お前のキャラじゃない？じゃ、やめます。

「はい、ジーニアスワーム、倒してきましたよ」

そう言つて触角を受付の机の上に置く。

「え！？ほ、本当にあなた一人で倒したんですか！？」

失礼な、とは思わない。初級冒険者が、それもこの村に来てまだ日の浅い新人があんなデカブツを倒せたなんて夢にも思わないだろうからな

「はい、一人で倒しました。それと…今日は疲れたのでもう帰らうと思うので報酬の方を…」

帰るというのは嘘だが、この後に買い物をしなければならないので早いとこ報酬を貰いたいのは本当だ。

それにしても、自分から報酬の要求なんて、悪いことしてるわけじゃないんだけど気が引けるな…

「す、すみませんでした。これが依頼の報酬、300000ワロになります」

そう言つて、お金の入った袋を俺に渡す。

お金も受け取つたし、早いとこ退散するとしますか。

「ありがとうございます。では、」

そうして俺はそそくさとギルドを後にした。

さて、今俺は露天商の前にいる。本当は宝石店でセレンに何か買おうと思つたのだが、ここを通つた時に何か心搖さぶれるものがあった。

「よう兄ちゃん。何かめぼしい物はあつたかい？」

と露天商が言つ。

何に俺は心搖さぶれたのだらうか…「このブレスレットか？違ひな。」のネックレスか？いや、これも違う。ウーン…

と悩んでいると、ふと宝石の付いていないタイプの指輪が目に留まつた。あれだな…

「この指輪が気になるんですけど、いくらですか？」

見た目はシンプルなのに安っぽくなく、宝石も付いていないので戦いやすいだろう。

「この指輪は掘り出し物でな、何でも古代の遺跡から発掘されたらしい。魔法も附加されているんだが、生憎魔法の知識はせっぱりでな。良いもんには間違いないなって事で15000ワロでどうだ？」
15000ワロか、日本円で15万円か。安くはないが今はワームを倒したお金があるからな。買いだらう。

「分かりました。15000ワロですね。どうぞ」

と言つて袋から15000ワロを出す。

「はいよ。毎度あり！また頼むよ！」

と言われ、指輪を渡された。

さて、帰るかな。

ということで、宿屋の一階、セレンの部屋の前へとやつてきた。
今日はセレンを見ていないが、この時間ならギルドで依頼を受けてても帰つて来てるだろう。

「セレン～？潤だけぞ～。セレン～？居ないのかな…」

そう思いつつ、何気なくドアノブを捻つた。するとドアは開いた。いや、開いてしまつたと言ひべきか…セレンは用心深くて鍵のかけ忘れなど見たこと無い。そんなセレンが鍵を開け放しで中に居ないとなると、

「部屋が荒れてるな…」

別に部屋がきたないとかつて意味ではない。誰かと争つた形跡が

あるといつ事だ。何かいやな予感がする。

読者の皆さんには申し訳ないが暫く俺が俺らしくないかもしだいが、嫌わないでくれよ？

つまりはスーパー・シリアースタイムに突入だ。シリアルじゃないぞ？え？分かつてる？さいですか。

そこで俺は机の上に紙が置いてあることに気が付いた。

「どれどれ？」

『登城願』

手紙での願い出となってしまったことを失礼する。この手紙を読んでいるのは羽山潤殿とお見受けする。

用件を率直に言おう。貴殿の力にユリナント国国王は大変興味をお持ちになられた。ぜひその力を我が国のために使ってほしいと思われている。

貴殿には一度国王に会って戴きたい。尚、貴殿の連れには先に登城してもらっている。貴殿の賢明な判断を期待する。

らしい。ふざけやがつて、セレンは人質つか？俺は仲間が危険にさらされるのが一番嫌いだつていうのに…国王はよっぽど俺の気分を害したいらしいなあ。

ああ、行つてやるさ城に。きつちり落とし前つけるためにも、何故俺のフルネーム、しかも本名を知つてゐるのか気になるしな。そして何より、セレンを取り戻したい。

そして俺はいつの間にか燃えて灰になつた登城願といつ名の脅迫状をゴミ箱に入れて部屋を出て行つた。

20 なんか、不穏な空気が（後書き）

次回予告

潤「ああ、腹立たしいな。国王に対しては勿論だが、それ以上に仲間1人守れやしない俺自身に何より腹が立つ。次回はギャグは一切無いので悪しからず。今の内に1回やつとくか。・・・ふ、布団が吹つとんだ。

・・・悪かつたな！寒いオヤジギャグで！」

21 なんか、悪魔らしいです（前書き）

何とか2話目投稿

21 なんか、悪魔らしいです

「ここが王都コリナントか？」

俺は村の人に王都の方角を教えてもらい、身体能力強化を使って1時間程走つて王都に着いた。

「石造りの街は、王都なだけあってかなり活気があるんだもってあれが城と」

街の中心には一際大きく、豪奢な建造物がある。

「早速乗り込みたいところだけど、顔は見られない方が良いな…」
「さて、行くか」

「エリはコリナント城であるぞ。怪しい面を着けおつて、何者だー。あの後、俺は城へ向かつて今門番に足止めを食らつてゐる。

「俺は羽山潤だ。話は聞いているだろう?」

貴様が率いる軍隊が、この城を攻め下すことは不可能だ。しかし、城の中には案内人がいる。」

しまつた！黒髪は少しちじや珍しいんだつた。これじや後で染めないと駄目だな。

「了解した」

そう言って、俺は城の中へと入つていった。

「あなたが羽山様ですね。それでは謁見の間へと案内させていただきます。それと、王にお会いになるのですから、その面はお外し下

۱۰۷

「悪いが外せない理由があつてな、外す事は出来ない」

そう案内役の爺さんに言わされたが俺は拒否した。髪の事くらいで

計画を変更するわけにはいかない。

「絶対に失礼をはたらかないと誓つとこいつのなら許可しましょ」

爺さんがため息をつきながら言つてきたので、

「分かつた」

と返した。

「こゝの先が謁見の間です。くれぐれも王に失礼の無いよう」

再度俺に釘を差して、爺さんは扉の奥へと消えていった。

それにしても無駄に豪華な扉だ。こゝの扉を売るだけで何人の人が救われることか…

「こんな事考えてても時間の無駄だな」

そして俺は扉を開けて謁見の間とやらに入つていた。

「面を上げよ」

60歳を越えたくらいの外見の王にそつと言われて俺は顔を王に向ける。今俺は片膝をつき右手を左胸に当てるという相手に敬意を表す格好をしている。形だけだがな。

「大臣から話は聞いた。やむを得ない事情があるそつじゃから面を着けての謁見を許そう」

「ありがとうございます」

ホントはこれっぽっちも感謝していないがな

「今日そなたを登城させたのは、他でもない。ワシがそなたの…」

「そんな事よりセレ…連れはどこですか?」

王のお言葉を妨げるなんて!…といふような声が聞こえるが無視する。

すると王は、よいよと取り巻きを落ち着かせ、

「そなたの連れは無事じや、ほれ」

そう言つて王は兵士に顎で指示した。すると兵士はセレンを連れてきた。首に剣を突き付けながら。その光景は俺の理性を吹き飛ばすには十分過ぎた。

「てめえ、どうこいつもつだ？」

「さて、やつと本題じや。今日そなたを登城させた理由。それはそなたをこの国のために利用する」とじや。断るとは言わせんぞ。この娘が死ぬことになるからの」

王がとやかく言つている間に俺はセレンとマイコンタクトをする。良かつた、面をしていたが通じてるようだ。

んじゃ、俺も行動を起こしますか。

「断る。そんな役立たず、俺の手で殺してやる。闇針っ！」

そう言つて俺は技を繰り出す。新技闇針は、俺の魔力を針状にして対象を貫く技だ。今回俺は闇針を2本使い、1本目を俺の手からセレンの腹の直前、2本目をセレンの背中から発動させることによつてセレンに貫通させたように見せかけた。

セレンも口の中を歯で切つて血を出し、如何にも吐血しましたつて感じで倒れた。良い演技だ。

「な！？貴様、氣でも狂つたか！？仲間を殺すとは…」

王や謁見の間に居る者全員が驚きを隠せずにいた。

「これで足を引っ張る奴もいなくなつた。思いつ切りいくぜ！」

「ク、クソ！お前たち、何をしておるーサッサとこの化け物を殺さんか！」

王がそう指示すると兵士が王を守るように俺の前に立ちはだかつた。

そんなどまつてると、

「黒鴉！」

の格好の獲物だぜ？

俺の黒刀から出る黒い魔力の波動が兵士たちの命を残さず刈り取る。

後は王だけだな。

「な！？闇魔術じやと！？そなた、悪魔か！？」

「何の事やらせつぱりだな。お前に聞きたいことがある」

「な、何じゃ？ 答えるから命だけはたす…」

「何で俺の本名をしつてる？」

これが一番の疑問点だ。セレン以外に俺の本名を知つてゐる人間は居ない。セレンもそうペラペラとは喋らないだろうしな。

「ウィスニルという旅をしてある呪術師がそう予言したのじゃ」

「そいつは何て言った？」

「羽山 潤という異世界人がこの国に現れ、圧倒的な力を以てこの国を大きく変えるだろう。と言つておった」

「そうか。じゃ、次の質問だ。さつき俺の事を悪魔と言つたな？ それはどういうことだ？」

「その魔力の事じやよ。闇魔術を使える者は悪魔の血を引いてゐる。今はもう世界に数人居るか居ないかじやがな」

「そうか、分かつた」

「じょ、情報を渡したのだから見逃してくれ！」

「そうしても良かつたんだがな、お前は俺の仲間を人質にとつた。これは俺の中じや万死に値する」

「な、何をぬけぬけと！ 仲間は貴様が殺したのではないか！」

「まだ分からぬいか。セレン」

そう呼びかけるとセレンが起き上がつた。

「何よ。私を置いて依頼に行つちやつた悪魔さん」

・・・大分ご機嫌斜めだ。

「そう拗ねるなよ。ちゃんと助けにも来ただろ？」

「遅いのよ！ 全く」

そんなやりとりを王は信じられないといった顔で見ていた。

「セレン、こいつに何かされたか？」

「私の身体をペタペタと触つてきたわ。殴り返したけど」

セレンの姿勢は上の上だからな。

「そいつは良くないな。何かセレンが男に触られたってだけで腹が立ってきた。やっぱり許せないわ。じゃあな」

俺はそう言って黒刀を王に振り下ろした。

「さて、行くか。セレン?」

俺はセレンが真っ赤な顔で立ち去りしている。何か言つたつけ?
「私がジュン以外の男に触られるとジュンは腹立たしい?」
う、そこか! 何だか俺まで顔が赤くなってきた気がする。

「ま、まあな。さ、サッサと行くぞ」

俺すんげ~じどろもどろ。

いつもと態度が逆転してゐるな。これは良くない。

「フフッ」「

そう言つて小悪魔的な笑みを浮かべるセレン。お前だつてある意味悪魔じやねえか。

そんな事を思いながら帰路につひびきしている俺たちであつた。

21 なんか、悪魔らしいです（後書き）

次回予告

潤「最近セレンがシンデレージャなくなってきたる..まあ、素直になつてくれるのは嬉しいんだけど。さて、次回は城を出でびっか行きます。そうだ！指輪わたさねえとー！」

22 なんか、恐いです（前書き）

スカイツリーは634メートル。すみません。意味はありません。

22 なんか、恐いです

何か前回いい感じで終わってしまった、まだ城に居たことをすっかり失念してしまっていた羽山潤です。あ、そうそう、失念つて108個ある煩惱の1つなんだよ？やつたね。コンプリートまでと107個だ。え？別に興味ない？さいですか。

それにして、

「今日初めて人を殺しちゃったけど…不思議と平氣なもんだな」「ジユンの世界では、人は死ななかつたの？」

「少なくとも俺の周りではな」

「そう…誰かを守る為だつたりする時は人を殺す事も仕方のない事だと思つわ」

「そうだな」

「そ者は言つもの、あまり慣れない方が良いに決まつてる。氣を付けないとな。」

「さて、城を出るか」

兵士がゾロゾロと出てこられても面倒だからな。

「出るつて、どうやって出んのよ」

「そりゃ、正面から？」

「そう言つとセレンはあからさまに溜め息をついて、

「あんたバカ？そんな血まみれな格好で出してもらえるわけないでしょ」

と返してきた。今俺は王の返り血で服が赤黒くなっている。

じゃあ、どうするかな～。魔法使つて壁突き破つて行くか？いや、音で兵士たちが寄つてきそうだしな。

音？うーん、やってみるか。

「セレン、倒れてる兵士の剣を3本抜いて2を詠唱の間の入口に刺して、1本は護身用にセレンが持つとして」

セレンは今戦う手段がないからな。

「分かつたけど、何をするつもり？」

「ちょっと科学の実験をな」

後ろで科学？ 何それ。という声が聞こえるが気にしない。魔法中心のこの世界では、科学なんて栄えてこなかったのだらう。

「まず、氷塊よ！ アイス！」

そう詠唱して、剣を刺した場所辺りに氷塊を作る。

「続けて、炎球よ！ ファイヤー！」

続けて詠唱し、氷塊を溶かして水にする。

「そして、雷光よ！ サンダー！」

最後に剣に向かつてサンダーを打つ。何をしようとしてるか分かった人も居ると思うが、今俺は水を電気分解して水素と酸素を作り出した。水素つてのは可燃性で爆発を起こす。酸素も助燃性で火には相性が良いからな。

「仕上げの～、燃えちまえ！ ファイヤー！」

バーンッと大音響をさせて火に触れた水素が爆発をする。出来るもんだな。

「よし、直ぐに兵士たちが来るだろ。セレン、逃げるぞ～」「な、何で急に爆発したの？」

と、謁見の間の入口を呆然と見てている。ダメだ。完全に惚けてる。

「ちょっと失礼」

そう言つて俺はセレンを片手で抱き上げる。もう片方はまだ役目が残つてるからな。

「ちょ、あんた何してるによ～」

真つ赤な顔をこちらに向けて言つてきた。

・・・噛んだことはスルーすべきなんだろうか。まあいいや。

「脱出するんでちょっと大人しくしてくれよ～？」

返答を待たずに強化しつぱなしの脚で思いつ切りジャンプする。

そろそろ1階に兵士たちが集まつてくる頃だからな。2階は人が少なくなつてゐるハズ。

そう思いつつ、迫つてきた天井を右手に持つた黒刀で切り裂き穴を開ける。気分は斬鉄剣を持った某怪盗の仲間である。

そのまま2階、3階、4階……11階、12階の天井を……って、何階まであんだよ！！

と思つていたら15階の天井で最後だつたらしく、屋根に出て下を見るといふ兵士が王のもとに集まつてゐる。

前を見ると、この国を一望できるくらいの高さらしく、カラフルの街のどでかいギルドとか見える。あ、そういう、実は俺つて……高所恐怖症なんだよおおお！めつた恐え！脚がガクガクする～！「セ、セ、セ、セレンさん？じ、実は俺、恐所高怖症、じゃねえや、高所恐怖症なんですよよ。ちょっと一旦しばしの間、お、降りて戴いてもよ、よろしいですませんか？」

「あんた、何言つてるか分かんないわよ。いいから早く降りなさいよ」

セレンが言つてくる。わ、わりゅかつたな。何言つてるか分かんなきゅて。めちゃくちや噛みまくつたが、き、気にしないでくれ。「い、いや、だからセレンが一旦降りて下さい。お願ひします」そこでセレンは何かに気付いたような顔をした。

「ああ～、もしかしてジュン高い所こわ……」

「言わないでえ！お願いだからそれ以上言わないでえ！」

と、恥も外聞もなく叫んだ。（潤の口調がウザいので、ここからは普通の口調に吹き替えさせていただきます）

誰にだつて言われたくないことの7つや8つあるんだよ……大分多い？俺はこれでも足りないがな！

まあ、とりあえずセレンが降りてくれた。

「で、どうやって降りる氣なの？」

セレンが聞いてくる。

「そりゃ勿論、城での騒ぎが収まつて俺たちの事が忘れ去られた頃

「…」

「そんなの何年掛かるか分からぬじゃない！」

良いじゃないか別に。せつかちな奴だな。

「じゃあセレンは何か意見ある？」「

「そうねえ、こんなのどう？」「

そう言つてセレンが俺に近づいて来る。

なんだ、その笑みは。ま、まさかお前…

「逝つてらっしゃい」

俺を突き落としやがつた～！しかもこの小説で初の音符をあんなに使いやがつて。後お馴染み過ぎて忘れるところだつたけど誤字～！…しつけ～よ、そのネタ！

「「」の悪魔～！～

と、俺はだんだんと遠ざかるセレンに向かつて叫んだ。

悪魔はあんたなんでしょ？と、声が聞こえた気がしたが、それは気のせいたら気のせい。

22 なんか、恐いです（後書き）

次回予告

潤「ああああ～！～！～落ちてる～俺落ちてる～～～次回予告ど
こひじやないよ～落ちてるよ今～うわうわうわ～～～！」

23 なんか、何事もあしません？（前書き）

何とか2回目の投稿
ちよつと遅めに知りです

23 なんか、何事もありません？

落ちる。墜ちる。墜ちる。空間的に、また精神的に上にあつたものが突然下に位置が変わることを言つ。なら上といつ概念を無くせばいいんじやないか？俺はそう思ひ。上を無くせば下も無くなる。みんなハッピーじやないか。

つまり俺が何を言いたいかといつと、

「誰だこんな高い城建てた奴～！～！」

うん。高い建物良くない。高所恐怖症に対するイジメかつ～イジメ、カツコワルイ。

にしても、落下しそぎじやね？かれこれ20秒位落ちてるぞ！そんなに俺を恐怖のどん底に突き落としたいの～？いや、実際落ちてるけどひ、2通りの意味で…

城の高さが100メートル位だつたから…約4・5秒か。随分長い4・5秒だなあ作者さんよお。お前のせいだつて事は分かつてんだよ！元に戻しやが…うぐ。

作者の野郎、急に戻しやがつて…舌噛んじやつたじやねえか。ん？そういうや俺の脚の下に地面がある。いや、さつきからあつたけど、触れてるつて意味でな。今回は作者に感謝すべきだな。助かつたぜ。全く、毎回いつもつて助けてくれれば俺だつて作者に…

「ジユン！ちゃんと受け止めなさいよ～！」

ん？何処からか声が聞こえるが…つて上か…？

上から誰か…つてあれはセレンか！？もう魔法も間に合わねえ！こうなつたら…・・・気合いだ！とりあえず邪魔だから面を外そ。今は誰も見てないしな…

4・5秒のフライトを終え、セレンが俺のもとへ飛んでくる。俺の計算が正しければ、セレンは44キロのスピードで落ちてきている。

うん。無理だ。・・・いやいや、諦めるな、俺。誰もが一度は憧れるお姫様キヤツチのチャンスだぞ！やつてやる、やつてやるうじやねえか。

「よつこじせつとー」

結果を言つと、普通に成功しました。

「つかセレン。お前思つた以上に軽いな」とするとセレンから殺意が…って何で？俺褒めたよね！？タブーつて重いつて単語だけじゃないの！？

「悪かつたわね。“思つた以上に”軽くて、そんなに重く見えるのかしら？」

見たこともないような素敵な笑顔でこちらを見てくる。ま、魔王だ…悪魔なんともんじゃねえ、魔王がいらっしゃる。

「い、いや、そんなつもりは無かつたんだ。落ちてきたときの衝撃があまりにも軽かつたから…40キロ位しか無いんじゃないか？ハハハハ

笑つて誤魔化そうとする俺。対して、

「私は……私は38キロよー！！」

涙目になり、今にも泣き出しそうになつてるセレン。

つかセレン。38キロつてどういう事だ？160センチ位身長もあって、胸だつて一応はあるのに…うん、人体の神秘だ。

つて、こんな事考へてる場合じやなかつた！

「セ、セレン？お前にプレゼントがあるんだけど」

といふあえず話題変更。指輪もわたせて一石二鳥つてな。

「にゃによ～」

涙目＆上田遣いは反則だつて前にも言つただろ！審判！ちゃんと

反則とれよ！

「この前セレンを置いてギルドに行つた日を～、実はセレンにプレゼントをしようと思つてたんだ」

「・・・・・・」

無言。か。拒否しないつてことは興味があるのかな？

「目、瞑つてくれるか？」

「は、速くしてよね！」

「そう言つとセレンは大人しく目を閉じた。

さて、どの指に指輪をはめるか。セレンは右手に滑り止めの革手袋（指先が出るタイプ）をしているので無理だな。指輪に合いそうな指は…薬指か。テンプレな展開になりそุดが致し方あるまい。

「いいぞ、目を開けて」

セレンは目を開けて自分の左薬指を見て顔を真っ赤に染めた。あの反応は、やっぱりそういう意味があるのか。

「ジュー、ジューン…これ本気？」

？ よくは分からぬがこほどりあえず、

「ああ、本氣だ。セレン、左薬指に指輪をはめる意味分かつてるか？」

自分は如何にも知つてます。つて感じでセレンに聞く。

「『あなた以外の女性には興味がありません。もし私が他の女性を一瞬でも見たならあなたは私を罰して下さい』って意味よね？」

重おおおおおいつ！！俺が思った100倍は重いわ！この世界はどうだけ浮気が嫌いなんだよ！

「え？ あ、いや…俺の世界では、『あなたとずっと一緒に居たいです』みたいな意味なんだが」

するとセレンは湯気が出そうなほど更に顔を赤くして、

「ずっと一緒に…ば、ばかっ！何言つてんのよ…」

と言つて先に歩いていってしまった。

村に帰るまで左手をチラチラと見ていたので、一応氣に入つてくれたんだろうか…

「そりいえば、結局あの指輪に掛かっている魔法は何だつたんだろう？」

そんなことを考えながら俺は帰路についた。

23 なんか、何事もありません？（後書き）

次回予告

潤「いいんじゃないかな？偶には平和な回があつても。俺が落丁して
るシーンは命懸けだったがな…え？ そうでもない？ まあ、作者がな
んかしたからな。さて、次回はとりあえず村に戻るぜ！ ま、直ぐに
俺たちはお尋ね者になるだろ？ けどな」「俺たちはお尋ね者になるだろ？ けどな」

24 なんか、図を出せや (古画舎) (前書き)

なんとか1話投稿
遅くなりました

24 なんか、国を出ます（古画編）

つて事で、帰つてきましたキルファ村。といつてもすぐに出るつもりだけね。

「セレン、分かつてているとは思つが俺たちはもうこの村、いや、この国を出るからな。準備とかは早いとこしてね」

「分かつた。出発は何時なの？」

「そうだな。早い方が良いけど、お互に準備があるからな…明日の朝10時に村入り口でどう?」「うう?」

ちなみに今は夜の10時頃だ。セレンを助けに行つたのも6時頃だつたからな。

「分かつたわ。それまでは自由行動つて事でいいの?」

「ああ。そのつもりだ」

俺も調べたい事があるからな…
じゃまた明日。と、俺とセレンは別れた。

さて、まずはギルドに行くか。

「すみませ～ん」

俺は、ギルドで受付のお姉さんを呼ぶ。

「はい、どうしました?」

奥からお姉さんが出て來た。俺がギルドに來た理由、それは

「あの～、この前カリーに付き纏われてた女の子ですけど…」

「ああ、あなたがナンパしてたあの方ですね?」

あの方?随分丁寧だな。

「ナンパじゃないけど…今あの娘何処にいるか知つてます?」

「あの方は今朝、どこかに旅に出ると仰っていました」

あれ?仲間になるフラグじゃなかつたの?まあ、いいや。それにしても、

「さつきからの方って言つてますけど、偉い人なんですか？」「え！？あの方を知らないんですか！？まあ、ならナンパしてたのも頷けるか…」

だから誰なんだよ。

「で、誰なんですか？」

俺がそう急かすと、

「の方はウイスニル様です。呪術師であり、プロミネントギルダーでもある、未来視のウイスニルです」

こんな所で意外な名前が出たな。王を唆した奴か。あれは仲間フラグじゃなく、何か別のフラグだったのか。何かガツクリだな。つて、あの娘プロミネントギルダーだったのかよ！俺がジーニアスワーム倒さなくても良かつたじゃん！

「へへ、有名人だつたんだな？」

と言つて俺は受付から離れた。

俺はあの後、今後の安全の為にもプロミネントギルダーについて調べる事にした。敵対したときは逃げなきゃならないからな…

「プロミネントギルダー、プロミネントギルダーつと」

そう思い、俺はギルドの資料を物色しだした。

「おっ、あつたあつた。これだな」

『最新版 プロミネントギルダー』

プロミネントギルダーとは数いるギルダーの中でも、その名の通り突出した実力を持つ10人のギルダーを指す。プロミネントギルダーはいずれも国に所属しているが、国内を旅しているため所在地不明。現在のプロミネントギルダーは、

- ・最聖賢 アレス
- ・守誓壁 ヘクト
- ・未来視 ウイスニル
- ・悪魔殺し テナ
- ・時操師 クラン
- ・大気使い シニフ
- ・瞬息剣 シリチナ
- ・魔天剣 クラウ

・邪神王 サナトス ・獸懷狼 ノルティ
の10人で構成されている。

「ここまで読んで感想を一つ…厨一かつー何で一つ名が付いてんだよー」

「俺は悪魔殺しつて奴だけは会っちゃだめだな」

俺悪魔らしいし。出来れば邪神王なんてヤバそうな奴にも会いたくない。つてかプロミネントギルダーには誰にも会いたくない。あれ?これフラグ立っちゃった?

「まあ、プロミネントギルダーについてはこんなもんでいいだろ」

ギルドを出た俺は不意に立ち止まり、

（（おい、KY女神、久しぶりの出番だぞー））

（（まつたくだよー！　11話ぶりの登場のヒロインなんて普通いないよー））

11話ぶりの登場か…

・・・もういらなくね？作者に頼んで今度消して…

（（そこつー！不穏な事考えない！））

見透かされてたか。つてか、

（（KY女神、お前はヒロインだったのか！？））

（（何で今知りましたみたいな顔してんのよー最初に出会った女子じゃない！））

（（いや、それだけでヒロインにはなれないと思つぞ？つてか読者の皆さんもヒロインはセレンだけだと思つてるだろつじ））

（（フフフ、そうか、あの娘が全部いけないんだね。あの娘さえいなければ、あの娘さえいなければ…））

（（今更ヤンデレは無理があるぞー））

（（やだやだー！ヒロインがいいー！））

（（駄々をこねるなーお前女神とか名乗ってるけどただの中学生だ

るー。)

((ううん。今年で 6 7 5 3 歳だよ？))

((だいぶいいてる！！その割に精神年齢低っ！！))

((失礼ね～、人間に換算するとまだ 1 5 歳だよ～))

((余裕で 1 万歳を越える予感つ！！つて、こんな事話すために呼んだんじやないんだよ。俺たちはこの国を出ようと思つんだけど、どの国がいいと思う？))

((あのセレンって娘と相談すればいいじゃない))

((セレンはこの国から出たこと無さそうだったからな))

((うーん、私個人としてはレーテルンへ行ってほしことにろだけど、運命の女神はハリンテへ行けつて言つてる))

((どんな国なんだ？))

((レーテルンは冥府の国つて呼ばれてて、アンデットたちが…))

((よし、ハリンテへ行こう))

((まだ最後まで言つてないのに～。ハリンテは大らかな国柄から人種差別が無く、獣人たち多く住んでる良い所だよ？それでもいいの？))

((いいよ！むしろ大歓迎だよ！))

((面白いと思うんだけどな～、レーテルン。・・・あつ、仕事入っちゃったから今回はこれで))

((あう。俺も聞きたいことは聞いたからな))

((んじや、また呼んでね～))

((そう言つてあっちから切つてしまつた。さて、つぎは何時になることや？))

「よし、行き先は決まったな。じゃ、旅の準備するか

といった感じで食料や装備を整え、明日に備えて寝る事にした。

24 なんか、国を出ます（計画編）（後書き）

次回予告

潤「新しい国か…どんな所かワクワクするなー前は俺が待ち合わせに遅く来たから、次は俺が先に行くようにしないとな」

25 なんか、図を出せや（玉藻編）（前書き）

期末テストが山場だつたもので… 更新遅れて申し訳ありません。

25 なんか、国を出るや（玉藻編）

「さて、そろそろ行くか。待ち合わせは村入り口だつたよな
今は午前9時過ぎ。村入り口までは5分掛からない。ちょっと早
い気がしないでもないが、俺は前遅れたからな。
そう思いつつ俺は村入り口へと歩いていった。

「セ、セレンっ！？何でいんの！？」

そこには例の黒いローブにフードを被つたセレンが居た。現在9時10分。どういう事？

「あんたが此処に集合つて言つたから居るに決まつてんでしょう？何わけ分かんないこと言つてんの？」

「いや、そうじゃなくて…もしかして待つた？」

「いいえ、5分前に来たばかりよ」

良かつた。どうやらそれ程待たせていないらしい。

「そうか、待たせて悪かったな」

「い、いいのよ別に、まだ集合時間まで50分もあるから」と言つて顔を赤らめるセレン。何故赤らめる？ま、いいや。「え～っと、今回の旅はこの国を出よつと思つてのは前に言つたよな？」

「ええ、聞いたわ」

「そこで目的地の国だけど、ハリンテへ行こうと思うけど何か意見ある？」

「いいえ、人種差別がないような国だし、この国よりも過ぐしあやすいと思つわ」

セレンはフードから出でている前髪を弄りながら言つた。あ、髪染めなきや。

「じゃ、問題も無いようだし、出発しますか」

「出発つて、ハリンテが何処にあるか分かってんの？」

「…………ちよつと待つて

- (（おいＫＹ女神、2話連続で出番だぞ））
(（出番？いよいよ私もヒロイン入りが認められたかな～）)
(（そんな事、何で人が生きてるのか考える位ビリでもいい。ハリンテはどうぢちにある？）)
(（とても突っ込みづらい…重要なの？ビリでもいいの？）)
(（どうでもいい）)
(（どうでもいい）)
(（あつさり切り捨てられた！）)
(（つてか早く教えるよ、セレンが待ってるだろうが）)
(（何で不機嫌！？原因あなただよね！？ま、いいや。ハリンテはキルファ村から西へ馬車で10日行つた所に国境があるよ～）)
(（そうか、分かった。次に出番があるか分からないけど、じゃあな）)
(（嫌な終わり方つ！！絶対出るからね～）)
- 「西へ馬車で10日行つた所だつて」「だつてつて、あんた誰にも聞いて無いじゃない」
やべつ、なんて言い訳しよう。
「・・・ちょっと脳内会議してた」「その間は何なのか知りたいけど…まあ、いいわ。じゃカラコルの街に行きましょ」
セレンと会つたあの街か。って、
「キルファには無いのか？」
「キルファにあつたらカラコルから歩いてこないわよ」「ごもつとも。
「んじや、カラコルに戻りますか

カラコルまでの道のりではこれといった事も無く着いた。強いて

「さあ、巨大なもやしと戦つたり隠された遺跡見つけたり…え？詳しく話せって？いやいや、大したことじゃないから。

「さて、カラコルに着いたわけだが、馬車は何処で乗れるんだ？」

「前回来たときはギルドと図書館、武器屋しか行かなかつたからな。あ、武器屋で買ったロッド、キルファの宿屋に忘れてきた！まあ今は黒剣が使えるからいいんだけど…」

「馬車は街の北側にある馬車小屋で乗れるわ」

「今俺たちは街の南門つて所にいるから正反対だな～、めんどくさ。

「そういうやセレン、プロミネントギルダーって知ってる？」

「街の中を歩きながら何となく聞いてみる。

「当たり前でしょ。この世界に居て知らない人はいらないわよ。一人が一国の軍隊より強大な力を持つているらしいわ

「あのウイスールって娘もそんなに強いのか…ソロで行動するのも頷けるな。

「そりや恐ろしい、出会いたくも無いな～」

「一部のプロミネントギルダーを除いて、国の召集がかかつて戦争をする時以外は人とは戦わないらしいから大丈夫よ」

「一部は好戦的なのか…出会つたら人生終了のお知らせだな。

「誰がどの国に属してゐるかつて分かるの？」

「出来れば悪魔殺しがハリンテに居ないことを祈る。割とマジで。

「この世界には5つの国があつて、中央国家コリナントには未来視、冥府レー・テルンには邪神王と魔天剣、商業国家マナトには最聖賢と大気使い、バーラン共和国には守砦壁と時操師、そして自由国家ハリンテには悪魔殺しと瞬息剣と獣懷狼が所属しているわ

「はい。気まぐれセカンドライフ、バッドエンド決定です。つてか俺が悪魔殺しに殺されてデッドエンドです。

「セレン、今までありがとう」

「何バカなこと言つてんの？プロミネントギルダーなんてそうそう会わないから大丈夫よ。私だってまだ会つたこと無いわ」

じゃあ神にでも祈りますか。あ、KY女神にじゃないからそこ勘違いしないよう」。

「とにかくこの格好で普通に街中歩いてるけど、俺たちって指名手配とかされてないのかな?」「別に兵士を呼ばれたりもしないしな。

「多分それはこの国の政府が国民に支持されていなかつたからだと思つわ」

「なるほど、反乱でも起こされちゃたまらないって事か」

「そういうこと……着いたわよ。その家の内で受付を済まして、馬車に乗れるわ」

セレンが指差した先には馬車小屋とは言えないくらい大きく、立派な家があつた。

「じゃ、受付を済ませますか」

と言つて俺たちは馬車小屋に入つていつた。

「あの~、ハリンテまで行きたいんですけど……」

俺は受付のおじさんに声をかけた。

「受付はあつちだ小僧」

と言つて奥のお爺さんを指差した。この人受付じゃなかつたのね……つか間違いのくだりいらなくね?作者さんよお。どうせ同じ事言つんだから。

「あの~、ハリンテまで行きたいんですけど……」

ほら、一言違わず変わんねえよ。

「ハリンテのどこじや?」

それは考えてなかつた。

「とりあえず国を中心の街で」

とりあえずつて……といつセレンの声が聞こえるがスルー。

「ハリンガルでいいのかの?」

「はい。そこでお願ひします」

合ひてんのか間違つてんのか知らんがな。

「それなら1人3000ワロ口じや」

2人なんで、と言つて6000ワロを渡す。だいぶ高いな…

「確かに受け取つた。2番馬車があと15分で出るからそれに乗りなさい」

分かりました、と俺たちは言つて、早速2番馬車に乗り込んだ。

15分後、馬車が出る時間になり、俺たちの乗つた馬車は出発した。それから…え? もう終わりの時間? 分かったよ。じゃ、続きはまたの時間にな。

25 なんか、図を出さず（玉藻編）（後書き）

次回予告

潤「次回は馬車に乗つてハリンガルに向かうぜ！ 盗賊に襲われたりしないか今からガクガクブルブルだ。それと作者、あんまし読者の皆さんを待たせんじゃねえぞ？」

26 なんか、出会つねやこもした（前書き）

久しぶりの2話投稿（予定）

26 なんか、出合ひがありました

…………え？ もう始まつてんの？ 早く言つてくれよ作者ア、 気付かなかつたじゃん。

さてさて、現在俺たちは馬車に乗つて移動中です。因みに既に旅は6日目に突入。前回出発したばつかりじゃないかって？ そりや昨日までの5日間は何もなかつたから作者がカツトしたんじゃない？ ひたすら街道を走り続けて魔物に襲われる事も無かつたしだが俺は一つ言つてやりたい。今日何かが起つると。じゃなきや今日もカツトされてるはずだもんな。

どうせそのうち御者が盗賊だーなんて言つて…

「盗賊だー！ 盗賊が来たぞ！」

ほらな。

外を見てみると、俺たちの馬車の周りを取り囲むように、馬に乗つた連中10人ばかりが迫つてきた。

「盗賊を追い払う手段みたいなのつてあるんですか？」

俺は窓を開けて外で馬を操つている御者に聞いた。

「い、いや、ない。普段ここは治安が良くて魔物や盗賊の類が出ない街道だからな」

んじや、やるしかないのか… 俺としてもサッサとハリンガルに到着したいからな～

「そうですか。俺とそこにいるセレンって女の子は冒険者なんで、戦いますよ。ただ、危険ですので馬車の荷台に入つて、窓から外を見ないようにして下さい」

実際の所は俺の悪魔の力とやらを見られたくないからなんだけどな…

「あれだけの人数を2人で大丈夫かい？」

そこには心配というより、下手に怒らせてこひらに被害が及んで

も困るといった表情があつた。

「はい、ご心配無く。さ、早く荷台に入つて下せい」

苦笑いを浮かべて返す俺。そんなに頼りなく見えるかな…

「分かった。頼むよ」

そう言つと、しぶしぶといった感じで御者は馬を止め、荷台へと入つて來た。それと入れ替わりで俺たちは荷台から出て屋根の上に立つた。

「さて、セレン、準備はいいか？」

「いつでも大丈夫よ」

そう言いセレンは剣（城で奪つたヤツ）を構えた。

「じゃとりあえず、俺は右の5人を倒すからセレンは左の5人を」「分かったわ」

そう言いセレンは屋根から飛び降り、左の敵へと走り出した。

「じゃ、やりますか〜」

とりあえず身体能力強化をかけて、黒刀を創り出す。

「んじや、黒鴉つ！」

俺は目の前に迫つてきた盗賊3人を殺さない程度の魔力で薙払つた。

「続いて、闇針つ！」

俺の黒い魔力を見て呆然としている盗賊の1人の四肢を闇針で貫いて無力化する。あと1人が…

今俺の前には盗賊の頭と思われる2メートルを超えようかというゴツいおっさんが斧を肩に担いでいる。

この雰囲気、出来る！

・・・言つてみたかっただけなんでお気になさらず。

「俺の仲間を倒すたア、なかなか強いみたいだなア」

あ、意外に声が幼い。

「なら素直に退いてくれないか？」

「そいつは無理なお願いだ。このままじゃ俺等のメンツが保てねえでしあうね。斧だけでやる気満々だもん。

セレンは・・・まだあつちで戦つてるか・援護は期待できないな。

「何ボーッとしてやがんだアアア――！」

盗賊の頭は隙を見せた俺に向かつて斧を振り下ろした。

「危ねツ！」

と、ギリギリでかわす俺。攻撃が速い！

「おらあ、まだまだ！」

いずれも急所を狙つて連續で振り下ろしていく。

なんつゝ速さだ。身体能力強化した身体で避けるのが精一杯だ・
避けてばっかじや俺に当たんねえぞ！」

「分かつ、てる！」

チクショウ、反撃しようにも隙が…

「終わりだアア――！」

盗賊の頭が頭上から斧を振り下ろす。ヤバッ！これは避けらんねえ！

「爆散つ！」

どこからか声がして俺と盗賊の頭は吹つ飛んだ。た、助かつた。…
にしても誰が…

声のした方を見てみると、騎士の鎧に身を包んだ人間がいた。声
からして多分男だろう。

「間に合つたか・その少年、手荒な真似をして済まなかつた」
騎士は俺に向かつてそう言つた。どうやら俺の敵ではないようだ
な…

「てめえ、なにもんだ！」

盗賊の頭が騎士に言い放つた。

「ハリンテ国宫廷騎士団長といえば分かるかな？」

「ハリンテだと！？てめえ、追つ手か！」

「そういうことだ。大人しく投降してくれればこいつらとしても助か

るのだが

「ふ、ふざけるなアア！！！」

顔を怒りで赤くして宫廷騎士団長さんとやらに突っ込んでいく。
つか俺蚊帳の外つて感じだな…主人公なのに。

「聞いてはくれないか…」

そう言つと、宫廷騎士団長は腰に差した剣を抜いた。

「ウオオオオオオッ！！！」

盗賊の頭が間合いに入つた宫廷騎士団長を斬り殺さんと、大上段から振り下ろす。

「安心しろ、殺す程オレは下手ではない」

何のこと?と俺が思つた瞬間、盗賊の頭がズタズタに切り裂かれて吹き飛んだ。

俺には剣を振つたように見えなかつたな…どういう事だ?

「ジュン!大丈夫?」

セレンの方も戦闘が終わつたようで、俺に駆け寄つてきた。

「あ、ああ、危なかつたがその宫廷騎士団長さんに助けてもらつた」

未だに何したのか分からぬがな…

「君たち、盗賊団の逮捕に協力してくれてありがとう」

宫廷騎士団長が俺たちに礼を言つてきた。

「いえ、ハリンテに行く途中に襲われただけなんでお気になさらず」

「おお、君たちはハリンテに行くのか!オレはハリンテの宫廷騎士団長でギルダーでもあるシリチナつていうんだ。この先に馬を停めてあるんだが、よければ国まで一緒に行かないかい?」

シリチナ?どつかで聞いた名前だな…うん、思い出せん。セレンは…何か固まつてるし…

「あ、はい。是非お願ひします」

これから行く国の宫廷騎士団長様の顔に泥を塗るわけにはいかないからな。

「そりゃ、来てくれるか！では行くとしよう…」

そう言つて宫廷騎士団長は歩いていた。俺たちも乗つてきた馬車に断りを入れて、宫廷騎士団長について行つた。

それにして、シリチナ、シリチナ…
だいぶ復活したセレンに聞くか。

「セレン、シリチナって名前に聞き覚えない？」

するとセレンは、信じらんない！という顔をして、

「兜をして顔が分からぬけど、ギルダーでシリチナっていえば、
プロミネントギルダーの一人、瞬息剣のシリチナでしょ！」

・・・ハハッ[冗談きついぜ！プロミネントギルダーなんてそういう会わぬいつてセレン言つてたじやん。こりや悪魔殺しと出合ひ田も遠くないな。ハハハハハッ……はあ。
とりあえずハリンテに逝きますか…

いつもの3000分の1のテンションで歩いていく俺がそこには
いた。

26 なんか、出会ひがございました（後書き）

次回予告

潤「次回? とりあえずハリンテ着いて城に行くんだろうな。今から憂鬱でたまらないぜ」

27 なんか、女士用めすかひ…（前書き）

予告通り2話目投稿

27 なんか、女王居ますけど…

憂鬱、それは精神的な苦労により気持ちがふさぎがちになる事。それが今の俺の状態である。決して城での食事は豪華なんだろうなーなんて思ってはいない、断じて。

「オムライスがいいな…」

断じて食事の事は考えていない。大切な事なので、口に出しました。「何か言つた？」

おっと、口に出していたのか。

「いや、特に何も？」

「そう、ならないわ」

ふ〜、何とかやり過ごせた。

「ときにジュン君、もうすぐハリンテの中央に位置するハリンガルに着くわけだが、ハリンガルにつく前に聞いておきたい事はあるかい？」

盗賊に襲われてから4日経つた今日12時50分、シリチナが聞いてきた。間3日間についてはスルーの方向で。

つてかいつの間にかハリンテ国には入つてたんだね…

「そうですね…ハリンテはどういつた国ですか？」

「ハリンテは王女、いや、女王が国を治めていてね、セレン君のようないい異端者と呼ばれるような人でも受け入れるような国さ。悪魔の血を継ぐ者には会つたことはないけどね」

そう言つてチラッと俺を見る。

「あ、悪魔だからって殺されたりしませんよね」

ここでハイと言つてくれなかつたらレー・テルンに行いつ。背に腹は代えられん。

「それは女王次第だね〜」

と、シリチナは意地の悪い笑みを浮かべていそうな声（兜してる

からよく分からぬ）で言つた。うわー、行きたいねえ。

「ではこちからも質問だ。君たちはハリンテに留まる氣かい？」

「はい、一応は…」

「コリナント國みたいなことがあつたら出て行くつもりだけどな。

「ならギルドで移籍届を出すと良い。それでギルドも国籍もハリンテに出来るからね」

なんで俺たちがギルドに加入してゐるって知つてんだ？まあ、いいか。

「（）親切にど～も」

「さて、ハリンガルに着いたぞ」

今俺たちの前には10メートル近い門が聳え立つてゐる。

「大きな門だなあ…」

思わず溜め息が出るな～。

「（）のあたりには魔物もいるからね。防衛を厚くして損はないさ。さあ、入ろう、オレが一緒なら顔パスで通れるはずだからな」

ハツハツハと笑いながら歩みを進めるシリチナ。しかし

「シリチナ様、後ろの奴は誰ですか？怪しい奴を王都に入れわけにはいきません」

と、見事に顔パスで通れなかつた。俺たちの事を言われてるにも関わらず、つい笑いが…

あの後、シリチナが10分くらい説明をして、やつと通してもらつた。

「ほお、これが王都ハリンガルか」

コリナント城のあつた都市もかなり活氣があつたが、こつちはそれと比較にならない程大きく、活氣があつた。

「ボ～つとしてると置いていくわよ」

とセレンに言われてやつと我に返つた。

それにしてもホントに色々な人種がいるな。猫耳付けた獣人に何か骸骨みたいな人に耳の尖ったエルフみたいな人までいる。俺たちみたいな人間でも、ユリナントじゃ見ることのなかつた髪の色の人がある。

「着いたぞ、ここがハリンテ城だ」

あつちこつちを見ている間に城に着いたらしい。やつぱり城もでつかいな。ユリナント城の2倍位ある。この国はかなり潤つてるようだな。

同じ失敗はしたくないのか、シリチナは門番に話をつけている。

「セレンはハリンテに来たことはある?」

「いえ、無いわよ? どうして?」

「なんで初めて来たのにあんまり驚かないのかな? って思つて」

「驚いてはいるわ。ただ一度テレビで見たことがあったからそこで驚かないのわ」

「テレビイイイイッ!!!!!! 久しぶりに異世界の気分壊されたアア

!!

「そういえばジュンって携帯持つてないわよね。買わないの?」

「携帯イイイツ!!!!!! わずか10秒の間に2回も夢壊されたアア!! 便利だけども! 確かに便利だけどもつ!」

「何泣いてんのよ、変なジュンね。ほら、許可降りたようだし行くわよ」

セレンに引つ張られて俺は城へと入つていった。

「シリチナの話は分かつた。じゃが何故ジュンとやらは泣いておるのじゃ?」

ひつゝ、俺たちは今謁見の間で女王と向かい合つてゐる。

女王は肩書きにもその口調にも似合わず、年の頃は15といつたところか…ひつゝ、髪は白髪で瞳は赤く、八重歯が特徴の可愛らしい娘、いやお方だ。

「どうぞお気になさらず」、「陛下」

「う、セレンが冷たい」

「そうか、なら自己紹介といつ。妾はハリンテ國女王、テナ・セリナーデ・ハリンテじゃ。冒險者時代には悪魔殺しと呼ばれておつた。そなたは…」

「うわあああん！もうだめだー、終わりだー！うわあああん！」

「な、なんじやこやは、妾の名を聞いたとたん更に泣きおつた！プロミネントギルダーって何人居んだよ！なんで会う人のほとんどがプロミネントギルダーなんだよ！絶対3人1人はプロミネントギルダー混じってるよー！運命の女神は俺の事嫌いだろ！」

（いや、運命の女神はあなたの事気に入ってるよ？）

（生きなり出てくんなく女神。ビックリするだろ）

（「はじめん」めん。でも本当に運命の女神はあなたがお気に入りなんだよ？）

（（いつそのこと嫌いになつてくれ））

（（そんな事言つて）。ほら、運命の女神が涙目になつてるよ？）

（（だああ、もう！俺が悪かつた。俺は運命の女神の事好きだから、泣き止んでくれ））

（（じゃあ付き合おう、だつて））

（（極端つー！運命の女神酷く極端つーー））

（（冗談だつてさ））

（（安心した。じゃあなＫＹ女神、女王様がお待ちだ））

（（あ、最後に運命の女神が今度遊びに行くつてさ。じゃね））

（（あ、ちょ、））

切れちまつた…遊びに来るつてどういう事？

「…………だからジュンは陛下を見て泣いたのです。どういひ無

礼をお許し下さい」

セレンが頭を下げて謝っている。脳内会議をしていく間に話が進んでいたっぽいな。

「そうか。安心せいジユンとせりふ。妾はそなたを殺す気はない」「あ、ありがとうございます！」

そう言って俺は思わず女王の手を握る。

「な、な、何するのじゅー！」

そう言って顔を真っ赤にして俯いてしまった。やべえ、失礼だったか？

「すみません、つい

「よ、よー。『ホン。さて本題じゅ、ジユン、セレン、お主等』の国で、いやこの城で働く気はないかの？」

え？ 働く？ 何それ。どういう事？

働く働く働く…って、ええ！？

「『』、『』の城ですか？」

おおうー思わずセレンとセリフが被つちました。

「やうだと言つたであらう。2人共変な反応じゅの俺とセレンは顔を見合わせ、とりあえず

「考え方をさせて下さい」

と、言つておいた。

「そうか、なら明日に返答してくれ。今夜はこの城に泊まると良い。

夕食も一緒に食そうではないか

という女王からの申し出に

「はい、お願ひします」

としか答えられない俺であつた…

さて、今日は家族（？）会議だな。

27 なんか、女王陛下ますか…（後書き）

次回予告

潤「次回はセレンと家族（？）会議をして、夕食食べて・・・と、とても忙しい回になりそつだ。まあ頑張りますか」

28 なんか、お食事みたいです（前書き）

テストが終わりました

28 なんか、お食事みたいです

俺たちは謁見の後、夕食の時間になるまで休むよつこと部屋に案内された。・・・もちろん部屋は別々だからな。

一通り荷解きが終わり、一息吐いた頃、セレンの方も終わったのか俺の部屋にやってきた。

「何で来たかは分かつてゐるわよね?」

「ああ。じゃ、始めますか」

そこで俺は「ホンと咳払いを一つして、

「第1回、国に仕えねやおうかどうじょうつか、緊急家族（？）会議（！）」

「な、何であんたなんかと家族じやなきやいけないわけ!？まつたく」

セレンは顔を真っ赤に染める。

おおう!久しぶりのシンデレラ。てつせいつもひテレしてんのかと思つてた。

「だからちやんと”（？）“を付けただろ?」

これほど分かり易く表示したのに…

「括弧書きは口に出してないでしょ!――・・・・・ひよつと嬉しくなつちやつたじやない…」

最後の方に何か言つたようだが小さすぎてよく聞こえなかつた。

・・・なんていうラノベの主人公みたいなこと俺がすると思つたか?ふつ、甘いな読書の皆さんよ。バツチリ聞いてたぜ!

まあ、聞いてたからつてどうつて事はないんだけど…

「はいはい、悪かつたね。じゃ本題だ。正直セレンはビックリの方が良いと思つ?」

「そうね…その仕事内容がどんなのかにもよると思つ。メリットは確かに多いけど、デメリットの方が大きいくらい話でならないわ」

「そりや『ごもつともだ。つて事だ、部屋の前に居る誰かさん。少な
くとも夕食が終わつてからじゃないと結論はだせねえや」
俺がそう言つと、扉が開いて1人のメイド服の女性が部屋に入っ
てきた。

「盗み聞きといつゝ無礼、どうぞお許し下さい。わたくしはこの城
でメイドをしております者です」

姿を現したメイドさんは躊躇ツツヅ色の髪で表情はほとんど見られない
美人だった。テンプレだな。

年の頃は……俺より少し高いか同じかってくらいか？表情が薄い
と年齢つて分からぬもんだな。

「……全然気配を感じなかつたわ。あなた何者？」

セレンが尋ねる。確かに俺も見逃すほど気配が分かりづらかつた
からな……ただのメイドさんじゃないだろ？

「ハリンテ城に仕えるただのメイドと言つたはずですが。それとジ
ュン様、女性の年齢を探るのはあまり感心できませんよ？」

「ハハハハハ、すみません」

どういう事だ？ 確かに声には出していなかつたはず。それにこ
の人とは思えない雰囲…

「それ以上は詮索しない方がよろしいかと」

その言葉を聞いた途端、俺は鳥肌が立ち、戦つてもいのに死
がイメージされた。これが殺氣なのか？とにかくこの人は絶対に敵
に回しちゃダメだ。

「は、はい……分かりました」

「この雰囲気はセレンには向けられていないのか、

「ち、ちょっと、2人してどうしたのよ。会話も成り立つてないし」と言つていた。

「お気になさらず、ちょっとした話し合いでですので」
そう言つと微かに表情を和らげた。

「で？何をしに来たんです？まさか盗み聞きしに来たってわけじゃないですかね？」

「これ以上この話題を引っ張ると俺に危険が及びそうだから話題チエンジで。」

「そうでした。ジュン様と下らない話話をしている場合ではありませんでした。夕食の準備が出来ましたので、どうぞお2人とも広間へお越しください」

「下らないって…まあいいけど。」

「分かりました。といつても私たちは広間の場所が分からないので案内していただけますか？」

セレン、「お前敬語使えたのか！」

「承りました。では早速行つてもよろしいでしょうか？」

セレンと俺は顔を見合わせ、

「お願いします」

と言つた。

広間には既に女王が居た。

「遅かつたの、さあ席に着くが良い」

「すみませんでした。じゃ、失礼して」

と、俺たちは席に着いた。

「では、いただくとするかの」

そう女王が言うと、料理が運ばれてきた。前菜に始まり、スープ、肉料理と続いてきた。

・・・氣まずい。つてか空気が重い。」

「もう堅くならんでよい。食事は楽しむものじやぞ」とは言つてもね~

「じゃあ…」

と俺は神妙な顔をした。

「うむ。何でも聞くとよい」

と女王。

「何歳で…」

「ジュン様、先程言つたことをお忘れでしょつか？」

メイドさんガ俺に無表情で言つてくる。せべつ、めひちや怖い。

「よい。歳くらいいへりでも教えてやるわ。16じゃぞ？して、何

故歳を聞く？」

なんとなく、なんて言つたらまたメイドさん怒るだらうな。

「いや、女王つて名前の割には若く見えるな～って思つたの」

「うむ、先代女王、つまり妾の母上がの…」

おつと、まざこと聞いちゃつたか？

「母上が面倒くさいと言つて旅に出て行つてしまつての。昨年から

妾が女王になつたのじや」

ひどく個人的な理由だつたあああ！

「ハハハ…そうでしたか。ではどうしてそんな言葉遣いを？」

続けて俺は質問した。だつて気になるじやん！

「これかの？これは妾に言葉を教えたのがお婆様での、つい移つてしまつた。大臣たちも対外交渉をする時になめられなくていいだろうという事で、直されもしなかつたからの」

「へへ、そうだつたんですねか」

てつくりキヤラを立てる為かと…

「ジュン様？」

メイドさんが圧力を…「めんなせこ。

「じ、じゃあ最後に、許婚とかつて居るんですか？」

なんかセレンがこつちを睨んでるが気にしない。これは今後この女王がどのポジションにつくか考えるのに必要な事だからな。下心は4割くらいしかない！

「ほう、直球じゃな。許婚は居らんぞ？ジュンがなるかの？」

そう言つと女王はクックツクと笑いを漏らした。

「こには俺も冗談で返すべきだらうか？」

「じゃあ立候補させていただきましょつかな？」

「ほう、直球じゃな。許婚は居らんぞ？ジュンがなるかの？」

と笑いながら返しといた。セレンは俺が[冗談で]言つてゐるところをわかつたのか、特に怒らなかつた。

「ふ、益々面白い。今夜妾の部屋に来るとよー」

・・・・・え? ジュンこと? みんなも顔を赤くして俯いてしまつた。
え? そゆこと?

「・・・・・勘違いしておるよ! ジュンから言つておへが、ただ話が
したいだけじゃぞ?」

ほつ。女王のその言葉を聞くやいなやみんな胸をなで下ろした。
その後は堅い感じもなく、みんな(メイドさんを除く)で談笑しながら食事を終えた。

「おつと、ジュン様、今回はここまでのおつです」

「ん? あ、ああそうみたいですね」

何で小説の事情を知つてんだ? まあいい、じゃ、メイドさんの言つたとおり今回はここまで。

28 なんか、お食事みたいですよ（後書き）

次回予告

潤「さて、読者の皆さんには分かってると想つけど、次回は女王の部屋でお話だ。果たして女王は何を聞きたいんだか…」

29 なんか、決めたみたいです（前書き）

冬休みっ！冬休みっ！テストも終わって冬休みっ！

29 なんか、決めたみたいです

さて、女王の部屋に行くんだけか？夕食も終えて自分の部屋に戻つて一息吐いた頃、俺は女王との約束を思い出した。

「……………女王の部屋ってどこだ？」

ちゃんと聞いとくんだった…まあ、廊下に出れば誰か居るでしょ。

「おお、ジュン君じゃないか。どうしたんだい？」

廊下に出た俺はプロミネントギルダーの一人、シリチナに出会った？

“？”を付けたのは兜を被つていなかつたからだ。声がシリチナだが…そこに立つっていたのはそこら辺に居る会社員みたいな顔をしたオッサンだった。

爽やかな口調だったからもつと若いかと…なんか予想と違つたな。「いえ、女王様に話がしたいから部屋に来つて言われたんですけど、部屋がどこにあるか分からなくて…」

「それで城の人間に聞こうと外に出たつて事か」

「はい」「この人なら知つてるだろうし、別に隠しておく必要もないの正直に話した。

「じゃ、案内をしよう」

ついてくると良い、と言つてシリチナは歩いていった。

「シリチナさんは何で城に仕えてるんですか？」

俺はシリチナに質問をした。

「ん~、自分より強い人の下で働きたかったからかなあえつ？じゃあ…」

「女王様つてシリチナさんより強いんですねー？」

「プロミネントギルダー（最強の10人）の中でも強弱はあるからね…手合わせしていただいた時には1分と保たなかつたよ」

あの日に見えない攻撃を凌いだ上に勝つたのか…次元が違うな。

「へ～、あの姿でそんなに強いんですか」

「あんな可愛らしい姿なのに…まあ、悪魔殺しだもんな。

「オレも最初は我が目を疑つたけどね…それ以来オレはこの城で仕えてるってわけさ」

「凄いんですね」

女王は勿論、それと戦つて生きてたシリチナも。

「オレなんかまだまだだけね。さあ、着いたよ。ここが女王の部屋だ」

俺たちの前には豪華であるが、上品な雰囲気の扉がある。ユリナント城の扉より趣味がいい。

「ありがとうございます」

じゃ、シリチナは軽く手を振つて廊下の奥へと消えた。

とりあえずノックするべきだよな？

「じょ、女王様～、潤です」

ノックをしながら呼びかける。

「うむ、入つてよいぞ」

許可をもらったので、扉を引く…

…・開かない。

「あれ？」

と、今度は押してみる。

…・開かない。

「な、何で！？」

何でこんなコントみたいな事が、と今度は横にスライドしてみる。

…・開かねえ…！

えつ！？何で！？ちょ、女王が待ってるのに…俺が悪いのか？これ俺が悪いのか？

力チャヤツ

俺がパーティクになつている時に不意に音がした。

えつ？まさかこれつて…

「すまぬ、鍵を閉めておつた」

女王オオオ…返せえー俺のパーティクでビビりまくつてた心を返せー！

「い、いえ。お気になさらず」

と、めちゃくちゃぎこちない笑顔で返す俺。

「さあ、入るがよい」

「じゃ、失礼します」

と部屋へと入つた。

内装は扉と同じく、上品な類の豪華さで満ちていた。流石女王といふべきか、ベッドは屋根がついたやつ。何だつけ？ああ、天蓋だ。天蓋付きベッドだった。

「さてジユン、早速じゃが、妾に仕える気にはなつたかの？」

話つてそれか

「俺たちが何をして、どういったメリットがあるのかをまずは聞きたいです」

決めるのは聞いてからでも遅くはないはずだ。

「分かった。まず仕事内容についてじゃが、特に何もしなくてよい

「兵士として戦いに駆り出されたりもですか？」

「これは重要な事だからな。

「つむ。基本的にこの国で兵役は無い。兵士になりたい者が自分で兵士になるのじゃ

「そうですか、他に事務的、政治的な仕事もありませんか？」

「これは重要というより面倒なだけだが…

「そういうのは大臣たちの仕事じゃからの。せんでよい」

「どうやら仕事は本当にないみたいだな。

「あとは俺たちのメリットですが……」

「生活に困りはしないじゃろう。それに国に雇われていた方が動きやすいこともあらう。後は、外の国へ行つたときに妻が後ろにいるとなれば悪魔や異端者であつても無碍に扱われる」とはないじゅうう

う

確かに、外国に行つたときは動きやすくなるな。

だが、

「この国にメリットが無い気がしますが……」

「元々は居なかつただの人間がこの国に引っ越してくるだけじゃろ? メリットもデメリットも必要ないわ」

ただの人間、か。

ふん、面白い。

「俺は食費が掛かりますよ? 育ち盛りですから「食糧がなくなつた日には雑草でも食べとれ」そう互いに冗談を言い合い握手を交わした。

「つてな感じでこの国に仕える事にした」

ここにはセレンの部屋。今俺はセレンに女王の部屋での出来事を話した。

「ふうん、いいんじゃない? 」さちにメリットはあるんだし

「だな」

セレンも納得してくれたので一旦自分の部屋に戻つた。
扉を開けると、

「おかえり」

「おかえりなさい」

と、2人の少女が出迎えてくれた。・・・・・って誰! ? 片方は
KY女神だけどもう1人は…

「運命の女神」

と初めて見る少女が答えた。碧い髪に碧い目、ビリカツまらなそ
うな顔をした少女だ。

「へ～、よろしく。ってか何で2人ともこの世界にー?」「
「運命の女神の運命干渉能力だよ～。そのおかげで私たちはこの世
界に来られるんだ～、一時的だけどね」

そういうことか…そういうえばこの前いつか来たって言つてたっ
け。

「今日は挨拶に来た」

と運命の女神が言った。ってかいちいち運命の女神とかＫＹ女神
とか言うの面倒くさいな…

「じゃ、友達の印としてニーックネームでも付けていい?」

と俺が言つと

「是非」

と運命の女神

「私にも付けて～」

とＫＹ女神

「ＫＹ女神じやダメなのか?」

「嫌よそんなのーちゃんと付けてよ～

じゃ、どうするか…

「ん～、運命の女神は…運命つて意味のフォーチュンから取つてフ
オーフてのはどうだ?」

「素敵」

これは気に入つたつて事でいいのかな。

「ＫＹ女神はＫＹの元である…」

「私は転生の女神よ! ＫＹ女神の方が定着しちゃつてるけど本名は
転生の女神!」

「な、なんだつてー?それは本当なのか?」

「あからさまに驚くな! 本当よ」

「しょうがないな～、じゃ転生の女神は転生つて意味の・・・あ、

今回ばかりのようだ。残念だつたな

「させらか～！延長よ延長」

「まったく、じゃ、転生つて意味のレインカーネーションからレインでどうだ？」

「え～、何かジメジメしてそいつ」

ちつ、注文が多い奴だ。

「じゃあ縮めてレイカ、いやレイネの方がシックリくるか？」

「うんうん、じゃ、レイネで」

「じゃ今度こそ締め切らせていいよな？」

「いいよ」

「どうぞ～」

「つい言つたつて特に締めの言葉とか無いんだけどな」

「「えつ」

29 なんか、決めたみたいです（後書き）

次回予告

潤「えーっと、次回は特に予定がありません。ギルドに行くかもしれないし、ノンビリ過ごすかもしないし…まあ、次回を見れば分かるつて」

30 なんか、良い手触りです（前書き）

この間にかかる話

30 なんか、良い手触りです

あの後女神2人組は帰つて、俺は部屋に1人になった。ううん、暇だ。

「風呂でも入るか…」

つて事でやつてきました大浴場（脱衣場）。ちゃんと男湯だから心配すんなよ？

「さて入りますか」

と服を脱ぎ扉を開けると…

「メ、メイドさん！？何で風呂入つてんの！？」

普通にタオル一枚のメイドさんが入浴しておりました。

「失礼なジユン様ですね。わたくしだって入浴ぐらいします」

「いや、そうじゃなくつて、ここ男湯ですよね？何で居るんですか？」

「掃除をしております」

即答された。

「え？どう見てもただの入浴じゃ…」

「たつた今、掃除が终わりましたので、入浴した次第ですが何か？」「そんなに堂々と言われても…男が入つてきたらどうするんですか？」

？」

「現に入つてきました」

「ごもつとも。つて、そうじゃなくつて！」

「いや、俺は…」

「ところでジユン様、そのような所に立つておりますと風邪を引いてしまいます。入つてはいかがですか？」

「え？いや、それは…」

ヤバい、完全にメイドさんのペースだ。

「わたくしが居ると入りづらいですか。では出て行くとしまじょう

そう言つてメイドさんは出でていつた。

後に残された俺は、

「え？ 何これ…」

と立ち去くしていた。

何とも言えない気持ちで入浴を終えた俺は自分の部屋へと戻った。
「もう9時か…」
寝るには少し早いかな。
「ちょっと外の空気を吸つてくるか」

「ほう、これはなかなか」

このハリンガルは大都市にもかかわらず、この城の庭の空には満天の星が輝いていた。

やつぱり科学の世の中じゃないからかな。

「おにいさんもこの星空、綺麗だと思う？」

「ああ、俺が生まれた所じゃこんな星空見えなかつたからな」

「ふうん、星空が見えないって事はレー・テルン辺りかな？」

「いや、もつと遠くの… って誰つ！？」

自然な流れで会話しちまつた！

今俺の隣には血のように紅い髪を尻尾のように頭の後ろでまとめ、中学生くらいの顔立ちの少女が無邪気な笑顔でこちらを見ていた。

「遠い所？ … … ふうん、なるほどね。この世界の人はね、他の世界の人と違つてこの星空が当たり前になつていいからね。もつとよく見れば新しい発見もあるかもしれないのにね」

この世界？ それに他の世界つて、まさか俺の事を知つてる？

「何故その事を…」

「今時星空の見えない所なんてレー・テルンの障気に満ちた渓谷ぐらいいだからね。そんな所には住めないし」

なるほど。墓穴を掘つたつてわけか。まあ、バレてそこまで困る事じゃないんだけど。

「俺の事は分かつただろ？君は誰なんだ？」

「あたし？あたしは人狼族の……えっと、ヴェル。そう、人狼族のヴェルだよ」

何故名前で詰まつた？何か裏がありそうだな……いや、今はそんなことより、

「人狼族！？って事は、み、耳とかあるんですか！？」

「何で急に敬語になつたの？う、うん。耳は普通に付いてるよ？」

ほり、と言つて頭を見せてきた。

あ、あつた！頭の上には犬のような耳がちょここんと。

「さ、触つてみてもよかですか？」

「今度は変な訛りがついた！？いいよ、触つて

「し、失礼します」

そう言つてゆつくり、ゆつくりと手を耳に近づける俺。

フーサツ

そんな感じの手触りだった。

・・・・・狼サイコー！…この前（第3話参照）はキツネの方が良いなんて言つて「めんなさい！キツネ？ハツ、そんなのは時代遅れさ！狼こそ最も可愛らしい生物だ！」

「ああ、ああ、可愛いなあ。癒される～」

そんなことを言いながらヴェルを抱き寄せて頭を撫でる。危ない人になつてゐるつて？この際そんな事どうでもいいさ！

「ちょ、おにいさん？流石にちょっと恥ずかしいといふか、その…」

「ああ、すまん。つい夢中になつちゃつてな」

そう言つて少女を解放する。見ると、顔を真っ赤にして俯いている。女の子にあれはマズかったかな…

「いや、気持ちよかつたから良いよ」

ヴェルは赤い顔のまま俺を上田遣いで見ながら言った。

やべえ、めっちゃドキドキする。もしかして俺って上田遣いで弱いのか？

「あ、もう行かなくちゃ。またね、おにいさん。あたしは毎日此処に来てるからたまにはおにいさんも来てね。あとあたしの事は誰にも言わないでね」

「ああ、分かった。またな」

そう言つとヴェルは微笑んで、消えた。

えつ！？消えた？どういう事？実は全部俺の妄想でした。つてオチじゃないよね？

「ジュン様でしたか」

俺がそんな事を考えていると不意に後ろから声がした。

「メイドさん、どうしたんですか？」

そこには表情のほとんど無い、いつものメイドさんが立っていた。「いえ、庭から話し声がしたので謁見の間から来ましたが…どうやらジュン様お一人のようですね」

謁見の間から聞こえたつて、ここから謁見の間までかなり離れてるぞ？本当にこのメイドさん何者だ？

「ハリンテ城に仕えるただのメイドです」

また心の中を読んだし…

「さつきからずっと一人でしたよ？何かの聞き間違えじゃないですか？」

「そうですか。ではわたくしはこれで。ジュン様もお身体が冷える前に部屋にお戻り下さい」

一瞬目を細めて、メイドさんは踵を返して城の中へと戻つていった。

ばれたかな…秘密にしてくれつて言われたから一応言わなかつたけど。

「寒つーもう戻るか」

特にわざはないので部屋へと向かう。

部屋へと戻った俺は、メイドさんから温かい紅茶を一杯もらってきて床についた。

明日は何をするかなー。ギルド行って移籍届出して、戸籍移して

30 なんか、良い手触りです（後書き）

次回予告

潤「一体あの娘は……俺の妄想じゃないと思つが……まあ、いいか。
さて、次回は予定通りギルドに行くぜー。最近戦闘がないなー。うん、
平和つて素晴らしい」

3.1 なんか、久しぶりのギルドです（前書き）

あらかじめ書いておいたものが消えていてショックを受けた今日この頃

31 なんか、久しぶりのギルドです

「さて、今日はギルドに移籍届を出しに行こうと思つ」

朝食を終え、俺はセレンに今日の事について提案する。

「そうね。この国で働く事が決まった以上、届けは出さないといけないわね」

「じゃ、早速行きますか」

基本的に仕事をしないで良い俺たちは城の出入りが自由なので気軽に外に出れる。

「引っ越ししたんで移籍の手続きをしたいんですけど」

つて事でやつてきましたハリンガルギルド。大都市なだけあってギルドの大きさも働く人の数も相当なものだ。事前にギルドの位置を調べたのだが、その建物の大きさから迷う」となく辿り着いちまつた。

「移籍ですね。ギルドカードを提出して下さい」

俺とセレンはポケットからそれぞれギルドカードを出し、職員に渡した。

「はい、ウェル・カーラーさんとセラフィ・カーラーさんのお2人がキルファギルドからハリンガルギルドに移籍ということじよろしいでしようか」

久しぶりに偽名の方の名前を聞いたな…すっかり忘れてたぜ。

「はい、ついでに国籍の方もユリナントからハリンテに変えてもらえますか?」

「承知いたしました。しばらくお待ち下さい…………はい、これが新しいギルドカードになります。ユリナントでの活動も消えずに残つてるので安心下さい」

そう言つと、職員は俺たちに銀色のカードを渡した。

「前回のカードはプラスチックみたいなカードだったんですけど…」

「依頼でジーニアスワームを討伐された時に初級冒険者から中級冒険者にランクアップしたみたいですね。本當なら報告したときこう

ンクアップされるはずなんですが…」

「ランクアップなんてシステムがあつたのか…」

ジーニアスワームを倒したときは…

「ああ、その時は急いでいてすぐにギルドから出ました。だからじやないかと」

「そうでしたか…・・・・・はい、こちらの方でも登録が完了致しました。何時でもギルドを「利用になれます」

「ありがとうございます」

そう言つて俺たちは受付から離れた。

「ジーニアスワームなんていつの間に討伐したのね」

セレンが聞いてくる。そつか、セレンは知らないんだっけ。

「ちょっとな。緊急で依頼が出てたから受けたみた」

嘘は言つてない。

「そんな気軽に受けられるような敵じゃない気がするけど…まあいいわ。で?この後はどうするの?」

「しばらく戦つてなかつたから久しぶりに討伐系の依頼でも受けようと思うけど、どう?」

勘が鈍つても困るしな。

「良じと思うわ。じゃあ掲示板を見てみましょ」

そうして俺たちは掲示板へと向かつた。

「いやー、流石に都会なだけあつて依頼も多いなー!」

「キルファ村の10倍くらいありそうだ。」

「討伐系の依頼はこの掲示板ね」

セレンが一枚の掲示板を指す。どれどれ、とふと田に留まつた依頼を読んでみる。

『Aランク討伐依頼』

東の砂漠「クレイド砂漠」にグラントアスヤが現れた。冒険者はクレイド砂漠へ向かい、これを討伐せよ。

報酬：8000ワロ

証明部位：毒の牙

注意事項：牙には即効性の毒があり、人間は10秒と保たないので注意。また、今回のグラントアスヤは大型種なので、魔術師を随伴する事を勧める。

写真を見ると、50メートルはあらうかという大蛇が写っていた。確かに鱗が硬そうだ。魔法の方が攻撃が通るかな。

「俺たち2人じゃ攻撃力不足、か」

「いや無理だ、と諦め他の依頼を…

「やあ、おにいさん。昨日「ふりだね」

ん?この声は、

「おう、ヴェルか。ギルダーだつたんだな」

真紅の髪の上に獸耳がちょこんと乗った少女がそこには居た。

「ジュン、その娘だれ?」

と、セレンが聞いてくる。そつか、セレンはヴェルの事知らないんだつけ。つてかギルドであつたりと本名出すなよ…まあ、ヴェルなら大丈夫だらうけど。

「この娘はヴェル。ええっと、この前道で知り合つたんだ」

ちょっと無理があるか…

「?、よく分からぬ出会いね。まあいいわ。私はセレン、よろしくね」

「よろしく。とにかく、セレンさんはおにいさんの彼女?」

「か、か、彼女！？な、何いってんのよ！私はこんなバカの彼女なんかじゃ…」

セレンは顔を真っ赤にして反論している。

「バカつて…俺何か悪い事したつけ

「違うのか～、つまんないの」

「何がだよ。つてか

「俺たちに用があるわけじゃないのか？」

「そうだった！おにいさん今グランアスヤ討伐の依頼見てたでしょ。でも火力不足で諦めようと」

「何時から見てたんだ？」

「あ、ああ。そうだけど」

「じゃあ、一緒に討伐しに行かない？」

「ヴェルは魔術師なのか？」

「いや、違うけど。でもグランアスヤは5回討伐したことがあるから大丈夫だよ」

「ん～、でも今回は大型種らしいぞ」

「大丈夫。大型種も何回か討伐したから」

「ヴェルは見かけによらず強いんだな…」

「分かった。そういうことなら一緒に行こう。いいか？セレン」

「ええ私はいいわよ」

「じゃ決まりだね！あたし依頼を申請して来る」

「じゃ、俺たちも行くか」

「ええ、……あの娘どこかで」

「そんな事を呟いたセレンだった。

クレイド砂漠はハリンガルから東に1時間ほど歩いた所にあった。「この砂漠はね、端から端まで歩いて100日かかるとっても広い砂漠なんだよ。迷つたら生きて出てこれないから気を付けてね」

そんな事を明るく言うヴェル。

「怖え～！帰りて～

「そんな顔しなくて大丈夫だよ、おにいさん。あたしはこの砂漠に慣れてるから」

「え？顔に出てた？」

「静かに！2人とも。グラントスヤがいたわよ」
見てみると、100メートルほど先に巨大な蛇が巻局じくくるを巻いて寝ていた。

「あれか、デカいな」

「グラントスヤはね、ファイヤー系とアイス系に弱い魔物だよ」

「如何にも変温動物つてかんじだな」

「私はファイヤー系の魔法ならある程度出来るけど、アイス系はさっぱりね」

セレンって魔法使えたんだ…

「俺はアイス系とファイヤー系がそれぞれ中級レベルまでだ」

「あたしは上級レベルの魔法が1発なら撃てるよ。中級レベルの魔法なら10発つてところかな？」

「ヴェルは上級レベルも使えたのか、凄いんだな」

「1発で魔力が尽きちゃうけどね…」

「んじゃ今回は互いの実力がよく分からぬから各自の行動に任すつて事で、作戦は特になし」

「分かつたわ」

「りょ～かい」

「じゃ…行くぞ！」

3.1 なんか、久しぶりのギルドです（後書き）

次回予告

潤「次回、ヴェルの実力が明らかに！？俺も黒い魔力は使わないようにするからな～大丈夫かな…」

32 なんか、大きな蛇がいます（前書き）

久しぶりの1日に2話投稿

32 なんか、大きな蛇がいます

「じゃ……行くぞ！」

俺は身体能力強化を使い、グラナンアスヤに突っ込んでいく。身体能力強化は魔力を身体中に巡らすだけだから目には見えないはず、だから問題なし！

「援護は任せた！いくぜ～、燃え尽きろ！ダークネスファイヤー！」

俺がそう詠唱すると、グラナンアスヤの下の地面から黒い炎の柱が形成される。

蛇の表面を焦がすには至つたがそれまでだ。蛇にこつちの存在を知らせるだけだ。

ギシャーッ

と蛇は牙を剥いてこちらを威嚇してきた。

「・・・ファイヤーウォール！」

今度はセレンの魔法が発動し、俺の前に炎の壁ができる。魔法は敵味方の区分ができるので俺は熱さを感じない。

パチンとセレンが指を弾くと炎の壁が蛇目掛けて倒れていく。

「もう一工夫だ！ささやかな風よ！ウインド」

俺がファイヤーウォールに少し風を送り、より強力な炎にする。流石に危ないとと思ったのか蛇は尻尾で自らの頭部を守った。

頭部を守った尻尾は焼けただれていたが、動かすには問題なさそうだ。

ギシャーッ！！

再び蛇が威嚇し、焼けただれた尻尾を俺に振り下ろしてきた。

「当たつてやるかよ！」

俺は尻尾を避け、地面を打った尻尾を強化した脚で思いつ切り踏みつけた。焼けただれているおかげで物理的な攻撃にも効果が見られた。

ギャーッと悲鳴のような咆哮を上げてのたうち回った。
うんうん、火傷の傷に触ると痛いよね。

そんな事を思っていたら蛇が何かしだした。

「長くなってる！？」

セレンがそんな驚きの声を漏らす。

「いや、あれは脱皮だ！新しい皮膚と交換してやがる」

俺がそう言い終わつた瞬間、蛇が無傷で皮から出てきた。

厄介だな…やっぱり火力不足か。

「仕方ねえ！ヴエル、今から見ることは誰にも言うんじゃねえぞー！」

「ん？分かつたよ、おにいさん」

と、今まで空氣だつたヴエルが答える。

「んじや遠慮なく、闇針・捕縛！」

そう言つて蛇の上から闇針を出して蛇を地面に縫い付ける。やつぱり魔力を介した攻撃は効くみたいだな。

「新技だ、食らいな！黒桜」

俺がそう言つと、蛇の周りに桜の花びら位の大きさの黒い魔力が大量に吹き荒れた。この花びらの1つ1つは鋭く、刃のようにしてあるので、今回のような巨大な敵には有効な手段だ。

幾千、幾万の刃が蛇に襲いかかり、その皮膚を削つていく。だが、やはり決定打にはならない。

しかし、今脱皮した蛇はもう出来ないらしく、傷だらけのままセレンたちに突っ込んでいった。

あの蛇、いつの間に闇針を解いたんだ！

「そつちにはいかせねえぞつと！黒刀・黒鴉！」

魔力の波は蛇の頭目掛けて飛んでいった。

蛇の顔面に直撃する直前、蛇は口を開いて魔力を食つた。

しかし、今脱皮した蛇はもう出来ないらしく、傷だらけのままセ

つて食つた！？いやいやいや、反則だろ！つてそんな事考へてる場合じやない。

「させるか！ファイヤーウォール！」

無駄かもしけないが、試しだ。

そう思い蛇の前に炎の壁を出現させる。

すると今度は食うことなく、尻尾で薙払つた。

（よく見れば黒桜の傷も顔だけついてないな。純粹な魔力は食えるが、属性が付与された現象としての魔法は食えないのか？）

1つの仮説を立てた俺はもう一度魔法を使ってみる。

「まずは魔力から、闇針！」

俺の手から蛇の口に向けて闇針を飛ばす。

その攻撃は蛇に突き刺さる事はなく吸収された。

「じゃ、次。燃え盛れ！ダークネスファイヤー！」

次は魔法であるダークネスファイヤーを蛇の口に向けて撃つ。この攻撃は吸収せず、炎の柱を避けた。

（やっぱりそういう事か。これじゃこの黒い魔力は使えないな）とりあえずさつきのファイヤーウォールでセレンたちから気を逸らし再び俺を目標にしたので結果オーライだ。

「魔力も残り少ねえか…これで最後だ！黒桜」

さつきと同じように顔以外を切り裂いていく。

これだけ傷だらけになれば大丈夫かな…

「セレン！グランアスヤの四方にファイヤーウォールを！ヴェル、後は頼む！」

「分かつたわ」

「オッケー」

2人がそう返し、後俺に出来るのは見守るだけだ。

「邪なるものを聖なる炎縛の壁にて焼きぬくせん！ファイヤーウォール」

あれが本当の詠唱らしいです。

詠唱が終わつた瞬間、蛇は四方が炎の壁で覆われ、一瞬動けなく

なつた。

「じゃあいくよ～、エクスプロード・フレアー！」

「無詠唱オオオ！？俺だつて中級レベルを短縮詠唱しか出来ないのに、上級レベルを無詠唱だつて！？」

ヴェルが魔法の名前を言つた途端、蛇の頭上に巨大な魔法陣が現れ、そこから燃え滾る隕石のようなものが降つてきた。

隕石が蛇にぶつかると急激に収縮を始め…

「あちや～、やりすぎた。2人とも伏せて！」

ヴェルのそんな声が聞こえ、伏せるやいなや、

ドオオオオオン！！！

という地響きを伴つた大爆発を起こした。

熱風が俺たちの上を通り抜ける。

うわ、背中がめちゃくちゃ熱い。

一通り地響きも収まつたので辺りを見てみると、

「なんだよ、これ」

蛇が居た場所はクレーターができていて、蛇は骨まで溶けたのか姿はなかつた。

一面砂しかない砂漠なので目に見える影響はこれだけだが、街や草原で発動したら、その破壊力は計り知れない…

「2人とも大丈夫だつた？」

「ええ、私もジ Yun も大丈夫よ」

セレンが答える。

「上級魔法つて凄いんだな、中級魔法とはレベルが違いまするよ

これは俺の感想だ。

「上級魔法は発動が大変だからね～」

嘘付け、お前無詠唱だつたじやねえか。

「制御も難しいからセレンさんやおにいさんにも被害が及んじゃつ

たしね~」

「そういえばそうだな。って、

「討伐対象が消え去ったわけだが、証明部位が無いつてことは依頼失敗つて事になるのか?」

「本来はね~、でもあたしのちょっととしたコネで何とかしてあげる」
ちょっとしたコネって、ギルドにコネ持つてるつて相当すごいと思つぞ。まあ、とりあえずは

「サンキューな。じゃ、戻るか」

と言つて俺たちはハリンガルに帰つて行つた。

帰り道なんて覚えてないのでヴェルについて行って、だが。

32 なんか、大きな蛇がいます（後書き）

次回予告

潤「次回はゆっくりしたいな）。ギルドで仕事してきたから休んで
もバチは当たらないだろ。ヴェルって娘が何者が分かんないけど、
敵じやなさそうだし、ヴェルってプロミネントギルダーもいなかっ
たし、まあいいか」

33 なんか、英雄みたいですね（前書き）

1日に3話投稿。
計画性なんてありません。

33 なんか、英雄みたいです

ギルドで報告をして報酬（本当に証明部位を渡さなくても貰えた）を分けた後、俺とセレンはハリンテ城に戻った。ヴォルは用事があるとかでギルドで別れた。

「今は3時か…何しようかな~」

「依頼完了したばっかりなんだから休めばいいじゃない」

今俺たちはそれぞの部屋に戻る途中の廊下で歩きながら話をしている。

「ん~、そうだな」

「私も今日はもう休むわ、っと私の部屋着いたから、じゃあね」

おう、と返事をするとセレンは自分の部屋に消えていった。

「俺も戻るかな、つてメイドさん！？部屋の前でビリしたんですか？」

メイドさんは俺の部屋の前でぱーっと立っていた。

「ジュン様、お待ちしておりました。女王様が部屋にてお待ちです」俺に用件だけ伝えると、では、と言つてメイドさんはどこかに行ってしまった。

相変わらず謎だらけな人だなあ。

「部屋に来い、だつかけか？早速行きますか」

そう言つて俺は女王の部屋へ歩いていった。

「女王様～、潤です」

ノックをしながら呼び掛ける。

「おお、やつと来あつたか。入つてよいぞ」

許可を貰つたので中に入る。

良かつた、今回はふつうに入れた。つて何当たり前なことで安心してんだ俺。

「どうも、それで何の用でしょつか？」

「用というほどものでは無いんだがの、ジュン、お主コリナントで何をした？」

「ああ、もうバレちゃいましたか。まあ、ギルドを介せばすぐに分かることですけどね」

「といふことは、真実なのか」

「はい、俺はコリナントで王を…」

「お主は英雄であつたか」

「え！？いやいや、俺は王を殺してハリンテに逃げてきたんですよ！？英雄ってのは何かの間違いじゃないかと」

「ほつ、ジュンはまだ知らないのか」

「何をですか？」

さつぱり意味が分からぬ。犯罪者の間違いじゃないか？

「コリナントはあの後反乱を起してな、国王軍と市民軍が衝突したのじゃが、頭を失つている国王軍が負けての、国王軍は処刑され市民が政治を執り行うようになつたんじゃ。そこでこの反乱のきっかけとなり、勝利をもたらす要因となつたジュン、いや、ウェルが英雄となつたのじゃ」

長文ご苦労様です。・・・・・つてそつじやなくて！

「英雄つて呼ばれるような事してないんですけどね～」

「まあ、人の好意は受け取つておくとよい。あと一つ気になる」と
があるのじゃが、今はいいか
何だ？気になるじゃないか。

「今じゃダメなんですか？」

「つむ。今聞いて逃げられても困るしの」

逃げられる？何のことだ？

「あまり気にせず生活すればよい」

その後、俺と女王は他愛もない無駄話をして、夕食に近い時間になつたので、自分の部屋に戻ることにした。

「では俺はこれで」

「うむ。時間をとらせたな」

「いえ、と言つて俺は部屋から出た。

もうすぐの時かあ…え? 夕食はどうしたかつて? 普通に食べましたよ? 特に書くこともないんでカットしました、はい。

「そういえば昨日はこの時間に庭に出てヴェルと会つたんだつけまた耳を撫でさせてもらいに行きますか。よつこらせ、と立ち上がり庭へと向かう。

「おお、今日も星がバツチリ見えるな~」

「俺が何とはなしに呟くと、

「この世界では夜はいつも晴れて星が見えるからね~もうお馴染みになり始めている声。

「ヴェルか…今回も全く気配を感じなかつたな…」

「あたしはかくれんぼのブロだからね」

「なんだよブロつて…」

「ところでヴェルつて何時からここにいるんだ?」

「あたしは毎日8時にこの庭に不法侵入してゐよ

「シシシッ、と悪戯に成功した子供のような笑いを浮かべていた。

「よし、衛兵を呼ぼうか

「俺が立ち上ると、

「ちょ、ちょっと待つて! あたしの田舎を奪わないでよ~」

「と、俺の足にしがみついてきた。

「冗談だって、俺もヴェルと会うの楽しみにしてるしな

俺がそう言つと、ヴェルは顔を赤らめた。何故？

「そ、それって…」

「おひ、ヴェルを撫でるのは俺の楽しみだからな」

「おにいさん、あたしで遊んで楽しい？」

「いや、俺は撫でることが楽しいんであつて…」

「はあ、おにいさんって女の子の扱い上手いね。悪い意味で」

「ヴェルがジト目でこちらを見てくる。

「最後のは余計だけどな。そんな事より…俺の封印された右腕がお前を求めて暴れるんだが」

「なんかイタい！おにいさんイタい！」

俺からすればこの世界の詠唱も十分厨^{イタい}一けどな。

「ん~、ちょっとだけだよ~」

そう言つて頭を差し出した。

「ああ~、いいな~。飽きねえな~」

俺はヴェルを抱き寄せて頭を撫で回す。え？行動が犯罪者みたい？何とでも呼ぶが良い。モフモフは正義！

「そういうえばヴェルつて顔綺麗だけど、狼特有のヒゲみたいなのは無いの？」

頭に獣耳がついている以外は至つて普通の人間の女の子だ。

「獣人つて言つても9割は人間の血が入つてゐるからね。あたしは耳と尻尾が人狼族特有のものなんだよ

「し、尻尾まであるんですか！？」

「つーこのパターンは！」

「さ、触らせてもらつてもよか…」

「ダメー！尻尾はダメー、恥ずかしすぎるよ~

「そう言つて俺を涙目で見てくる。そんなに恥ずかしいものなのか…

「『めん』めん、まだしばらくは耳で我慢させてもらつよ

「・・・・・本当は耳触らせるのも人狼族の中じや……」

人狼族の中じや、何なんだ？何か言つたみたいだけど。

「あつ！誰か来る！じゃあね、あたしの事は誰にも言わないでね~」

そう残してやつぱり消えた。

誰にも喋るな、かへイへイ分かりました。

「またジュン様ですか、独り言は紛らわしいので控えていただけますか？」

メイドさんが現れた。

ジュンはどうする？

- ・たたかう
- ・にげる
- ・言い訳をする
- ・気になる事について聞く

なんか選択肢出てきた！ってかたたかうは論外。なんだよ気になる事について聞くつて…選んでみるか。

- ・気になる事について聞く

「メイドさん、紛らわしごとでどうごつ事ですか？まるで誰かが来ることを待っているかのような…」

「勘違いでしょう。さあ、部屋へお戻り下さい

明らかに怪しいな…

「怪しくなんて」やこません」

そう言つとメイドさんは城内に戻つていった。
つか、また俺の思考を読んだな！

「はあ、寝るか…」

33 なんか、英雄みたいです（後書き）

次回予告

潤「次回は城内を散策でもしてみるか。実はまだ知ってる所つて俺とセレン、女王の部屋に謁見の間、大浴場に大広間、それと庭かつて意外とたくさん知ってるな！散策必要ないんじゃね？」

34 なんか、案内してくれます（前書き）

まつたくの気分で書いたものですが何か？

34 なんか、案内してくれます

『メイドさんの 教えてハリンテ城～
ドンドンパフパフッ！』

「え？ 何これ」

出だしからよく分からないんですけど……ってか変な効果音流れた
し。

「本日はハリンテ城の事を何も知らない、無知で無能で役立たずな
ジュン様にこの城をわたくし自ら案内してさしあげようという企画
です」

「俺つてそんなダメ人間だつけるうして急にそんな事やり出した
んですか？」

「前回のあとがきで仰っていたではありますか。『自分の発言に
責任をもつて下さい』。だから無知で無能で役立たずと言われるの
です」

「あとがきまで責任もってねえよー？ ってか無知で無能で役立たずな
んて生まれてこのかたさつき言われた以外言われたことねえよ！」

「やれやれ、ジュン様はツツコミが多くてなかなか先に進められま
せん。だから無知で…」

「もういい！ 無限ループするからーで、案内つてどいを案内してく
れるんですか？」

「やつと進みましたが、本日はジュン様が今まで行つたことのない
場所へ案内しようと思います」

「行つたことのない場所？ ああそういう事ですか」

「納得をしていただけたようなので早速行きますよ～」

「お願いします」

「まずは屋内から案内いたします」

「そう言われて俺は何かの部屋の前に連れてこられた。

「「「」」は何の部屋ですか？」

「どう見ても普通の部屋だが…

「「」」はわたくしの執務室です」

「あ、メイドさんに会いに行くときは「」の部屋にくればいいんですね？」

「いえ、この部屋は入った途端死にます」

「えええっ！！死ぬの！？入ったら死ぬのー？」

「はー、なのでお気を付け下さ」ということです」

「そういうことですか…ってか勝手に心を読まないで下され」

「分かり易すぎるものとして、では次へ行きましょう」

「「」」は…」

「はー、女湯で「」やります」

「いや、俺」「利用できな」「から」

「で、出来ないのですか！？」

「そ」「わざとらしく驚かな」「」

「いえ、ジュン様はそのうちこ」「に来て…」

「いやいや！俺はそんな事しないから！」

「しないのですか！？」

「はあもう「」です。次行きましょう」

「「」」は書庫で「」やりますが…ジュン様は「」利用しませんね。次

行きましょう」

「ちょ、待つて下さい。少なくとも女湯よりかは使いますよー。」

「そうなのですか！？」

「いや、その反応もうこ」「から」

「そうですか。この書庫ですが、物語、伝説、魔法についてなど、様々な本が置いてあり、蔵書数は100万にも昇ります。ここにある本はいつでも閲覧することができますが、特別魔法についての本は女王に許可をもらわねば閲覧できません」

「分かりました。ところで、特別魔法って何ですか？」

「チツ 特別魔法とは例えばジ Yun 様の闇魔術のような一部の人にはしか使えない魔法のことです」

舌打ちされたっ！？ってか俺の黒い魔力って闇魔術っていうんだ。ん？ちょっと待てよ？

「何でメイドさんは俺が闇魔術を使えることを知ってるんですか？」

メイドさんの前じゃ一度も見せていないんだが…

「黒髪には闇魔術を使える人がいます。またジ Yun 様が悪魔である事は女王様から聞いておりますから。悪魔と呼ばれる人は皆闇魔術が使えます」

「そうでしたか」

「では時間もないので次に行かせていただきます」

「屋内最後は調理場となります」

「へへ、でもやっぱり俺使いませんよね？」

「そんな事ありません。予め申し出ていればお菓子を作ることも…すみません。ジ Yun 様は料理が出来ませんでしたか」

「いや謝る必要はないよ！？俺料理しますし」

「そうなのですか！？」

「・・・その返し気に入つてますよね」

「はい」

「はあ、屋内はもういいので外へ行きましょう」

「ここは普段兵士が訓練する南の庭でござります」

「へ～、そういうえば木剣とか打ち込み人形とかが置いてありますね
「今は訓練をしておりませんが昼になれば訓練が始まることはあります
で、参加してみてはいかがですか？」

「やってみ…」

「ああ、言い忘れていましたが、シリチナ様が今度手合わせしたい
から訓練に来てほしいと仰られていました」

「…ようと思つたけど俺も忙しいからな～、ああ残念だ」

「わざとらしいですよ？ジュン様」

「さ、次行きました、次」

「…・・・・分かりました」

「「」は女王のお気に入りの東の庭です」

そこは中央に噴水があり、周りを囲むように色とりどりの花が咲
いていた。

「綺麗な庭ですね。1年中花が見られるよう四季の花を取り揃え
ているようですし」

「ジュン様は花にお詳しいのですか？」

「少しなら分かるかな」

「なるほど、幼少期に遊ぶご友人の居なかつたジュン様は花を見る
ことで孤独を癒していらっしゃつたと。トラウマを掘り起こしてしま
まい申し訳ありません」

「いやいや！俺そんな寂しい幼少期送つてないからー何勝手に捏造
してんですか！？」

「そうなのですか！？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・申し訳ございませんでした。次行きました」

「「」が城の皆様の憩いの場である北の庭です」

「東とか西の庭は来ないんですか？」

「東の庭は女王様の憩いの場ですし、西の庭は、ある理由があつて皆様はご利用になれません」

「え！？ 西の庭って俺が夜に居た場所ですか？ まづかつたんですか？」

「いえ、ジュン様は特に問題ありません。どうぞお気になさりや」

「呪われた場所とかじゃないですよね？」

「そんな事は・・・・ありません」

「何その間！呪われてませんよね？」

「ちょっとした冗談です」

「俺は本気にしてました」

「これで城内の案内を終えたわけですが、どこか見ておきたい場所はありますか？」

「ついでですから西の庭も案内してほしいです」

「チツ では付いてきて下さい」

「また舌打ちされたつ！？メイドさんって絶対俺の事嫌いですか？」

？

「あいらぶゆーです。ジュン様」

「分かり易すぎるーメイドさん絶対俺の事嫌いだ！」

「そんな事より、早く行つて終わらせましょう」

「面倒くさいんですね？」

「「」が西の庭です。わけあって今はジュン様以外使用禁止となつています」

「わけつてのが気になりますが……」

「やれやれ」

「何ですか、その察しろよつて雰囲気」

「おかしな事を言うジュン様ですね」

「俺が悪いのか、今の俺が悪かったのか」

「さて、やつ案内してほしい所はないですね？では、わたくしはこれで」

「やつはメイドさんは屋内へと戻ってしまった。

「ええと……何これ」

残つたものはすっかり置いていかれた俺の虚しい咳きだつた。

34 なんか、案内してくれます（後編）

次回予告

潤「迦ちゃん聞いてトヤニヨ、作者は」の話書くのに30分掛けてないんですよ？ もう少し丁寧に書いてほしいですよね。まあ、ここで愚痴を語つてもどうしようもないんですけど。さて、次回は……何します？」

35 なんか、冥土、いや冥府に行きまわ（前書き）

ゲームをしてました…

35 なんか、冥土、いや冥府に行きます

「ジュン、今日はお主に頼みたいことがある
嫌です」

「うむ。それはじやな、ちょっと冥府レー・テルンまで国書を届けて
欲しいのじや」

「だから嫌ですってば」

「うむ。快い返事、感謝するぞ。なにぶん、あの国の王がお主に興
味があるらしくての」

「えつ！？俺の事無視？俺の意見は？」

「よいか？メイドよ」

「はい、問題ないかと」

「何でメイドさん！？俺の保護者！？」

「では頼んだぞ、ジュン。一人での旅路はつらじやうつがへこた
れずなの」

「しかも一人で！？誰か連れて行っちゃダメですか？」

「城にいる者は皆忙しくての。セレンにも頼み事があるからダメじ
や。ギルドに仲間がいるならそやつを連れて行け」

「・・・・セレンに危険な事はさせないで下せじよ？」

「分かつてある、引き受けてくれるかの？」

「はあ、分かりました。行つてきますよ」

「そうか、これが国書じや。これを1ヶ月以内に届けてくれ

「へ～い、じやあ行つてきます」

そう言つて俺は謁見の間から出た。

「さて、準備するか」

まずはセレンにこの事言つておかないとな。

「セレン～、居る～？」

セレンの部屋をノックすると中からセレンが出てきた。当たり前か、これでセレン以外の人が出てもビックリだしな。

「どうしたのよジュン、部屋に来るなんて珍しいわね」「いや～、実はかくかくしかじかで」

そう言つとセレンはジト目で俺を見てきた。

「ん？ もしかして、

「かくかくしかじかで通じるのは小説の中だけよ

「え？ だつてこれ小せ…」

「ダメよジュン！ そこから先は言つてはいけない気がする」

「あ、ああ。作者を倒せばいつでもあつち（現実）に行けるんだけどな」

「そういうことも禁句よーで、結局何の用なの？」

「そうだ俺、女王様に頼まれてレー・テルンに国書を届けて来なきゃいけなくなつてさ～、しばらく会えないからそのつもりで」

「べ、別にあんたなんか居なくてても何とも思わないわよー！」

久しぶりのツンデレだな。思わず微笑んじまうぜ。

「そつか、セレンにも頼み事があるそつだから頑張つてな。じゃ、行つてくる」

そう言つて俺は歩き出した。

「サッサと行つてきなさいよ」

へいへい、と俺は手を挙げて応える。

「仲間を連れて行きたいところだけど、誰か居たかなあ

案外俺つて人見知りだったのかも…

「この国で城に仕えてない奴・・・・・・ヴェルか」

そうと決まればギルドへレッツゴー。

「ヴェルってギルダーは居ますか？」

「ヴェルさんですね、少しお待ち下さい」

・・・

「申し訳ありませんが、ハリンテ国ギルドには所属しておりません」

「そんなはずは、赤髪で獣人の…」

「やあ、おにいさん。呼んだ？」

振り向くとそこにはヴェルが立っていた。

「お、おう。ちょっと頼み事があつてな」

「あ、あなたはノル…」

「お、おにいさん！あつちで話そ！」

「な、なんだ？ヴェルが慌てるなんて珍しいな。受付の人も何か言つてたし。

ヴェルにギルドの端っこまで連れてこられた。

「どうしたんだ急に」

「い、いや～、あそこで立ち話しても受付に用がある人に迷惑かなつて

「ああ、そういうことか。気が利く奴だな～」

そう言つてヴェルの頭を撫でる。

「や、やめてよ～、恥ずかしいよ～」

ヴェルが顔を赤らめて言つ。

可愛い奴めつ！

「ハイハイ、んで、ヴェルを呼んだ理由だけど、付き合つて欲しいんだ！」

俺がそう言つとさつきよりも顔を真つ赤に染めた。

「そ、それは…」

「おう。ちょっとレー・テルンに届け物があつてな、一緒に来て欲しいんだ」

「お・・・

「お?」

「・・・おにいさんのバカ～！――――」

ヴェルが泣きながら俺を叩いてくる。

え!? 俺が悪いの?

「あ、え、ええっと、その、『、ごめん! 何か気に障ったのなら

謝るよ』

ヴェルは依然泣きやまない。

「う、周囲の視線が痛い…

「ちょっと失礼するよ』

そう言つてヴェルを抱きかかえ、俺はギルドから逃げるよつて出て行つた。

俺は街の東側に位置する河原までヴェルを運び、降ろした。

「おにいさんの鈍感! 無神経! でくのぼう!」

早速すごい罵声が飛んできた。

「無神経とはよく言われるな』

鈍感でもでくのぼうでもないと俺は思うが。

人からの好意にはよく気付くし、セレンやヴェルが俺に親しみを持つてくれるのも分かつてるし。

「おにいさんにあたしがどんな気持ちが分かつてないでしょ!」

「ごめん』

「・・・・はあ、いいよ。おにいさん反省してるみたいだし、許してあげる』

「はい』

「で? あたしにレーテルンまで一緒に行つて欲しいんだって?』

ホッ、スーパー説教タイムは終了したか。少しば反省しろつて?

俺は無神経で有名だからな。そういうのは理解できないんだわ。

「お? 是非ヴェルに付いてきてもらいたい』

「そういう言動が勘違いをさせる元なんだけど…いいよ。一緒に

つてあげる

「んじや、これから頼むな」

俺がそう言つて右手を差し出すと、ヴェルは俺に人差し指と中指を立てて、俺に見せてきた。

「あ、2つほど条件、つていうかお願いがあるんだけど…」

「俺に出来ることなら」

「1つは、もしも戦闘があつた場合はあたしに全部任せること、もう1つは……その、移動中はあたしを隠して」

「ん? どうこう事?」

「1つ目は特に気にしないで、もしもの為だから。2つ目は、ちょっと今ある人たちに追われてるんだよね。だから

「追われてる! ? 大丈夫なのか?」

「直接接触はしてこないからね。暴力を使うような人たちじゃないし。おにいさんのロープの中に入れてあたしを隠してよ」

「ああ、言い忘れてたけど俺はロープを着ている状態だ。剣とかは必要ないから身に着けてない。」

「そんなんで大丈夫ならいいけど

「大丈夫、監視されてたらわかるし」

「そつか…俺は準備出来てるけどヴェルはどのくらい掛かりそう?」

「旅の準備はいつでも出来るから今からでも大丈夫だよ」

「んじや、早速行きますか」

そうして俺たちはレー・テルンへ向かうべく、ハリンテを出た。

「ところで、レー・テルンってどっちだ?」

「しっかりしてよ、おにいさん。レー・テルンはハリンテの北西だよ」

35 なんか、冥土、いや冥府に行きます（後書き）

次回予告

潤「次回はレー・テルンまでの旅路だな。何があるかは俺にも分から
ない。それが旅というものだ。・・・今の格好良くない！？え？そ
うでもない。さいですか」

36 なんか、俺が空氣です（前書き）

何か気に入らない…

36 なんか、俺が空氣です

是非ヴェルと一緒に行きたい、か。あっち（元の世界）に居た頃の俺だつたら信じられない位の変化だな。まあ、それが良いことなのか悪いことなのかは別として：

「どうしたのおにいさん？悲しそうな顔して」

俺そんな顔してたのか。やっぱり変わったな俺。

「なあ、ヴェル。過去の罪つて許されるのか？」

「えつ！？どうしたの急に？おにいさん疲れてる？」

「そうだな、俺らしくないよな・・・疲れたのかもなあ、ここはヴエルを撫でて疲れをとるか！」

そう言つて俺は笑いながらヴェルの頭を撫でる。

俺らしくない、かあ、いつの俺の事をいつてんだか。

「な、なによ急に～。や～め～て～よ～」

「フハハハハ！ローブの中にいる貴様に我の魔の手から逃れる術はないわ！観念するがいい」

「キヤラ違う！それに自分で魔の手つて言つちやつたよ！」

つつこみレベルは3つてところだな。これからに期待。つてかつこみレベルつてなんだ？

「ふう、疲れがとれたぜ。で、ヴェルはレーテルンに行つたことがあるのか？」

「ちよつとした理由があつて、外国には行つた事はないんだ。でもレーテルンの王様とは知り合いだよ？嫌な奴だけどね」

「へ～、大変なんだな。で？レーテルンの王様つて誰なんだ？」
嫌な予感しかしないが……

「えつとね、一二〇〇年代はサナトスつていう王様が国を治めてるよ」

「サナトス？どつかで聞いた名前だな……」

「邪魔王つて言えば分かるかな？」

「・・・・・はあ、やつぱりプロミネントギルダーか。どんな人なんだ？」

「ハリンテのプロミネントギルダーはみんな温厚で平和主義なんだけど、レー・テルンのプロミネントギルダーは2人とも好戦的なんだ」「ヴェル、俺大切な用事思い出した。だからあとは頼ん…」

「ダメだよ！あたしだって行くの嫌なんだから」

「はあ、じゃあせめてもう1人のプロミネントギルダーに会わさないようになきゃな」

「もうすぐハリンテとレー・テルンの国境だよ」

「ご都合主義だな」

「なにそれ？」

「いやいや、こっちの話だから気にするな」

「ふうん、・・・・・けて」

「え？ 何か言った？」

「避けて！！」

そう叫ぶとヴェルは俺を蹴つて30メートルほど飛ばした。

直後、音もなく全長10メートルはあるうかといつ巨大な剣が、さっきまで俺たちが居た場所に突き刺さっていた。

「強者の気を感じると思ったらめえだつたか、獣懷狼」

声のした方を見ると、肌が黒く、充血なんてレベルじゃなくらい赤く染まつた眼球。俗に言う魔族がそこには居た。

「何の事やら、獸懷狼なんてあたしは知らないけどね。そういうあんたは魔天剣かな？」

「クッククックッ、てめえ変わったな。一昔前なら誰かと行動するなんて事はなかつたのにな。なんせてめえは…」

「やめて！！それ以上言わないで！」

魔天剣とかいうプロミネントギルダーがそこまで言つたところでヴェルが声を上げた。

どうしたつていうんだ？

「ホント変わったよてめえは。恋でもしたか？」

「つるさい！黙つて！」

何なんだ？そこまで聞かれたくないことがあるのか？

「力ずくで黙らせてみろよ」

「くつ！おにいさん、ちょっと待つてね。クローズ！」

ヴェルが何か詠唱すると、俺は五感全てを消された。

「魔法？それもかなり上位だな」

ヴェルは大丈夫なのか？あいつプロミネントギルダーだろ？確かにヴェルも強かつたがプロミネントギルダーには適わないんじゃ……

「チクショウ、待ってるしかねえのか」

ヴェル視点

「さあ、いくよ！」

あたしは魔天剣に向かつて走り出す。スピードであたしを超える者は現在はない。おにいさんも人の中じや速いけど、あたしには歩いているも同然のスピードだ。

「スピードは衰えていないようだな。・・・見えねえぜ」

一瞬で魔天剣に詰め寄り、殴り飛ばす。軽い一撃だから倒すにはまだ足りない。

「エクスプロード・フレア・ジエノサイド・アトミック！メテオ・ライトニング！」

上級複合魔法を連続して発動させる。今はおにいさんが見てないから自由に魔法が使える。

幾重にも魔法陣が重なつて、物凄い光とともに衝撃が巻き起こる。

「岩に突き刺さりし霸者の聖剣、我が呼び声に応えよ！エクスカリバー！」

マジックキャンセルしたのか？

魔法が巻き起こった場所には傷一つ無い魔天剣が立っていた。
いきなり本気だねえ。それにエクスカリバーって……ちょっと
まずいかな……

見ると、空から光り輝く巨大な剣が降つてきた。
おにいさんに使つた攻撃と同じかな？なら、

「三頭一対！地、海、空の魔獸よ、ここに具現せよ！ベヒモス、レ
ヴィアタン、ジズ！」

あたしは三頭の魔獸を呼び出した。ベヒモスは禍々しい角を持つ
巨大な雄牛、reviアタンは鉄壁の身体を持つ巨大な海竜、ジズは
銀色の羽を持つ巨大な鳥だ。

「ジズ！エクスカリバーを止めてきて」
ギヤアアオ！という鳴き声とともに、ジズはエクスカリバーの前

で翼を広げた。

キンッ！という硬質な音が響き、エクスカリバーはジズの翼に弾
かれ、勢いを失つた。

「なに！？ペットの鳥如きに弾かれただと？おのれ、大蛇に守られ
し神の剣！天叢雲剣！」

魔天剣がそう叫ぶと、剣が1本出てきた。

「天叢雲剣、あなたの本気つてわけか」

「一振りで終わらせてやろう」

そう言つて、剣を掲んだ。

「ジズ、ベヒモス、reviアタンもういいよ。あとはあたし1人で
大丈夫だから」

あたしは呼び出した三頭を戻す。

・・・ベヒモスとreviアタンに至つては何もしなかつたんだけ
どね～。

「ペットを戻すなんて、死ぬ覚悟でも出来たか？」

「いちいち五月蠅いなあ、集中しないと命を落とすかもよ」

「ほざけ、魔獸のいない獸懷狼なんて、ただの獸人同然。食らえ！」

ジエットブラック・クロス！」

魔天剣は天叢雲剣を袈裟切りを2回し、軌跡でバツの形を描いた。

嫌な気配がする…

そんな事を思つてた直後、軌跡から黒い刃が飛んできた。
迫りくる刃をすんでのこころで避け、刃の着地点を見てみると何
か魔法陣が描かれていた。

「新技かな？」

「いいや、一撃必殺の奥の手さ。これを見て生き延びた奴はいない
から情報が洩れてないんだろうな」

だとすると、短期決戦にしないとかなりヤバいと。

「突つ立てると奥の手の前に死んじまうぜ！ ジェットブラック・ク
ロス！」

いつの間にかあたしの横側にきた魔天剣が再び黒い刃を出現させ、
着地点に魔法陣を刻む。

何なんだ？ 何をしようとしている？

「次いくぜ！ ジェットブラック・クロス！」

今度はあたしの後ろ側にきた魔天剣が技を放ち、着地点に魔法陣
を刻む。

今魔法陣はあたしを中心の一辺300メートルくらいの三角形を
描いている。

「まさか！？」

「今更気付いたところで遅え！ 魔天・断罪！」

すると、三角形内部の空間に、黒い歪みが生まれ、漆黒の剣が現
れ、その空間を無に帰した…

36 なんか、俺が空氣です（後書き）

次回予告

潤「はいはーい、何も感じない空間に独りぼっちの潤君がお送り致します。・・・・・ 何もわかりません！ ヴェルにでも聞いてくれ。俺は寝る！」

37 なんか、怖いです（前書き）

最近スマートフォンが落ちやすくて文章が消える…

37 なんか、怖いです

「ハツハツハツ！俺より強いと言われた獣懷狼を倒したぞ！」

肌が黒く、目が真っ赤な魔族が、下には約30メートル、上には雲まで三角形に切り取られ、いや、消された風景を前に高笑いをしていた。

「ホント、おめでたい魔族だよ、魔天剣」

魔天剣は思わず冷や汗を浮かべる。

「ハハハツ、まだ奴の声が聞こえてきやがる」

「やれやれ、五感が封じられたおにいさんを移動させるのも大変だつたよ」

「そんなバ力な！てめえは確かに俺の魔天・断罪で空間」と消し去つたはず

「プロミネントギルダー第3位が空間転移の一つも出来ないと思う？第7位の魔天剣さん」

「クソガアアア！！」

そう叫びながら魔天剣は天叢雲剣を振り上げる。

「そうやつてすぐに頭に血が上るのが悪い癖だよ。せめて第5位に勝てるようになつてから出直してきなよ。テレポートつと」

そう唱えると魔天剣の身体が光り出し、消えた。

「行き先は・・・・よく分からぬや」

そんな事を言いながら潤に掛かつているクローズを解く。

潤視点

寝ていたら急に明るくなつて、目を開けると前にはヴェルが居た。

「お？ おうヴェル大丈夫だつたか？ 心配したぞ～」「ウソだ！ 今絶対寝てたでしょ！」

「何でバレてるのー？ 完璧に隠せてたはず…」

「ちょっと心眼使つて戦闘の様子を窺つてた」とするとヴェルはジト目をして俺を見てきた。ビリコラ事？

「おにいさん、誕

そう言つて俺の口元を指でなぞつた。

う～ん、確かに誕だ。つて、

「女の子がそんな事するんじやありません！」

まつたく、はしたない。不覚にもドキッとしたじゃないか。

「お母さんー？ あたしのお母さんー？」

「いや、おにいさんだ」

「急に冷静にならないでよ… しかも自分でおにいさんって

「悪かつたな」

「んじや、行きますか

一通りじやれ合つたんで本題に戻る。本題つてほどじやないけどな。

「いいの？」

「ん？ 何が

「行つちゃ何がまずいのか？」

「あたしの事、気にならないの？」

「え？ そりやあ女の子としては魅力的な方かと思うけど…」

「ありがと。つて、そうじやなくて！ あいつが言つてたことの方ー！」

「あいつ？ ああ、魔天剣とかいうプロミネントギルダーの事か。ヴェルの事何か言つてたな。まあ、気にしないさ、ヴェルが言いたいときには言えばいいよ」

「・・・・・」

「じゃ、行こうぜ。あと一週間でレーテルンに着かなきゃいけない

し

「うん…じゃ、またロープにいれて~

「おう! ヴェルの耳は任せとけ」

「や、やつぱやめようかな…」

「そう言つて俺から離れようと後ずさる。

「フツフツフツ、よいではないか~」

俺はそんなヴェルを抱き寄せて撫で回す。

「あ~、もう! おにいさんったら。 . . . ありがと」

聞こえないように言つたつもりなんだらうが、この至近距離にしゃ
丸聞こえだぞ。

「ハハツ、どういたしまして」

「き、聞こえてたの! ? サ、サッサと行! 」

ヴェルはロープの中にいるから顔は見えないが、きっと顔を赤く
していることだらう。

「いつの間にか夜になっちゃつたな~」

俺たちは今レーテルンの森にいる。めっちゃ不気味なんですけど…

「しょうがない、野宿にしようか」

「ヴ、ヴェルさん? 野宿つてこの森ですか? 」

「そうだけど? 夜に森を歩くのは遭難の危険があるからね

「いや、遭難と同じくらい危ないものがここには居そつなんだが

「獣は何故かこら辺にはいないから大丈夫だよ? 」

「何かいるからじやね? 獣は分かつてんじやね? 」

「もしかしておにいさん、怖い? 」

「な、な、な、何の事やら」

「んじや、野宿しても大丈夫だね

「お、おう、サッサと寝る場所探そうぜ? 」

声が震えてる上に裏がえつてしまつた…恥ずかしい。

「いいでいいかな? 」

俺たちは森の中でも比較的開けた場所で一晩過ぐることにした。

野宿なんてこの世界が飛ばされた時以来だな…

「じゃ、暖をとつて夕食にするか」

枯れ木を拾つてファイヤーで焚き火をした。

「夕食は干し肉と野菜と缶詰めがあるけど何がいい?」

「あたしは干し肉だけでいいよ~」

「ちゃんと野菜もどりなさい!栄養バランスが悪いわよ~」

「お母さん!~?つてもういいよ、そのノリ…」

「だが実際に野菜はとつた方がいいぞ?太るぞ」

「女の子にその言葉は禁句だよ!人狼族は肉食で野菜は食べないの。体重だつて軽いんだよ?」

肉食系女子と、え?意味が違う?

「ふ~ん、ならしようがないな…じゃ、どうぞ、お姫さま」

「どうも、おにいさんは何食べるの?」

「俺は野菜でいいかな、そんなに肉は好きじゃないし」

「おにいさんだってバランス悪いよ。お肉も食べなきゃ」

「へいへい、今度な。じゃ、夕食にしようぜ」

「うん。いつただきま~す」

夕食なんて普通の風景はカットをせてもらつぞ?

夕食が終わつて俺たちはすることも無いので寝ることにした。

「見張りは俺がしてるからヴェルは寝ていいぞ」

「この森に魔物の気配は無いし、おにいさんも寝て大丈夫だよ?」

「そうですか。じゃ、寝ましょ寝ましょ」

そう言つて俺たちは寝袋の中で寝ることにした。

いや~、怖えなあ…ヴェルはもう寝息を立てている。つて早…!
目開けてんのも怖いけど閉じるのも怖いな…どうじゅうつていうん

だ。

そんな事を考えてたら、ふと視界の端に緑色の光が見えた。

あ~、嫌な予感しかしねえ…

「行かないわけには……いかないんだろうなあ。ヴェルは、寝てるか。一応魔法掛けとか、闇玉つと」

そう呟いてヴェルを俺の魔力で包む。新技というほどの中ではない。単に魔力の壁で防御力をあげるだけだ。

「行つてくるか…ちょっと待つてろよヴェル」

そう言つて俺は緑色の光を追つて歩いて歩いていった。

「ん? これは? おにいさんの魔力? どこが行つたのかな? あ~眠つ、寝よ寝よ」

37 なんか、怖いです（後書き）

次回予告

潤「怖え～、行きたくねえ～。何で緑色の光について行っちゃったんだよ俺！もうやだ。帰りたい…」

38 なんか、拾いました（前書き）

調べたりしたわけじゃないので間違った知識が書かれているかも
しないで悪しからず。

38 なんか、拾いました

緑色の光の後について行つてゐるわけだ、一体どこに連れて行こうつていうんだ？

つてか何でついてきちゃったんだよ俺！知らない人について行つちゃダメって教わったでしょ！あ、光だからいいか、人じやないもんね。

・・・・・いやいや！よけい怖いわ！俺は幽霊みたいなのが滅茶苦茶苦手なんだよ。

そんな事を考えていたら、不意に緑色の光が強く光つた。到着か？見ると、どうやら池に辿り着いたらしい。うん、心靈スポットだ。しかも田を凝らすと、池の岸辺で座り込む1人の女性が……よし、戻ろう。

しかし身体はそれを許してくれず、だんだん女性に近づいていく。別に相手が女性だからとかではないと思うぞ？

女性の横に強制的に（ここ重要）座られると、身体も自由になつた。

「君が私が2174年の間捜し求めてた主ね？」

キラキラした田でハツラツと言われた。あれ？幽霊つてこんなに元気だつけ？

「いえ、人違ひです」

俺はこの人知らないしな。つてか何年捜し続けてるんだよ。

「そんなはずはないよ、君、異質な魔力を持つてるでしょ」

「長い間洗濯しなかつたから黒ずんだだけです」

「いや、黒い魔力の中でも異質つて言ってんの」

俺のボケが中途半端にスルーされた：

「俺にはよく分かりませんけどね。それで？俺があなたの捜し求めてた人だったとして、何がしたいんですか？」

すると、幽靈はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりに…

「よくぞ聞いてくれた！」

俺が今言つたんだから被せるな！

「君は私を使ってた魔王の魔力に性質が似てんだよね～、だから私をあげちゃおうかなつて思つたわけ」

魔王に使われてただつて！？使つてどうこいつ意味？それに私をあげちゃおうつて…女の子がそんな事言つんじやありません！

「え、え～つと、頭の整理がつかないんだが…ちょっと待つてくれ

「どうぞ、でもなるべく早くね。私もこのままじゃつらいか

（（おい、ＫＹ女神！））

（（何～？まだ夜中なんだけど））

（（なんか俺の前に幽靈出たんだけど））

（（えつ！？やめてよ、私怖い話とか苦手なんだから～。じゃ、おやすみ））

（（おい、ちよ、待てよＫＹ女神！））

（（ＺＺＺ））

今時珍しい寝息…ゼットゼットゼットなんて初めて聞いたわ…って、え！？マジで寝やがった！使えなさすぎだろ。こりゃ降板決定だな。

「うん。なんか、整理はつかなかつたけど、どうぞ進めて」

「え、いいの？まあ、こっちも時間無いから助かるけど……でね、单刀直入に言つと、魔王と同じ魔力を持つ君に私をあげよつと思つ

の

「それはさつきも聞いた。その、あげるつていうのはビツビツ意味なんだ？」

「う～ん、今の姿じゃ信じてもらえないだろうけど、実は私、魔王に使われてた武器なんだ」

「うん。信じられない。証拠は？」

武器に変身してくれれば本当だつて認めてやるわ。

「いや、契約してもらわないと武器の姿になれないんだよね」

「契約しなきゃ見せられないって、もしかしてお前…」

「あ、やつと分かつてくれた？」

「詐欺師だな！契約して俺から大金を巻き上げようつて魂胆か。だが残念だつたな、俺はそんな大金持つてない」

「違うわっ！私は見返りを求めないから、サッサと契約しちゃつてよ」

「冗談だつたんだけどな～、つていうか契約つていつてもどうせやつてするんだ？」

「ん～、契約するつて言わなきゃこっちも言えないなあ」

「とつてもブラックな香り！ホントに危なくないんだろうな？」

「危なくないつて、で？契約する？」

「お前の利益は？」

「使つてもらえる事かなあ」

「そもそも使つて何なんだよ」

「あ～、もう！面倒くさいな～！」

そう言つと、コイツは俺に飛び込んだ。いや、隠さず言つてキスしてきた。

咄嗟のことで何も抵抗の出来なかつた俺は倒れた。

・・・倒れた拍子に舌噛んじやつたじやねえか。

「ふう、ご馳走様。契約完了だよ？」

「うう、ファーストキスだつたのに」

ニヤリと笑うコイツに涙を流す俺。

「女の子みたいな事すな！鳥肌立つわー！」

鳥肌立つつて…そこまで言わんでも。まあ、嘆泣きだからいいけど。いいのか？

「で？契約したら何が起くるんだ？」

見た感じ何も変わつていない。

「あと10秒くらい待つて。そうすれば分かるから」

そう言つた途端、コイツの身体が光り出した。

「あ、もうすぐ私の感情が無くなるけど、絶対売らないでね。つてか持ち主が君じゃなくなつた瞬間、私はこの姿に戻るからそのつもりで」

そう言い残すと、コイツは消えた。

「何だつたんだ？夢でも見てたのかな」

戻つて寝ようと思い、立つた瞬間、女性が居た場所で何かが目の端に入った。

近寄つて見ると、

「剣、だな」

刀身が黒く美しい造形だが、目に見えるほど禍々しいオーラを放つ西洋の剣がそこにはあった。・・・取扱い説明書付きで。せつかくのオーラが台無しだぞ。

「うわ〜、手に取りたくねえ…でもアイツが言つてたのってコレのことだよな〜」

放置しておくわけにもいかないので、とりあえず握つてみる。

ほう、これは

「剣、だな」

何を当たり前な事言つてるつて？いやいや、だつて俺この世界に来るまで剣なんて触つたこと無いもん。確かに握つてシックリくるけどや、剣つてそういう物かもしれないじやん。

しかし丁寧に使われていたのか、刀身には血脂の跡ひとつない。初心者の俺が見る限りでは、形状は片手半剣、いわゆるバスター・ソードだ。刃渡りは1・5メートルくらいか…つて長つー魔王はどんだけデ力かつたんだよ！よくこんなの持てるな俺。ん？そういうれば重さを感じないな…まあ、いいや。

バスター・ソードの特徴でもある狭い刃には金色の文字で何か書かれている。いかにも魔剣つて感じだな。

それにこの剣、

「魔力がよく通るな」

魔王仕様つてやつか？

そういうえば説明書があつたつけか？一応読んどくか。

「つて、もう時間か……んじゃ、説明は次回だな。ちゃんとバスターードソードについて勉強しとけよ？」

つて、何独り言言つちゃってるんだ俺。

38 なんか、拾いました（後書き）

次回予告

潤「次回は説明回か…面倒くさいな。やつぱり魔剣なんてありますんでした、って感じになんないかなー。え? ならないって? はあ」

39 なんか、痰田です（前書き）

久しぶりの本編です。

39 なんか、涙目です

「んじゃ、説明書を読みますか
何で説明口調なんだ？俺。

『神魔剣オルギヌス 取扱い説明書』

お買い上げありがとうございます。本品は呪いの武器につき、返品が出来ませんので、予めご了承下さい。

尚、本品は吸呪性に優れています故、意思を持つもの（人や魔物など）を斬りつけますと、より一層扱う者を選ぶ剣となりますので、代々受け継いでいることをお考えのお客様はあまり意思を持つものを斬りつけないよう注意下さい。

（保管方法や保証期間など、どうでもいい事なので省略）

神魔剣オルギヌスは魔剣ですので、黒魔力を注ぎ、一定の行動をする事で剣技が扱えます。

・ N - 001

剣を地面に突き刺し、魔力を注ぐ事で発動します。剣の周囲を魔力を注いだ分だけ広がる漆黒の球体で、相手の視界を奪います。発動者はこの限りではないのでご安心下さい。

・ N - 002

魔力を注ぎ、剣を前に突く事で発動します。切っ先の方向へ螺旋状に進む黒い魔力砲を生み出します。魔力を注いだ分だけ魔力砲は太くなります。

以上が剣自体に備わっている剣技となります。

では、今後とも我が社の通信販売をご覧ください。

「だそうだ。魔剣みたいなのがダンジョンとかにあるものかと思つてたわ…通販で買えんのな。

しかも魔王、絶対人斬りまくつただろ。滅茶苦茶邪悪なオーラを感じるんだけど…

「とりあえずは、儲けたって認識でいいのかな?」

俺武器になるもの黒刀しかないし。

「さてと、用事も終わつたみたいだし、戻るか

今は夜中の3時頃だ、多分。説明書読むのに時間が掛かつたからな。

俺は神魔剣とやらを持つて、もと来た道を歩いていった。

ヴェルの居るところまで戻ると（事前にヴェルに掛けておいた闇玉のおかげで魔力を辿つて戻れた）緑色の光について行った時と特に変わつたことは無さそつだつた。

俺はヴェルに掛けた闇玉を解き、起こさないようじに静かに寝つ転がつた。

「ん~! 朝かあ

朝日が眩しく、目を細めながら伸びをするヴェル。

「おはようさん、よく寝れたか?」

「うん、つておにいさんどうしたの!~?」

「どうしたつて何が?」

寝癖でも付いているんだろうか。

「いや、隈がすごいよ!~

「ああ、昨日は寝られなくてな…」

と、俺は昨夜にあつた事をヴェルに話した。ああ、もちろん武器

にキスされたなんて事は言つてないぜ？

「やつぱつ……だからあたしに魔法を掛けたんだ」

「そういうこと。んじや、この剣の事は道中話しえつとして、朝ご飯にするか？」

「うん！お腹と背中がこんなにちはだよ～、朝ご飯は何にするの？」
「小学生かっ！？いや、今どきお腹と背中がこんなにちはなんて幼稚園児レベルだよ！」

「そうだな……昨日の肉がまだ余ってるからヴェルはそれでいいか？」
「あたしはいいけど、おにこさんはどうするの？野菜は昨日食べきつちゃったよね？」

別に俺が大食いなわけじゃないぞ？野菜は日持ちしないかなって思つて1食分しか持つてこなかつただけだ。

「缶詰めがあるから俺の分は大丈夫だな。んじや、ひとつと食べてレー・テルンに行きますか」

「うん、いつただつきま～す！」

朝食を終えた俺たちは、魔物との戦闘もなく、昼過ぎには森を抜けた。

「それでも、旅をしてから今まで1匹も魔物に出くわさないな」「アハハ～、何でだろうね～…」

何か物凄く白々しい返しがきた。ヴェルが何かしてるのであ、敢えて追求はすまい。

「魔物が少ないのでいい事だから気にしないでいいか。ところでヴエル、レー・テルンまではあとどの位なんだ？」

「う～ん、このペースで行くと、明日には着くかな～」
期限は1ヶ月、今日がハリンテ城を出て25日だからちょうどいいいか。

「んじや、黙々と歩いていきますか」

（10分後）

「・・・・・」

「・・・・・」

（20分後）

「・・・・・」

「・・・・・」

（30分後）

「・・・もうダメだ！黙々となんて歩いてられねえよ

「限界早っ！まだ30分位しか経ってないよ！？」

おつと、ヴェルに突っ込まれちまつた。俺の横を歩くヴェルは何か得意げな顔をしてるし……

「森に入つてから俺のロープに入らないけど、大丈夫なのか？」
「うん、もう尾行されてる気配は無いし大丈夫だよ。ありがとね、おにいさん」

今まで尾行されたのか……全然気付かなかつた。俺が気付かないなんてメイドさんレベルか…厄介なのに追われてるな。

「いやいや、気にすんな。ヴェルの耳も堪能できたことだしな

「まったく、おにいさんつたら」

ハハハ、と俺たちは笑いあつて、歩き続けた。え？平和すぎるつて？安全第一、平和が一番つてな、HAHAHA

歩き続けること更に10時間、俺たちはレーテルンに入つて初めての村、ピテルンに到着した。

何か可愛い名前だな、ピテルン。

「ちょうど夕方だし、今日はここに泊まるか

「そうだね、じゃあ宿屋を探そつか～」

「その前に一つ聞きたいんだが、レーテルンの貨幣を俺は持つてないんだが…」

「ん? この世界はどの国でもワロ貨幣で統一されてるよ? おこいつさんの世界では色んな貨幣があったの?」

「ああ、国によって独自の貨幣を使う国が多かつたな」

「この世界は元の世界のEシミみたいなものって認識でいいのか? 国を行き来するのにパスポートとかも要らないし…まあ、便利だからいいけど。」

「へへ、不便だね」

「まあ、俺はそれが普通だつたから不便に感じなかつたけどな。さて、サッサと宿をとつちやうか」

「2部屋、それぞれ1泊でよろしいでしょうか」

宿屋の受付のスケルトンのお兄さん（お姉さんだったら、メンナサイ）に俺とヴェルの部屋をとつもらつた。

「はい、大丈夫です」

「食事は付きませんので、各自調達してくださー」

「分かりました」

「さて、じゃあ食事をとるついでに村を見て回りますか」

自分たちの部屋を確認して、俺たちは再び宿屋の玄関で待ち合わせた。

「この村はあたしも初めて来たからね」

そう言つて俺たちは宿の外へとくりだした。

よし、村を散策した結果から報告しよつ。

・・・何にもねえええ!! 確かに規模の小さい村だつたけど、宿

屋1軒に食事処2軒、民家1-3軒の村つて……武器屋も無いがどうやって魔物が襲ってきた時に撃退するんだ?

ま、そんな事より夕飯にしよう。

「え～っと、ヴェルは普通の定食屋と虫をふんだんに使った定食屋、どっちがいい?」

ちなみに今俺は涙目だ。理由は……察してくれ。

「おにいさん……あたしだって虫なんて食べたくないよ。普通の定食屋にしよ? ほら、涙拭いて」

これは気を使つてもらえたのか? それともやつぱり虫をたべるなんて特殊なのか?

俺は涙を拭いて普通(ここ大事)の定食屋に入つていった。

39 なんか、涙目です（後編）

次回予告

潤「虫つたって食えるのもあるけど……やっぱり俺は無理。あ、別に虫を食べる事を批判してるわけじゃないからな。好みの相違つてやつだ。次回はいよいよレーテルンに到着する…………かも」

ただの、番外編です（クリスマス編①）（前書き）

なんとかクリスマスに滑り込みました。

いきなり話が変わるのは許してください…

ただの、番外編です（クリスマス編1）

「クリスマス、とな？」

「はい、クリスマスです」

俺は今日が元居た世界での12月25日に当たる日だと聞き、女王やメイドさん、セレンが揃う夕食にこの話題を切り出した。

「この世界にはそんなの無いけど、どんな行事なの？」

「うーん、街が綺麗なイルミネーションで飾られて、皆がハッピーになる日？ ああ、あとよい子にはサンタクロースからプレゼントが貰える」

間違つてはいなはず、間違つては。

「サンタクロース？ プレゼントを配るなんて物好きな奴じゃの」「子供好きなんぢゃないですか？」

「適當だな俺。」

女王は少し悩む素振りをみせて、何か決めたようだ。

「よし、妾がサンタクロースになつて国民に幸せを届けようぞ」「おおう！ 新鮮な思いつき！ まあ、こつちにサンタクロースはいいだらうからな…

「メイドよ、…………」

「はい、承知いたしました」

女王とメイドさんで何か打ち合わせをしたようだ。

「ところでジュン、そのサンタクロースってどんな人なの？」

「ああ、サンタクロースは赤い服を着て、プレゼントを入れた袋を担いだ優しそうなおじいさん？」

「何で疑問文なのよ」

「誰も見たことはないからな、あくまで俺の想像だ」

「ふうん、変な人のねサンタクロースって」

「ハハツ、まあ、確かにサンタクロースを知らない人が聞いたら変な話かもな」

セレンの尤もな言葉に思わず笑みが零れる。

夜7時になり、国民は全員広場に集められた。この広場、滅茶苦茶広いな…だいたい5000万人位の人気が集まるつて…

俺がそんな事を考えていたら、いつの間にか女王が全体を見渡せる台の上に立っていた。

「今日はよく集まってくれた。今日皆を呼び出したのは他でもない、クリスマスを開催するためじゃ」

クリスマス？何だそりや。というような声があちこちから聞こえる。

「クリスマスというのは、彩られた街の中でプレゼントが貰える祭りの事じや。今日は皆が集まっている間にメイドが皆の家にプレゼントを置いてきた。わかりにくい場所に隠しておるから探すとよい」いくら何でも速すぎないか？何者だあのメイド、鍵をかけたはずなんだが、というような声がチヤホラ聞こえる。

メイドさんをただの人と思つちやいけないぜ？俺もよく知らないけど…

「うむ、ではクリスマス開始じや！各々の家を探すがよい、その者の最も欲する物が置いてあるはずじや」

そう宣言すると、街に一斉に光（あれは魔法の光だな…）が溢れ、街を彩った。

「綺麗…」

とセレンが思わずといった感じで呟く。

「ああ、魔法つてこんな使い方もあつたんだな」
そう言う俺も感心している。

「ほれ、お主らも自分の部屋でプレゼントを探さぬか、せつかくの祭りじやぞ？もっと楽しめ」

女王が八重歯を見せながら笑いかける。

「えつー…プレゼントって私たちにもあるんですか?」

「当たり前じゃねー、お主らはもう我が國の臣民や」

ありがたいお言葉で…だけそんなん簡単に国門にしおれやつてこいつ滅びるわ。ならず者が入つてこないとも限りないわけだし。

まあ、クリスマスにこんな事考えるのは無粋つてやつか?

「ハリヤーデリモ。んじゃ、部屋でプレゼント探しに行きますか」

ついで事でやつてきました俺の部屋。せつかくだから探しでみますか。

「前と変わった所は……ないか」

流石メイドさんだな。ぬかりがない。

「楽に見つけられるほどプレゼントは甘くないってかいじや、やつてやる。クリスマスの趣向と違つ坂がするが」の際

気にしない。

机の下及び裏、ないか。

クローゼットの中、やつぱりな

ベッドの中も、ないな。

「見つかりましたでしょつか?」

「おおつー、ジックリしたー、驚かせなこいドセーよメイドさん」

プレゼントを隠した張本人、メイドさんの「」登場。

「その様子だとまだのようですね。ヒントを差し上げましょうか?」

「ヒントがないと分からなによつた難しい場所なんですか?」

「ジョン様のプレゼントのみ、わたくしが全力を以て隠しましたので、ヒント無しでは難しいかと」

メイドさああん!何で俺だけ難易度最高なの!?

「すぐに見つけられてしまひらが面白くないからです」

また心を読んだし…

「メイドさんの全力じゃヒント無しでは見つかりませんよ。ヒント

「ください」

メイドさんはいつもの無表情で、

「ヒントは、、、」の部屋にプレゼントがあります」と言った。

う。全然ヒントになつてない。部屋にある」とは分かつてるんだけどな。

「もつちよつと分かりやす」ヒントとかは…」

「あとは」自分で探し下れ。」では」

そう言つとメイドさんは部屋から出でてしまった。

結局ヒントは貰えず、か。あのメイドわん、絶対俺の事嫌いだろ…

「プレゼント探し、再開しますか」

このまま見つからないのも癪だしな。

闇雲に探しても見つからないだらう。メイドさんの隠しあうな所は…

そういうえば女王は分かりにくい場所に隠してあるつて言つたよな。つて事はプレゼントの隠し場所は女王も知つてゐるのか。

「女王が隠しそうな場所を探せと」

女王なら新参者の俺たちに国の特色を知つてもらいたいはずだ。そこまで考へてるかは些か疑問だが。

「この国の特色……ユリナントよりもテレビが普及してるか?」

そう思いテレビの周りを探してみるが、ない。

いや、女王は俺が異世界人つて事を知つてゐる。隠すとしたらこの世界にしか無いもの。

・・・・あるじやないか、魔法の本が。

本棚にしまつてある魔法の本を出してみる。

あつた。『クリスマス』と書かれた包装紙が魔法の本の奥に入っていた。

「これが」

ティッシュの箱くらいの大きさの包みだ。重ねて…重くもなく軽くもない、手頃な感じだ。

「プレゼントって事は開けて良いんだよな？」

誰もいるはずのない部屋で誰とはなしに呟く。
まあ、開けるしかないよな…

包装紙を破り箱を開けると、

「携帯電話か」

黒い折りたたみ式の携帯電話が入っていた。ちゃんと説明書と保証書の入った安心設計だ。

俺の一番欲しいもの、か。確かに当たってるかな。あれば便利だし。

やういえば女王と初めて会つた時もテレビやら携帯電話やらで泣きじゃくってたんだっけ……

おっと、懐かしんでる場合じゃない。俺もやる事があるからな。

「女王様、携帯電話ありがとうございます」

俺は今、女王の部屋に入れてもらつてこる。

「うむ、見つかったようじゃの。勝手に選んでしまつたが良かつたかの？」

「ええ、とても気に入りました。それで、よかつたらいらっしゃからもプレゼントを贈りたいんですけど

「なんじゃ？妻にもくれるのか」

女王が興味津々に顔を近づけてくる。女王といつてもまだ俺と同じ子供、プレゼントを貰えると聞いて悪い気はしないんだろう。

「もちろんです。クリスマスは皆に平等ですか。・・・ちょっとと目を閉じてください」

俺がそう言うと女王は素直に目を閉じた。ちょっとは疑つたりし

ないものかね…

「・・・はい、もう目を開けて良いですよ」

その言葉と同時に女王は目を開け、自分の首元を見た。

俺がプレゼントしたのはネックレスだ。女王からすれば安物にしか見えないかもしれないが、あまり気の利いたプレゼントが思いつかなかつたのでネックレスで我慢して貰うことにした。

「この首飾りを妾にか？」

ネックレスと俺を交互に見る女王。

「はい。安物で申し訳ありませんが、女王様に似合つかなと思いまして…これが俺なりのプレゼントです」

「安物なんて、そんな事はない！妾は今、とても嬉しいぞ。こんなに心の籠もつたプレゼントなんて初めてじゃ」

女王は一瞬ながらネックレスを抱えてくる。うん、微笑ましいな。

「では、俺はこれで」

「うむ。感謝するぞ」

そんなやりとりをして部屋を出て行つた。

ただの、番外編です（クリスマス編①）（後書き）

これは完全に気分で書いたもので、1時間掛けずに書いてしまったものです。

1月の半ば頃に済みうつと思つてるので、「安心下さい」。

万が一、残して欲しい。また、クリスマス編の続きが気になると
いう方が1人でもいらっしゃつたらご連絡ください。何とかします
(笑)

ただの、番外編です（クリスマス編2）（前書き）

クリスマスの続きです。

クリスマスが終わってからの投稿ですが、許してください。

ただの、番外編です（クリスマス編2）

「メイドさん、プレゼント見つけましたよ」
そう言つて携帯電話をメイドさんに見せる。

「あの場所が分かりましたか、跡は残さなかつたはずなんですが、悔しいです」

そつは言いつつも、まったく表情を変化させていないメイドさん。
「あんまり悔しがつてゐるようには見えませんが……つと、本題を忘れるところだつた。メイドさんに会いに来たのは、これを渡そうと思つたからです」

俺はメイドさんにメイドが使いそうなフリフリのついたカチューシャをプレゼントした。

実はこのメイドさん、服はメイドのそれだが頭に例のカチューシャをしていないのだ。

「何ですか？この恥ずかしい曲がつた棒は」

「あれ？この世界にカチューシャつて無いんですか？」

まあ、元の世界でもあんまり見なかつたけどね。

「このような形状の棒は初めて見ます。どのように使うのですか？」
表情には現れないが、興味を持つてもらえたようだ。

「一言余計です」

だから心を読まないでつて…

「はあ、力チユーシャはですね、いつもやつて頭に付けるものなんですよ」

そう言つて俺は力チユーシャを頭に付ける。

「・・・・・」

「・・・・・よくお似合いで…」

「ダウトオオオ…別に似合わないのは分かつてますから、変に気を使わないでください。もともと力チユーシャは女物だし

「なるほど、ジュン様にはそんなご趣味があつたのですね」
納得がいったという感じで言っていた。

「いやいや、違います！断じてそんな趣味は持つません！付け方が分からぬいであるうメイドさんの為に実演しただけです」

「分かってあります。何を当たり前な事を言つてるんですか？」

何か平然と返された…え？これって俺が悪いの？俺の勘違いだったの？

「はい、勘違いでござります」

もう心を読まれた事に対し突っ込まないぞ。なんせメイドさんだからな。

「はあ、もういいですよ。んじゃ、俺はまだ用事があるんで」

そう言つて俺はその場から離れた。

「プレゼント、ですか…人から貰うのはなかなか嬉しいものですね」

そう呟いてそっと自分の頭にカチューシャをかけたのは、きっと誰も知らないだろう。

「ヴェル～、居るか～？」

メイドさんにカチューシャを渡した俺はヴェルにプレゼントを渡すため、庭に出た。

「おにいさんから声を掛けてくるなんて珍しいね～、どうしたのさ」
虚空から突然声が聞こえてきたかと思つたら、俺の目の前にヴェルが現れた。

毎回思うが、どうやつてんだ？

「今、女王様が国民にプレゼントをあげたのは知つてるよな？」

「うん、あの場には居なかつたけど、皆がプレゼント探しに夢中なのは気付いてるよ？」

ヴェルは広場には居なかつたのか、何でだ？まあ、聞かない方が

良さそうだな。うん、俺大人。

「それで俺もヴェルにプレゼントをあげようと思つんだ」

「え？ ホント？ なにくれんの～？」

ヴェルは飼い主に遊んでもらう犬のよう（実際は狼だが）目をきらきらさせて俺を見てきた。

「実はな、服を買おうかと思つたんだがサイズが分からぬ上にどんなデザインが好きなのか分からなかつたから、今度一緒に買いに行かないか？」

「うん！ 約束だよ～」

「おう！ 約束だ。いつ買ひに行くかはまた連絡するから」

「楽しみにしてるよ～」

俺は手を振つてそれに応え、城の中へと戻つていつた。まだまだやる事はあるからな。

「セレン～？ 入つても大丈夫か？」

俺はセレンの部屋の前まできて扉をノックする。

「ジュン？ 入つていいわよ」

中から声がして、入室の許可を得る。

「私の部屋に来たつてことは、もう女王様からのプレゼントは見つかつたの？」

「ああ、バツチリだ。俺は携帯電話がプレゼントだつたんだがセレンはどうだつた？」

「へ～、良かつたじやない。私はこの剣だつたわ」

そう言つて俺に見せてきたのは、もとの世界でいうフランヴェルジヨという剣によく似ていた。刀身が波打つていて、傷口を治りにくくすることが特徴の恐ろしい剣だ。

「クリスマスに武器をプレゼントつて…しかも女の子に

無粋な気がしてならないな。

「そう? 私は気に入ったわよ?今までのコリナント兵が使ってた大量生産の安物じゃないし」

「まあ、本人が気に入ったのなら良いんだけどさ」

「で? ジュンは何しにここに来たのよ?」

セレンが剣を壁に立て掛けで尋ねてくる。

「ああ、そうそう。今日はクリスマスなんで俺からもセレンにプレゼントをあげようと思つてね。はい、どうぞ」

俺はそう言つてセレンにブーツを手渡す。

ブーツって言つてもヒールの高いような物じゃなく、動きやすさを考えてあるようなブーツだ。

「な、なによ突然。変なジュンね」

そうは言いつつもブーツを受け取るセレン。

「照れるな照れるな」

「て、照れてなんかいないわよ!」

だんだん顔が赤くなつていくセレン。分かりやすいな…

「はいはい、んで、そのブーツだけど、風の魔力と俺の黒い魔力を一緒に付与しといたから機動性は今の靴よりも良いと思つ」

「そ、そ。……ありがと」

真っ赤になりながら俺に礼を言つセレン。プレゼントされただけでこんなに赤くなるもんなのか?

「どういたしまして。んじや、俺はこの辺で」

そう言つてセレンの部屋から出ていく俺。え? もう? プрезентは渡し終えたんじゃないかつて? あと一人居るだりう。

「シリチナさん、メリークリスマスです」

「そうだよ、瞬息剣シリチナだよ。この人にもお世話をなつたからな。プレゼントを渡す相手が必ずしも女性とは限らないぜ?」

「やあ、ジュン君。なんだいそのメリークリスマスというの?」

「ああ、そういうえばクリスマスについては言つたけど、メリークリ

スマスとはこの世界では言つてなかつたつけ？

「えうつと、クリスマスおめでとうつて感じです」

「へへ、じゃ、メリークリスマスジュン君」

見た目オッサンなシリチナがイケメンボイスで言つてくる。なんかややこしいな…

「ありがとうござります。で、早速ですがシリチナさん、プレゼントです。どうぞ」

そう言つて俺はシリチナに剣を渡した。

まあ、騎士（軍人）だし、剣でもいいだろ。

「これは？変わった色の剣だね」

俺が渡したのは緑のロングソード。これは癒しの力が付与されていて、剣の腹を傷にあてると傷が治るんです。騎士団長ともなれば必要になるでしょ？

怪我をするのは必ずしも自分とは限らないわけだし。

「なるほど、ありがとうございます。大切に使わせてもらつよ」

「では、俺はこれで」

そう言つて俺は城の自分の部屋へと戻つた。

「すっかり懐が寒くなっちゃつたな」

ヴェルの服を買うことも考へると、ギルドの依頼で貯めた金が無

くなつちまうな。まあ、たまにはこんなのもいいかな。

「はあ、なんか疲れたな…寝よ寝よ」

そう独り言を呴いて、ベッドに潜つた。

『とある2人の会話』

「サンタクロースとしてじゃなく、友人としてプレゼントを渡すのはアリかの？」

「はい、アリだと思われます。ところで、わたくしも、1人の友人

にプレゼントを贈りたいのですが、これもアリで「じゃこましうか

？」

「アリじゅの」

そう言つて笑う一人と無表情な一人の会話。

『とある庭での独り言』

「おにいさん、何が欲しいかな～。人にプレゼントを渡すなんて初めてだな～、楽しみだな～」

そう言つて虚空に消えた少女の独り言。

『とある部屋での独り言』

「ジュンは何か好きだったかしら。べ、別に私がプレゼントを渡すのはお返しとしての意味しかないからね！って、一人で何言つてんだろう私」

そう言つて物思いに耽る少女の独り言。

『とある練習場での独り言』

「プレゼントなんて何年ぶりくらいだろうか…ふ、オレも年をとったんだな。さて、ちょっと城下に行つてくるか」

そう言つて城の外へと向かう男性の独り言。

その晩、潤の枕元にはプレゼントが5つ置いてあつたとさ…

40 なんか、ギャップがあります（前書き）

なつかしいあの頃が恋しくなっちゃう。何がどう言こませんが…

40 なんか、ギャップがあります

俺たちは普通の（ちゃんとチェックしたか？）定食屋で食事を済ませ、何事もなく、翌日出発した。

歩くこと2時間、レーテルンの首都、ミコーレンに着いた。

ここが邪神王サナトスの居る場所か……なんて言つたか、ラスボスのいる魔王城みたいだな。まだ昼間だつていうのに空は星がでているものの真っ暗で、住民は魔族やスケルトン、ゾンビばかりが目に付く。街の中心にある城は壁が黒く、窓らしい窓が見当たらない。

「ヴェル、割とマジで帰りたいんだけど」

「あたしもこの街は好きじゃないんだから、ほら一緒に行こ？」
ヴェルに手を引かれて俺は街の中へと入つていった。
もしかして俺って今非常に情けない？

「ハリンテ国からサナトス様に国書を預かっているんですけど」「なるべく住民や風景を見ないようにして、一目散に城を目指し、今は門番に話を通している。

「ジュン殿で間違はないか？」

ちなみに門番はスケルトンだ。めっちゃ怖いぜ。今も膝がガクガクしてる…

「か、勘違いしないでよね！これは武者震いなんだからね！」

「何を言つとるんだ。ジュン殿で間違いないかと聞いているんだ」「おつと、つい口に出しちゃつたぜ。恥ずかしい。

「はい、潤で間違いません」

「よし、では城の中に入つたらまつすぐ進み、突き当たりで待つているよい」

「分かりました。あ、連れがいるんですが一緒に入つても大丈夫ですか？」

「その者の身分証明ができれば大丈夫だが、その連れはビニにいる？」

「いや、どうして、わざわざから俺の後ろに……って、あれ？ ヴェルはどうにこった？」

門番と話す直前までは俺の後ろにいたはずなのに……どうなつてんだ？」

「訳の分からぬ事を言つてないでサッサと入りなさい」

門番にそう言われ、納得出来ないながらも城の中へと入つていった。

さて、言われたとおりまつすぐ進み、突き当たりで待機してると不意に目の前の壁が開いた。

「ジョン殿ですね、どうぞお乗りください。サンタス様のお部屋まで案内させていただきます」

箱状の部屋の中から魔族の女性が現れて俺に話し掛けた。

「よろしくお願ひします」

そう言つて俺はその部屋に入った。それを確認すると、女性は壁に取りつけられたボタンを押して、部屋が上昇した。

これつてもしかしてエレベー……いや、何でもない。もう俺は気にしないんだ。別にファンタジーな世界に科学的な物があつてもいいじゃないか。

チンツという古賀店でなりそうな音とともにドアが開いた。

「この廊下の突き当たりにサンタス様のお部屋があります。どうぞ、実りのある話が出来ますよ」

一礼して俺を見送る女性。

実りのある話つて、手紙を届けて終わりじゃないのか？

「分かりました。ありがとうございます」

そう言つて俺は廊下を歩いていった。

部屋の前に着いたはいいけど、威圧感つていうか存在感つていうかが半端ねえ！！怖い人だつたらどうしよう。いきなり戦いとか挑まれないよな？

あ～、サッサと手紙渡してサッサと帰らう。

「サナトス様、ジュンです。ハリンテ国から国書を持って参りました」

ノックをして用件を述べる。機嫌を損ねるような事言わなかつたよな？俺。

「あ、入つていいよ～」

中から渋い声で返事が聞こえる。

「つか、え？俺の聞き間違えか？めちゃくちゃ軽い返事が聞こえたような…」

「し、失礼します」

そう言って部屋の中に入ると、サナトスと思われる5メートル位あらうかという巨大なスケルトンとその隣にヴェルが居た。

つて、ヴェル！？いつの間に城に入つてたの？

「あ、おにいさん。思つたより遅かつたね～」

「急にヴェルが居なくなつて戸惑つてたからな」

「こいつは転移魔法でいきなり現れてさ～、ワシもビックリしちゃつたよ」

骨をカタカタ鳴らして笑つている。

サナトスってこんなにフランクなのか？

「ちょっとオジサンに用事があつてね、先に行かせてもらつたの」

サナトスをオジサンつて…

「サ、サナトス様…」

「あ、サナトスでいいよ」

「い、いや、そういうわけには

王族でプロミネントギルダーでもある相手にそんな事言えねえよ。

「大丈夫だよおにいさん、オジサンはこんな姿だけど優しい人だから」

「ヴォル、お前この人苦手って言つてたじやねえか。

「いきなり呼び捨ては流石に俺の方が無理があるので、サナトスさんでよろしいですか？」

「まあ、いつか。好きなように呼んで」

「では、サナトスさん、これがハリンテ国からの国書になります」

俺はサナトスに女王から預かつた国書を渡す。

「サンキュー、どれどれ…」

サナトスは受け取った手紙を早速読み出した。

「ふうん、やつぱりか。ジュン、手紙を持ってきてくれてありがとうございます。ところで、中身は見てみた？」

「いえ、滅相もない」

国書なんて盗み見れないだろ。

「手紙にはね、ジュンが今代の魔王と書かれている」

あっさりと重要なこと漏らしたア！

「えっ！？ いえいえ、俺が魔王だなんて」

「ううん、でもジュンから感じる黒い魔力は普通の悪魔の魔力とは雰囲気が違うし、それにその背中に背負った魔剣は先代魔王が使ってたものと特徴が一致するんだよね」

そういうえばこの剣をもらつた時にそんな事言つてたつけ？

「俺が魔王だとして、何をすれば良いんですか？」

面倒事なんてゴメンだ。

「恐らく、勇者が現れて魔王であるジュンを倒しに来るだろうね」

「面倒事キタ！」

「何で勇者が現れるんですか？」

「これは本當か嘘か分からんんだけど、どうやらバー・ラン共和国が勇者を召喚する特別魔法を持つてるらしいと、魔王を倒した勇者を召喚した国として他の国よりも優位に立とうとしているらしい」

「腐つてますね」

「まつたくだ」

はあ、と溜め息をついてイスの背もたれに寄りかかるサナトス。

「そういうえばオジサン、この国に入った頃に魔天剣がちよっかい出してきたんだけど、どうにかしてよ~」

ヴォルが思い出したように言い出した。

「アイツもまだ若いからな、遊びたい年頃なんでしょう」

「オジサンから見たらみんな若くなっちゃうよ」

「そりやそうだ」

ハハハハハ、と笑いあう2人。

仲良いじやねえか。

「あ、もうこんな時間だ。おにいさん、早く帰ないと夜までピテルンに着かなくなっちゃうよ?」

「そうだな、ではサナトスさん俺たちはこれで夕食くらい食べていきなよ。ハリンガルまではワシが転移魔法を使って返してあげるから」

「ん~、ならいいかな。どう~おにいさん」

「あ、ああ。では、お言葉に甘えて」

断るのは何か悪いしな。

「そう、よかつた。んじゃ、早速夕食にしちゃおつか? 食堂に行くからついて来て」

そう言ってイスから立ち上がり廊下に向かって歩き出るサナトス。うわ~、やっぱ滅茶苦茶デカいな~。

「行こ~おにいさん」

おり、と応えてサナトスについていく俺たち。

・・・・夕食が虫料理でないことを切にねがうね。

40 なんか、ギャップがあります（後書き）

次回予告

潤「次回は夕食が何かによつて俺のモチベーションが変わつてくるな…テンションの低い文章が読みたいなら夕食が虫料理である事を祈つてくれ」

4.1 なんか、どうなんでしょう（前書き）

今年最後になるであろう投稿。

みなさん今年、とこいつでも11月からですか？今年はあつがひとつ
ございました。

どうぞ来年もよろしくお願いします。

41 なんか、どうなんでしょう

さて、夕食が虫料理じゃなかつたからアゲアゲでいくぜー！ハハハハッ！

・・・え？ これはこれでウザイって？ ジャ、やめます。

サナトス、ヴェル、俺の3人で和やかな雰囲気の中進んだ夕食は1時間ほど続いた。その後、ヴェルが帰るとサナトスに伝え、転移魔法でハーリングガルの入り口まで送つてもらつた。

「そういうやヴェル、サナトスの事苦手とか言つてなかつたっけ？」

「うーん、優しいし良い人なんだけど見た目が怖くて…」

「なるほど、それについては同感だ」

「なんせ俺が3人分くらいのデカさの骸骨だからな。

「それにあたしやおにいさんには優しかつたけど、気に入らない人に対しては迷いなく命を奪い取るからね…プロミネントギルダーの中でも1番強いから、オジサンを止められる人なんていないし」「いかにも強そだつたけど、あの人が1番か」

「戦場でオジサンが1歩進むと100人の命が散るつて言われた程だしね」

「もはや別格だな…」

「そりや恐ろしい。あ、俺はこのまま城に戻ろつかと思つけど、ヴェルはどうする？」

「するとヴェルは一瞬の迷いを見せ、次の瞬間には決心したようになんか思つてあたしの話を聞いてくれる？」

「と、尋ねてきた。

「ん？ おう、いいよ」

「何の話だ？」

「おにいさん、あたしの名前が何だか分かる？」

「当たり前じゃないか、ヴェルの名前はノルティ・タリス。俺が普

ロミネントギルダーと出会いを避けていると知つて、嫌われたくないヴェルは名前を偽つて友達としての対等な付き合いを目指した

「……知つてたの？」

「おう、確信したのは魔天剣とかいうプロミネントギルダーと戦つた時だけだ」

「もうしろあれだけヒントがあれば嫌でも気付いちまうだろ。」

「そう、あたしがプロミネントギルダーかもって思ったのはいつから?」

「最初に城の庭で会つたときからだな、俺はこう見えて気配察知能力に優れててな、大方の人の気配には気付くんだ。だがヴェルには気付かなかつた。つまりは相当な手練れ、もしくはプロミネントギルダーの上位にしか使えないらしい転移魔法の使い手つて事だからな」

「なるほどね~、おにいさん頭いいね。で?どうある?あたしとは関わらないようにする?..?」

「はあ、まったく

「セレンの時といい今回といい、何でお前らは本当の事を俺が聞いたからつて、突き放すと思つてるんだ?」

「そこで俺は一息おいて

「これからもよろしく頼むぜ?俺の友人、ヴェル」

「一息おいた方がカツコいいだろ?え?そうでもない?さいですか。」

「おにいさん…これからもよろしく!じゃねつ!」

「そう言つと、姿が揺らいで消えていった。」

「うん、子供は元気が1番」

「と、訳もなく爺臭い事を言つて俺は城へと向かつた。

「無事国書を届けられたようじやの。苦労をかけた」
「ここは謁見の間。俺、女王、メイドさんが揃つてゐる。」

「いえ、行きも心強い味方がいましたから、帰りはサナトスさんに転移魔法で送つてもらつたので」

「ほつ、あのサナトスが。いや、それよりも心強い味方とはノルティの事かの？」

「やはりあなた方でしたか。ヴヒ、いやノルティの言つてた追つ手とは。アイツが嫌がつてゐるんで止めていただけませんか？」

「それは・・・・無理なそ…」

ガキンッ！－

そんな音を伴つて俺の魔剣オルギヌスとメイドさんのフォークが交差する。

フォークつて、そんな物で俺の斬撃を防いだとか俺の心が立ち直れないです。はい。

「武器をお收めください。ジュン様」

ぎらついた目で俺を見てくる。

怖つ！思わず武器を收めたくなつちまつ。

「そういうわけにはいかなくてな。前世と同じ過ちは繰り返すつもりはない」

前世についてはあまり聞くなよ？色々あるんだよ。

「前世に何があつたか知らぬが、そこまで言つならいいじゃねり。条件を満たせばもうノルティを探すことはしない」

「条件つてのは？」

「お主に力が無ければそんな綺麗事に意味はない。シリチナと戦い勝つてみせよ」

「なるほど、そうしましよう

何で強気なの？俺。勝てる要素ないよね？」

「よく分からぬが、オレとジョン君の模擬戦といつ事でいいのかな？」

南側の庭に呼び出され、行くとそこにはシリチナと女王とメイド

さんが立っていた。

「え？まあ、はい」

模擬戦なんて聞こえは良いが、要は俺とシリチナのガチバトルだろ？やりたくねー。

「ルールとしましては、制限時間10分、魔法での攻撃は許可いたしません。しかし特別魔法はその限りではないので、存分にお使いください。勝利の条件としましてはどちらかの戦闘不能が認められた時となります。なお、引き分けの場合はジュン様の負けとなります」

「えっ！？引き分けでも俺の負けなんですか？」

相手はプロミネントギルダーなのに。

「シリチナ様はプロミネントギルダーでも実力は下から2番目、第9位となりますので、少なくともシリチナ様に勝てないようでは、これからノルティ様を守るのは無理かと」

「はあ、分かりました」

そう言って魔剣オルギヌスを持つて前に出る。

「シリチナ、手を抜くでないぞ？」

「承知しております」

そう言ってシリチナも前に出る。

「では、始めてください」

静かに言い放ったメイドさん。それと同時に身体能力強化をかけ、魔剣に魔力を込めた。

さすが魔王の魔剣。黒刀より扱いやすいぜ。

「黒鴉！」

通常の3倍の速度で赤い、いや黒い魔力が飛んでいく。

しかし

「遅い、遅すぎる」

そう言ってシリチナは突つ立ったまま（恐らく目に見えないスピードで剣を振つて）黒鴉を散らした。

「くそつ、闇世界！」

つて事で魔剣の取扱い説明書に書いてあつた剣技『N-001』だ。俺の厨二力を総動員して闇世界と名付けた。

「くつ、なんだこの技はっ！」

効いたみたいだな、良かつた良かつた。

「食らえ、闇針」

俺からはシリチナがよく見えるので、楽に狙える。ズドドドッと音がして、シリチナを土煙が覆つた。

「やつたか？」

あれ？これ、やつてないフラグじゃね？

「はあ、油断したよ。まさか開始早々この技を使わされるとは、やっぱフラグだつたのか…そこには無傷で立つシリチナの姿があつた。しかしどこか変だ。

「気配が、変わった？」

なんとなく雰囲気が違うといつか何といつか。

「久しぶりの感覚だつたよ。本当に久しぶりにヤバいって思えた。でもねジユン君」

そこでシリチナの姿が消えた。

「オレもタダでやられるわけにはいかなくてね」「後ろか！」

そう思つた俺は魔剣を背後に向かつて難ぐ。キンッという澄んだ音と共に剣が交わつた。

「くつ」

苦悶の声を上げる俺。対してシリチナは

「ほう、良い反応だ」

余裕そうです、はい。

「転移魔法なんていつ…」

「勘違いしないでほしいな。オレの身体は転移魔法なんて使わなくとも十分に速く動ける」

筋肉バカが、と心の中で悪態をつき鍔迫り合いを解消するため余

つているだけで

「闇針」

をシリチナに放ち、互いに距離をとる。

さて、どうするか…

4.1 なんか、どうなんでしょう（後書き）

次回予告

潤「来年に戦闘が持ち越しつつ……しつくりこないな）。つて事で次回はシリチナとの後半戦だ。あ、ところで俺の作った年賀状を発売するぜ！買いたい人は……え？発売しないの？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239z/>

気まぐれセカンドライフ

2011年12月31日17時47分発行